

〔表紙〕

忠義公史料 明治元年正月 一

〔扉に、表紙の文字の外に市来四郎編の記載あり〕

目録

- 一 藩吏大坂ヨリ江戸芝藩邸ノ事変ヲ内報ス正月朔日
- 記 西郷吉之助ヨリ蓑田傳兵衛へ贈ル書正月朔日
- 木場傳内ヨリ藩老へ宛タル書正月朔日
- 西郷吉之助ヨリ大久保一蔵へ贈ル書正月朔日
- 参照 大久保利通日記節録
- 参照 寺師宗道日記節録
- 舊邦秘録江戸田町藩邸事変

落合直亮來歴節録

一 茂久公九條家參集ヲ辞ス二月二日

記 本書

一 徳川内府朝命奉行ニ付會・桑所置ノ上、内府上京スヘキ旨ヲ尾州・越前へ内命セラル二月二日

記 奉命書

舊邦秘録

参照 春嶽私記節録

土方久元日記(尾州・越前両老公大坂ヨリ帰京、

徳川前内府事々御受ノコトヲ記ス)

一 新納刑部神戸ヨリ江戸事変及ヒ京攝ノ形勢ヲ藩地ニ報

告正月二日

記 新納刑部報告書并ニ別紙江戸事変報告

参照 寺師宗道日記節録

一 大久保一蔵外國交際條約締結ノ旨ヲ各国公使へ通知セ

ンコトヲ建議ス二月二日

参照 大久保利通日記節録

一 大久保一蔵決戦ノ趣旨ヲ岩倉副總裁ニ建言ス

記 西郷吉之助ヨリ大久保一蔵へ贈ル書翰

全上

参照 大久保利通日記節録

一 大久保一藏参朝シテ三條輔相・岩倉議定・東久世参与二
処分ノ数条ヲ陳シ、又有栖川総裁宮ニ申シテ決行ス正月三日

記 要旨

参照 大久保利通日記節録

一 徳川家従兵上京ニ付嚴ニ警備ヲ令セラル正月三日

記 本書并ニ別紙(尾・越へ坂兵引払ノ令ナリ)

参照 大久保利通日記節録

一 伏見口警備ヲ嚴重ニスヘキノ命

記 本書

参照 長州藩へ御沙汰書

寺師宗道日記節録

一 加藤遠江守京都市中巡邏ヲ免セラル正月三日

記 本書并ニ藩吏通牒

一 茂久公病ヲ勉メテ参内正月三日

記 本書并ニ藩吏通牒

参照 大久保利通日記節録

新納嘉藤ニ書翰節録

土方久元日記

一 仁和寺宮軍事総裁ヲ兼ラレ、守衛其指揮ヲ受クヘキヲ

命セラル正月三日

記 留守居届書

一 仁和寺宮出征ニ付従兵ヲ令セラル正月三日

記 本書

一 西園寺鎮撫惣督丹波口出張ニ付従兵ヲ命セラル正月三日

記 本書

一 軍事総裁嘉彰親王征討大將軍ヲ拜セラル正月四日

記 仁和寺宮諭達

参照 大久保利通日記節録

土方久元日記節録

一 伏見・鳥羽戦争ノ情况ヲ藩老ニ通知ス正月五日

記 本書并ニ藩吏添書

一 有川七之助戦況ヲ同席藩吏ニ通報ス正月五日

記 本書

参照 寺師宗道日記節録

一 宮門警衛ヲ嚴重ニスヘキヲ達セラル正月五日

記 本書并ニ藩吏通牒

一 西郷吉之助戦況ヲ報シ大久保一藏ニ謀リ又大坂ノ形勢

ヲ通ス正月五日

記 本書并ニ木場傳内書牘

参照 林甚助・海江田市太郎前ノ濱へ入津直話

外務省記節録

春嶽私記

伊地知貞馨略歴節録

松永清左衛門宿許狀節録

一大久保木場ノ書ヲ領シ開戦等ノ次第ヲ報スル書ヲ齎ラ

シ、帰藩之ヲ伝フルコトヲ託ス正月五日

記 本書(蓑田傳兵衛へ宛タル大久保ノ書ナリ)

一戸田大和守至忠徳川慶喜ノ討薩ノ表ヲ上ル

記 大坂ニ於テ檄文并ニ奏狀二通

参照 春嶽私記節録

中村武雄手記節録

岡谷繁實來歴

七一 大坂ヨリ江戸芝藩邸ノ事變ヲ内報ス

慶應四年正月朔日、藩吏大坂ヨリ江戸芝・田町藩邸ノ事

變ヲ内報ス、

(記)

徳川氏大坂ニ拠守シ、陰然京都ニ對抗シ、物情洶々々

り、朝廷令シテ警備セシムル所アリ、偶々去夜秋田藩

ノ脱士高瀬權平・楠英三郎藩邸ニ來リ、留守居附役遠武

吉藩次秀行ニ面シ、去臘二十五日江戸芝・田町藩邸焼撃ノ報ヲ

伝フ、是ニ於テ藩士憤激益々敵情ヲ加ヘタリ、時ニ西郷

吉之助書ヲ側役蓑田傳兵衛ニ致シテ、其事由ヲ報セリ、

西郷ヨリ蓑田ニ贈ル書

昨夜出羽秋田藩高瀬權平・楠英三郎と申者、御留守居

方付役遠武吉二方江參申出候ハ、両人之者共外ニ五人、

君侯御上京之論偏ニ相立候処、用人之奸物相拒、逆も

勤 王之道不相行、終ニ斬奸ニ及、身を御邸内ニ相投、

田町御屋敷江潜匿いたし居候て、蒸氣船之出帆を相待

罷在候処、廿八日出帆被相究居折柄、廿五日朝關太郎

參申聞候は、只今酒井忠常内藩主手勢并歩兵、上御屋敷

を取巻、御留守居江面会致度段承候、就てハ此内より

御屋敷内江被召置候浪人共、可引渡との趣と相見得候

付、穩ニ談判可致含ニハ候得共、如何様變ヲ引出候も

難計、此上ハ七人之御身上、大事を抱居られ候御方之

事故、暫ク邸内を相逃呉候様承候付、無拠相去候折柄、

早田町江掛候時分より炮声相起、品川辺江參候節ハ、

最早火手も起候付、直様其尽上京仕候次第ニ御座候、

外五人之者共ニハ、跡之成行得と見届候上、罷登候様申付、罷越候との趣にて、大ニ驚駭いたし候仕合ニ御座候、右様之變動故、一左右可申越道も有之間敷、畢竟廿三日御城出火、翌廿四日迄焼通し候由ニ御座候、

就ては右出火之起、浪士共江不審相掛候義欵、甚暴動之次第ニ御座候得共、何分様子不相分候付、早々探索之者差出候義ニ御座候、江戸ニおひて諸方江浪士相起、動乱ニ及候趣ニ被相聞候間、必諸方江義挙いたし候事欵と、被相察申候、京師ニおひても相響候趣と被相聞、爰許にて壮士之者暴発不致様御達御座候得共、いまた訳も不相分、何れを可正筋も無之、其内決て暴動ハ不致段、御届申出置候義ニ御座候、全体九日以来之処、大ニ旧幕之輩相悪居候義ニ御座候へハ、早ク江戸之浪士ヲ倒し候策欵と被相察候義ニ御座候、百五十人計罷居候て、決て暴挙いたす賦とハ不相見得、京師之挙動ニ依り、如何様共可致との様子にて、乙名敷罷在候趣ハ、近比迄相聞得居候処、右等之恐れ有之、先をいたし候もの欵、残念千万之次第ニ御座候、何分細事不相分候付、委敷相分候ハ、又々可申上候、其内荒々相知候丈申上候間、左様御含可被下候、蒸氣船之義ハ、

其節ニ臨出帆いたし候共、又ハ焼亡ニ及候共申事ニ御座候へ共、虚実不相分事ニ御座候、以上、

西郷吉之助

正月朔日

蓑田傳兵衛様

〔大久保利謙氏所蔵本にて校訂〕

七二二
時ニ大坂留守居木場傳内、出入商人ノ探聞書ヲ添テ、江戸田町藩邸ノ事変ヲ通セリ、

木場傳内届書

去月廿三日朝、酒井左衛門尉様御屋敷へ、御当家様御家来之趣ニテ御越相成、何欵御駈引有之候末、酒井様ヨリ幕府へ右御人数御召捕被成度旨被仰立候処、御差支無之段御達相成候付、酒井様ヨリ当御屋敷へ御人数被差向、右御家来御渡可相成旨御引合相成候得共、御承知無之、翌廿四日又候御引合相成候得共、同様之御儀付、翌廿五日御名前不相知、拾四家様御人数、三ヶ所御屋敷御取巻戦争ニ相成、多分御討死、残御人数ハ、品川ニ御碇泊之御軍艦へ御退相成候処、幕府御軍艦ト又々沖中ニテ戦争相成、右戦争中幕府ヨリ当御城へ御注進相成、未勝負ハ不相分ト申御文通ノ趣、右ニ付昨

夜御評議之上、米ル四五日比ニハ御上洛相成、右等被仰立大事件ニモオヨヒ可申ト風説承候、猶幕府之御模様内々探索仕、相変候儀モ御座候得ハ、早々可申上候、以上、

別紙写之通、御出入惣年寄江川庄左衛門ヨリ為知越候付、相認此段御届申上候、以上、

辰正月朔日
大坂
木場傳内

御家老中様

(島津忠義家記所収)

再報、^{七一ノ三}弥々事情ヲ確ムルニ仍リ、転々人心騒キ立テリ、

西郷乃チ木場ノ報書ヲ封シテ、之ヲ大久保一藏ニ致セリ、

西郷ヨリ贈大久保書

別紙之通申来候、弥相違ハ有之間敷、昨日出羽秋田藩之者、潜伏いたし居候処、俄ニ立去候様承、夫形上京いたし候由ニテ、中途ニ出懸候処、早炮声を聞て参候趣ニ御座候、当分之處ニテ逆も御困者ニテハ、江戸江出懸候義も相調申間敷候へハ、海江田手先之者、探索方として江戸迄被差遣候義ハ、如何可有御座哉、御船も廿五日出帆之處、廿八日ニ延居候との咄ニ御座候、是

以相失ひ候致も不被計候、此旨早々奉得御意候、頓首、

正月朔日

大久保一藏様

西郷吉之助

要詞

(大久保利謙氏所蔵本にて校訂)

又藩人伊牟田尚平・浪士落合清一郎・坂田三四郎の三人、^(炭焼)紀州熊野浦九木湊より同乗の同志者に分れ、陸路紀州・大和を経て、三日夜に京着、四日西郷に面して、関東の情況を報したり、

【参照一】

大久保日記明治元年戊辰

大久保利通日記

戊辰正月元日 雪降

今日迄ハ所勞ニテ不参、江戸表御邸変事ノ次第、大坂町便ニテ飛脚屋等ノ紙面相達、晚景西郷へ差越、

【参照二】

寺師宗道日記節録

正月七日

一江戸芝屋敷江被召置候浪人八拾人之内、小船三艘ニ取乗、翔鳳丸へ乗付候処を幕舟より砲放、二艘打沈め、死亡相成り、残は安房・上総の方へ流れ候由、兒玉彌

右衛門此時上陸定て戰死ならん(按兒玉四二就キ後有サレタリ)

一四日之夜、御留守居篠崎彦十郎を酒井左衛門尉所江呼出にて、浪士一条相札候由、不帰着内ニ御屋敷を囲ミ

候由、大名拾四頭之由、是は水戸蜂起相成り、殊ニ薩摩屋敷抱候浪人、手当相成候折節、翔鳳丸着舟相成り、

是又兵を乗襲来候風聞にて、至極之動敗ニ及候事之由

二候、

一(金中原本十一行省略あり)江戸にては廿五日戦争、機関師(上)老入・土官老入死候由、

(翔鳳丸砲戦ノ事ナラン)

一江戸より前廿四日晚、浪士二人(高瀬權平楠英三郎)為一左右京師

江遣ス、老入は秋田浪人、老入は久留米之者之由ニ候、

關太郎より申聞遣候由、老入不着にて、外老入は行衛

不相知候由、定て途にて摘杯ニも候半欵、

一老女三人廿三日比御暇、花野申開之為登城出掛候処、

途中にて西丸火之手上引返ス、

一廿五日未明より芝邸取囲、寄手ハ酒井左衛門尉・松平(忠篤、庄内藩主)

伊豆守外(信廣、上山藩主)二十二三頭之由、事柄承接之央三田御物見よ

り火起ル、放火ならん、夫より混雜成立、双方戦争浪

士輩鎗・長刀(柄九)にて、西御門口より切出、両度寄手を切

破り候由、詰合之人数は不殘打死之由ニ候、蘭牟田昌

平も此時紛れ出、京都江参り候由、

一定府人数為迎、柴山定介京師より被遣候由、(長助)実は彼之

浪士一条之由ニ候、

一御屋敷数櫻田・芝・澁谷・高輪・田町・并佐土原之小山六ヶ所計一時ニ焼討相成候由、定府人数舟江乗後れ候者、老若男女幼稚之無差別殺害之由、実ニ無体之任業と申事也、

一西丸出火は、浪士之手を以為焼候事之由、御国浪人伊

藤四郎右衛門・中村幾之介なと云者共、頭取之由、

【参照三】

等師宗道日記(東京大学所蔵)にて校訂

舊邦秘録

江戸田町藩邸事変

江戸御留守居篠崎彦十郎事、公義ヨリ御用申来候得共、

暫時御猶予、直ニ芝御屋舖へ火ヲ掛、焼立候ヨシ、其

上酒井左衛門尉手ニテ、幾重々々モ取囲居、篠崎氏戦

死、其外翔鳳丸乗頭白石仲左衛門、横目ニテ是モ戦死

ナラント申事ニテ候、

【参照四】

落合直亮来歴節録

十二月三十日(慶応三年)

此日風波不安なりとて船出せず、依之伊牟田氏(平)陸より上京せんといふ、我も共に出立、坂田氏(三四)も同伴の事に決す、

直亮外二名紀州九木湊より上陸、上京経過地名、

十二月晦日 紀州尾鷲組九木浦 同野地村 同相賀組便

山 同古本村 同船津村 同熊野 中黒村(同脱力) 同上黒村

正月元旦(明治元年) 同馬瀬村 同長晴組三浦村 勢州長島浦

同間弓村 同阿曾村

同二日 同天ヶ瀬村 同川俣七日市村 同川俣波瀬駅

和州鷲家駅 同宇陀駅 同櫻井駅 同三輪駅 同丹波

市駅

同三日 同南都山城木津駅 同玉水駅 同長池駅 宇治

村 京都東山に到着、

同四日 京都鹿兒島邸に至り西郷氏ニ面謁、次に五條家

に至る、

七二二 茂久病ニヨリ九條家参集ヲ辞退ス

正月二日、茂久病アリ、九條家参集ヲ辞退ス、

(記)

本日九條家邸ニテ、徳川家処分ノ會議アルニヨリ参集ヲ
伝ヘラレタリ、然ルニ茂久ハ病アリ、之ヲ辞ス、西郷・

大久保参邸、大久保ヨリ會津・桑名ノ兩藩ニ歸藩ヲ命セラ

レ、慶喜独り上京アラシコトヲ主張セシモ、土佐・肥後

兩藩士ヲ始メ、尔他ノ藩士中異議ヲ唱フ、議遂ニ決セス

翌日ニ及ヘリ、遂ニ尾張前大納言勝慶・越前宰相永慶ニ伝命

セラル、ニ至レリ、

茂久公所旁届

一御用之儀候間、今二日巳刻九條家へ参集可仕旨、蒙命

候得共、所勞ニ付御断申上候、此段宜敷御執 奏奉願

候、以上、

正月二日

(島津茂久)
薩摩少将

七二三 尾張・越前へ上京スヘキ旨ヲ内命セラル

正月二日、徳川内府朝命奉行ニ付、會・桑兩藩帰国処置

ヲ了へ上京スヘキ旨、尾張・越前へ内命セラル、

(記)

去年十二月二十六日、尾張前大納言勝慶・越前宰相永慶朝命ヲ

帶ヒテ大坂ニ至リ、即時大坂城ニ登ル、尾張前大納言病ニ

罹り、家老成瀬隼人正肥正代リテ登城シ、越前宰相ハ徳川内府ニ面シテ朝議ノ次第ヲ詳述シ、危急ノ情勢ヲ勸告アリ、内府之ヲ諒セラレタリ、越テ二十八日ニ至リ越前再登城アリ、内府病ニ仍リテ面セス、老中板倉伊賀守勝代テ左ノ請書ヲ付セリ、

辞官ノ儀ハ、前内大臣ト可称、御政務御用途ノ儀ハ、天下ノ公論ヲ以テ御確定可被遊ト之

御沙汰ノ趣、謹承仕候段、可然可被申上候事、

御政務御用途ノ儀ハ、天下之公論ヲ以テ御決定、

皇国高割ヲ以テ相供候様不相成候テハ、臣子ノ鎮撫行

届不申、容易ニ御請モ難申上候間、其段厚御心得御尽

力有之様致度候事、

越前尚速ニ上京、奉命人心ヲ安スベキ旨ヲ勸告セラレタリ、同夜越前家人中根雪江賢師ヲ走セテ、京都ニ内報セシメ、同二十九日尾張・越前大坂ヲ発ス、同晦日京着、夜ニ入り越前参内シ、輔弼中山大納言能忠ニ面シテ、内府奉命ノ次第ヲ陳シテ、左ノ奉命書ヲ上ラレタリ、

奉命書

今般

御沙汰御座候両事件ノ趣、慶喜へ申聞候処、謹承仕候

旨申出候、此段申上候、

十二月

尾張前大納言

越前宰相

本日ニ至リ、朝議内府ノ奉命ヲ容ラレ、更ニ朝命奉行トシテ上京スルニ先チ、會津・桑名両藩ヲ帰藩セシメテ、鎮定ノ趣旨ヲ表スベシトテ、尾張・越前ニ内命セラレタリ、

旧邦秘録

尾張前大納言

越前宰相

両藩迄御用意ノ廉、徳川内府愈奉行可致候趣、全尽力ノ事ト被思召候、就テハ両事件、上京自身言上ハ勿論ノ儀、其上参朝、御沙汰ニモ可相成候ヘドモ、外ニカネテ言上ノ會・桑田國ノ儀、早々及所置候後上京可然、則鎮定ノ道顯然ニ付、旁此段取計有之候様、御内命候事、

【参照一】

春嶽私記節録

廿六日慶應三年十二月丑半刻御着坂、午半刻頃御登城相成、尾

侯ハ御船中ヨリ御発瘡ニテ、御手間取有之、暮時前御

着船ナリ、公御登城ノ上先ツ伊賀殿・永井殿へ御逢、
夫ヨリ内府公へ御対面、

〔板倉勝助、老中〕〔尚志、若年寄〕
〔大河内正重〕

朝廷ヨリ御渡ノ御書面御直ニ被差上、伊賀殿・豊前殿・
玄蕃殿侍座有之、相濟候テ 廷議ノ外艱難ノ運候処、

土侯並下院ノ有志周旋尽力ノ次第、逐条被仰上候へハ、
内府公ニモ殊ニ御感激ニテ、夫程ニ時機到来之事情へ

ハ、坂地ノ儀ハ如何様ニモ被成御請モ、品能可被仰上、
御上京モ可被成ト、御内談ハ粗御取極ニ相成候へ共、

余リ速ニ御発表相成候テハ、却テ御輕易ノ姿ニテ、人
心如何ト御斟酌ニテ、明日ナト御請可然歟ノ御談ノ由、

尾侯ハ御所勞ニ付、為御名代〔正肥、尾州藩邸家老〕成瀬隼人正登城、御目見
被仰付、從

朝廷御沙汰ノ御書面御直ニ指上之由、永井殿・戸川殿
雪江へ逢対京状被相尋ニ付、二十三日・廿四日ノ 廷

議並結局迄ノ次第、逐一委曲ニ及物語候処、如何ニモ
危急千万ノ形勢ナリキト驚歎セラレ、其模様ニテハ、

是非共御上京無之テハ、難相濟トノ示談ナリ、二十七
日巳刻、西本願寺掛所尾侯御旅館へ被為入、昨日當中

ニテ内府公ト御直談ノ御次第御物語ニテ、二侯迄ノ御
書面御差出ニ相成候ハ、夫ヲ二侯ニテ御引直シ、御

書取御 奏聞ニ相成可然トノ御談ニ相成、夫ヨリ直ニ
御登城ニテ、伊賀殿初へ御逢御談ノ処、唯今於御前永

井・平山両参政執筆ニテ、御書面御取懸リニ相成居、
未定ノ事ニ御座候間、今日ハ御退出、明日御登城ノ上

トノ御談ニ相成、扨麾下モ大半鎮定ニモ相運ヒ候間、
御上京モ御都合次第、緩急共御請可被成御模様ノ由ナ

リ、二十八日午刻御登城ノ処、内府公御所勞ニ付、御
請書ノ儀ハ、伊賀殿ヲ以テ御差出有之候、如左、

辞官ノ儀ハ、前内大臣ト可称、御政務御用途ノ儀ハ、
天下ノ公論ヲ以テ御確定可被遊ト之 御沙汰ノ趣、

謹承仕候段、可然可被申上候事、
御政務御用途ノ儀ハ、天下ノ公論ヲ以テ御決定、

皇国高割ヲ以テ相供候様不相成候テハ、臣子ノ鎮撫
行届不申、容易ニ御請モ難申上候間、其段厚御心得

御尽力有之様致度候事、
尾侯へノ御請ハ、成瀬隼人正へ御渡ニ相成由相濟、於

御床御対面有之、右御請書ハ両侯へノ御書面故、尾侯
ト御相談御引直御書取ニ相成候上、御奏聞可被成ト被

仰上候由、此節御上京ノ御程合御伺ノ処、如此相成候
上ハ京地ノ御都合御安心ノ段、両侯御請合ニテ御申越

被成候へハ、何時ニテモ御上京可被成旨、御上京ノ上御参 内迄ノ処、等閑ニ御日間取レ候様ニテハ、又人心ニ關係致候間、其御程合御見据へニテ、雪江ヲ以テ被仰越候様ト御直約被為在、御退出相成、右ノ次第尾候へ被仰入、御請書モ御廻ニ相成候処、大ニ御安悦、明朝御帰京ノ御積ノ由、夜半頃尾候ヨリ中村修之進被遣、過刻御廻ニ相成候、御請書ハ公御持参ニテ、御上京相成候様御頼ニテ、御返却ニ相成ル、

同私記節録

二十九日帰京為御案内、雪江昨二十八日暮大坂出船、此日午刻頃上京御復命ノ儀、為申上参

朝ノ上、岩倉殿拜謁、内府公無異儀御請書モ尾・越兩人迄被指出候付、今夕乗船明日上京、午後参 内可及復命ニ付、右為御案内雪江差出候段申達候処、卿ニオイテモ御安心御大慶ノ旨、早速可申上ト御申聞有之、又内府公御上京ノ儀、如何ト被相尋候付、鎮撫出来次第上京ノ儀ハ兼テ申上置候事ニテ、即今御請モ相濟候事候へハ、何時ニテモ上京ノ心組ノ様子候へ共、又朝廷ノ御都合モ可被為在ニ付、其儀ハ大藏^(松平慶丞)大輔相合、イツレニモ明夕可申上ト申述退出ス、晦日巳半刻過、

毛受鹿之介御先へ着邸申聞候ハ、夜来逆風ニテ、御船進ミ兼ネ、今朝辰ノ半刻過、伏水へ御着船相成候へ共、御供船ハ多分着不致由、依之何レニ御入京御延引ニ可相成候へハ、申半刻迄ニハ御参 内可被遊、万一夫ヨリ後レ夜ニ入候テモ、是非御参 内ハ可被遊旨ヲ相合罷越候由ニ付、昨夜ノ為御答、永田儀兵衛ヲ以テ上院参与迄御届指出シ、尾候へ伊藤友四郎ヲ以テ、前文ノ次第被仰入、御参 内難被成候ハ、御請書御文段筆削ノ全権ヲ為御持、隼人正御差出ニ相成候様被仰遣之、午後尾候ヨリ御参 内難被成ニ付、隼人正被指出段、田中國之輔ヲ以テ被仰越之、申刻頃公御帰邸、申半刻過御参 内有之、然ル^(殿仁親王)処総裁宮御初已ニ御退散、中山^(忠能)卿御残りノ由ニテ、御一人ノ御請ニテモ可然哉、又御評議ノ筋ニテモ有之事候ハ、宮始可被召集哉ト、雪江迄御尋ニ付、今日ハ復命迄之儀ニテ、別段御評議相願候筋ハ、有之間敷ト及御答候処、無程於 小御所中山殿並御居残ノ議定・参与御列席、公成頼隼人正ト御一処ニ御出席、中山殿迄御復命御書面差出ニ相成、中山殿御落手ノ上御列座ノ御方々へ御廻シ有之、中山殿ヨリ徳川内府ヨリノ御請書、明元日総裁宮始御申談、可

被及御奏聞、段々御周旋御行届ノ旨、御挨拶有之由、公ヨリ内府公御辞官御手続御伺ノ処、追テ從

朝廷可被仰出欵、又ハ此御請書ニテ相濟可申哉、尚又御評議可被成トノ御答ノ由、

【参照二】

旧邦秘録

土方久元日記

慶應四戊辰年明治改曆九月四日改ム

正月小元旦今朝雪亦晴

朝拜如例、昨夜ノ残雪誠以テ美麗ナリ、旅中ノ事ナレハ、元旦ト雖モ何ノ礼式モ無之、只一統宿中ニテ、酒共吞ミ候テ相賀候事、三條公ニモ今日ハ御參 内被為在候、六時過頃御帰館ニ相成候、夫ヨリ拜謁被仰付候、尾州老公・越前老公大坂ヨリ一昨日ト昨日トニ御帰相成候所、徳川前内府殿ニモ事々御受申上候由、

七十四 新納刑部江戸邸事変及ヒ京攝ノ形勢ヲ報

告ス

正月二日、家老新納刑部神戸ヨリ江戸邸事変及ヒ京攝ノ

形勢ヲ藩地ニ報告ス、

(記)

藩老新納刑部帰藩ノ途次、兵庫ニテ江戸ヨリ翔鳳丸來着シテ、江戸藩邸ノ警報ヲ伝へ、大坂ヨリ平運丸來着、同地不穩ノ情況ヲ伝フルニ仍リ、即チ急使ヲ發シテ之ヲ藩庁ニ伝ヘタリ、

七十四ノ一

旧邦秘録

今日翔鳳丸江戸表ヨリ廻着イタシ、江戸表挙動別紙之通申出、尚今夕大坂川口ヨリ平運丸御国許へ廻船之為出帆之処、別紙之通次第二ニテ、平運丸ニハ当港へ入碇イタシ居、明日之処、臨機応変之所置イタシ候様相合居候、就テハ速モ平運丸ニハ無事帰帆イタシ候儀、無覺束候旨、御用封丈撰分候賦ニテ、御連名之御用封拙者相開見候上、新納喜之助へ足輕志人相付、陸地早々出立為致候付、当港之次第モ御聞取可給候、今日モ幕兵三小隊位モ大坂ヨリ下着イタシ、守兵等夥候様子、昨今浪花之形勢不相分、京師之形勢尾・越ノ両侯只管御尽力相成候由候得共、中々平穩之御所置ハ、弥以無覺束、明日当所之一挙如何ト齒切罷在候、此旨御掛合申越候、以上、

辰正月二日

新納刑部

島津(久松)圖書殿

桂(久松)右衛門殿

小松(清麿)帶刀殿

川上(久松)龍衛殿

町田(久松)内膳殿

追テ可申越儀モ有之候得共、夜明候ハ、不幸之儀故、
差急候付、大略迄申越候、

〔島津忠義家記所収〕

七(四ノ二)

旧邦秘録
明治元年正月

別紙

一去ル廿五日朝五ツ時ヨリ、江戸三田通・西御門通・表
御門通・銅御門通、松平山城守様・間部様・酒井左衛
門尉様其外、公儀役人多人数具足・鉄砲・拔身・刀鎗・
大砲備立、大目附衆又ハ御使番衆之間、篠崎彦五郎殿
長屋へ被參、御談央三田通御物見ヨリ、此御方へ罷居
候浪人共ヨリ鉄砲打掛ケ申由、夫ヨリ外堅固方ヨリ大
砲御物見へ打込、双方ヨリ戦ニ相成、私共被召置候御
長屋鉄砲打込、出火相成、固メノ人数モ過半死人・手
負モ御座候、此方モ浪人上下死人モ二十人余モ御座候、

一篠崎彦五郎殿儀ハ、公儀役人同道ニテ、御長屋被罷出
候、何方へ同道被越候事ハ、今日迄ハ分リ兼申候、

一勤番定府人数之儀ハ、手向イタシ候者ハ、打捨候者モ
御座候、手向モ不致候者ハ、身分ニ応シ堅人数ニテ、

何方ニカ引渡申候由、私共早朝ヨリ外方御用有之、差

越罷帰掛候処、右次第其場ヲ漸々相凌キ罷居申候付、

当日ヨリ姿ヲヤツシ、市中之風聞氣寄ヲ以テ承合申候

処、御国敵ト見做シ、此比ニ至リテ被仰渡候御通達モ、

此御方様・松平安藝守様・松平土佐守様不及御達候段

被仰渡候由、此節之異変ニ付テハ、都テ御藏迄モ火ヲ

掛、御長屋同断之仕業ニテ、勤番定府大小着ノ俣ニテ、

其場ヲ遁候次第、込入居申候、

一私共儀ハ、金子等モ余計ニ兼テ持合無御座候、公儀御

要意勤考ニ付テハ、仕度モ漸々一度位出入町人所へ忍

モラヒ位ニ御座候得共、此上ハ早々御手当ニ相成、御要

意御出陣御尤ト奉存候、其内私共身ヲ忍ヒ、公義御手当

向委曲実正之所ヲ承合置申候、其上ハ我々身ノ上ハイ

カ様ニ相成候テモ苦敷無御座候、誠ニ残多次第御座候、

一浪人者共、御屋敷へ何様之筋合ニテ、諸方ヨリ參り候

哉、兼テ御留守居衆勤番定府へハ、御知ラセ一切無御

- 座候、私共ニモ何様成御用之向ニテ多人数入込、朝夕三度ツ、御賄酒ハ望次第被下由承居申候、就テハ此節之儀ニ付テハ、右人其死ヲ究、十死一生之働ニ相見得、我共儀ハ兼テ何之要具等モ手当イタシ候儀モ、為御知無御座候、其外人数罷居候御長屋へ、一切入込無用ト御達ニ相成申候、
- 一 高輪御屋敷別駕車町 焼払ニ相成、御長屋へ罷居候者ハ、何様相成候軟承合候へ共、今日実正分り兼申候、高輪御屋敷辻番人迄モ、公義役人引渡候由、軽キモノハ繩掛、士分ハ繩不相掛由、此節之儀ニ付テハ、兼テ何モ不致者ハ、下々迄モ難儀仕候事ニ御座候、
- 一 上野増上寺ハ御大名御固メ、内外之見付ハ都テ占切相成申候、
- 一 右御差図之御掛リハ稲葉之由、
- 一 御三方公義余程御ウラミ由、色々外方評判仕申候、
- 一 立花直記殿ハ被死候由承候、其外付役衆ハ、何方ニ被罷居候哉、実正分り不申候、
- 一 御蔵金モ過分焼失之由、
- 一 一米モ過分同断之由、
- 一 市中へハ、浪人ハ薩摩ト見受候へハ、早々申出候様、
- 一 巖敷被仰渡候哉、御出入町人共へモ、最早薩摩者参リ居候ヲ見当リ候得ハ、踏込召取可致由申渡御座候段モ承候、
- 一 三田島津様 三田小山末藩佐七原邸 モ、同日御固メ人数ヨリ、大砲打込火ヲ掛焼払ニ相成、今日大圓寺へ火ヲ掛可申トノ段モ承候、
- 一 櫻田御屋敷 内寺町上屋敷之ヲ表東屋敷ト云フ 之儀ハ、去ル二十五日固メ払ニテ、火ハ掛不申候、
- 一 芝御屋敷近所へ、酒井様固メ出張一ヶ所昼夜御座候、
- 一 二ノ丸天璋院様御住居、薩摩浪人火ヲ掛候様、外方専評判ニ御座候、
- 一 見付外浪人・薩摩人ハ、見当次第捕方イタシ、其方掛役人諸所へ相廻申候由、御出入町人方ハ、市中目明共被掛置聞合央ニテ、夫故私共儀ハ、昼ハ氣ヲ付夜ハ時分ヲ見合、諸所へ様子ヲ替へ、公義之要意聞合方仕候、
- 一 浪人計召捕候儀ニ御座候へハ、是非ナキ次第奉存候へ共、御屋敷へ態々火ヲ掛、都テ払ニ相成候テハ、何共残多至極奉存候、殊ニ酒井勢ハ三千人余ト申評判ニテ、松平山城守様四十人位、間部様三十人余位之由、
- 一 高輪御屋敷之儀ハ、表長屋ハ都テ焼失ニテ、内残居申

候、御殿廻り残居申候由、右旁私共不被參場所へハ、
政田屋嘉兵衛并仲藏(以下欠文)

七四ノ三
旧邦秘録

新納刑部殿ハ当分兵庫へ潜居之ヨシ、京都ノ辺不相知
候間、書役ノ欄寝(マ、マ)ヲ京都へ被遣候得共、被
遣限リニテ、往来塞申候ヤ、為何左右モ無之、夫故丹
波路ニテモ差越候半、井上新右衛門被相嘶候由、

正月七日記ス

七一五 大久保利通条約締結ノ通知ヲ建議ス

正月二日、大久保一藏外国交際条約締結ノ趣旨ヲ、各国
公使ニ通知スル事ヲ建議ス、

(記)

復古ノ趣旨ヲ各国公使ニ通知スルノ議アリ、朝議決セ
ス、此日岩倉議定規具、大久保ヲ招キ之ヲ議セントス、議
定朝議ノ決セサルモ、必ラス之ヲ断行スルノ決意ヲ告ケ
ラレテ、布告ノ草案ヲ依嘱セラル、依テ大久保案ヲ具シ
テ之ニ応へ、其断行ヲ促セリ、議定之ヲ衆議ニ付スニ異

論ナク、遂ニ決セリ、然レトモ尋テ伏見・鳥羽ノ戦役起
リテ発令ニ及ハス、同月十五日ニ至リ、更ニ各国公使ト
兵庫ニ会同シテ、之ヲ伝フルニ及ベリ、其草案ヲ載ス、

【参照】

大久保利通日記節録

正月二日

今朝自岩倉公被召候ニ付、西郷へ託ス、十字比岩下氏
へ差越、西郷モ来ル、外国御布令一条云々

朝議六ヶ鋪、乍去是非今日 御決議可被為在候付、草
稿相認差出候様ト之事ニテ左ノ通、

政權返上被 聞召候上ハ、外国交際之儀於

朝廷条約御取結可被為在候儀、当然候間、百事御治定
之上御談判之品モ可有之、差当リ

王政ニ被為復候御廉、御布令被遊度 思召候付、兵庫
滞留各国公使、京地へ御呼登相成候間、是迄之手続モ
有之事候付、上京候様可相達御沙汰候事、

但日限之儀来ル十日限上京候様、被 仰付候、御受
之届早々可有之候、

右一通岩倉公へ持參、尚亦御談決之事言上候、
今日ハ於九條家 朝議被為在候付、第一徳川家へ御達

ノ儀專要ノ事候間、評議御承知被成度トノ御事候、會・桑婦國ノ次第モ可有之候事付、是非右取計ノ上、上京候様御達可然旨言上イタシ、尚西郷へ參、長兩士へ參ル、留主ニテ西郷同道九條家へ出仕、

一外国御布令一条、断然別紙草稿通御決議ニテ、下参与中へモ被相下異論無之候、

(按) 三年十二月晦日、尾張・越前両侯朝旨ヲ徳川慶喜ニ伝フルヤ、慶喜命ヲ奉シ代リテ奉命書ヲ上ラル、故ニ此日朝廷ニ於テモ事未切迫ナラス、尚多少頼ム処アリシナリ、然ルニ薩邸攻撃ノ報伝ハリ、事態一変シタルナリ、

七一六 大久保利通決戦ノ趣旨ヲ岩倉副總裁ニ建

言ス

^{七六ノ一}正月三日、大久保一藏決戦ノ趣旨ヲ岩倉副總裁ニ建言ス、

(按)

二日以来ノ形勢穩ナラス、土佐・肥後等諸藩ノ去就明ナラス、到底事ノ破綻ヲ免レサルヲ認メ、大久保一藏ハ決戦ノ趣旨ヲ書シテ、西郷ニ贈リ、以テ朝議ヲ定メント欲セシ際ニ、偶々西郷ヨリ書ヲ贈リ、坂兵戎装伏見ニ着到、

勢危急ノ情状ヲ告ケ、大久保ノ出邸ヲ促セリ、

今晝伏見出張之坂本廉四郎より問越候趣ハ、會井松山・志州・鳥羽之人数、戎装ニテ着伏相成、登京之節有之候付、土州・長州と相談いたし、一応可及談判、勿論何分

朝廷より之御沙汰被為在候迄ハ、相扣候様可取押候へ共、押て罷登候ハ、防戦ニ可及との趣申遣候付、早々出殿仕様子相待居候事ニ御座候、いまた長州之引合処ニテハ無之、二ノ手續出し等之手配にて御座候、早々御出勤可被成下候、いまた為何模様ハ不相分候、形行ハ

朝廷江御届申上置候間、左様御含可被下候、此旨御報迄早々如此御座候、頓首、

正月三日

大久保一藏様 西郷吉之助

要詞

(大久保利通氏所蔵本にて校訂)

^{七六ノ一}大久保藩邸ニ到リ、西郷等ト議シ、決戦ノ意ヲ決シテ藩論ヲ定メ、大久保岩倉副總裁ニ至リ、昨來ノ情況ヲ陳シ、断然朝議ヲ決セラレンコトヲ切言シテ、建言スル所アリ

タリ、岩倉之二同セラレタリ、

又西郷ハ長州藩ニ謀議シ、攻守ノ戰略ヲ議シタリ、

井上別紙相認参り候間、正治(伊地知)江も談合いたし候

処、何も異存ハ無之との事ニ御座候、少々異同も有之

候得共、其辺ハ宜敷御弁解可被下候、一発直様玉を移

候義ハ、大ニ人心ニも關係可致候間、暫時ハ御見合相

成候方、宜敷ハ有之間敷との趣ニ御座候、西ノ宮江も

長兵四百計・備兵式百計、大洲之兵も罷在候付、是ニて

踏止候てハ、甚不利之訊ニ御座候間、西之宮之兵悉ク

繰上、一発するや否丹波之笹山を突候手筈ニ御座候、尾

之道之兵速ニ張出し、姫路を落し候策、又長国之兵ハ

速ニ藝地江繰込候様、手筈可致との事ニ御座候間、其

段御合居可被下候、此旨早々奉得御意候、頓首、

正月三日

大久保一藏様

西郷吉之助

要詞

(大久保利謙氏所蔵本にて校訂)

【参照】

大久保利通日記節録

正月三日

昨日来ノ次第熟慮候処、関東変事一条モ有之、必ス德

川慶喜趣意有之、上京無相違、且土初ノ形体甚不審、

今日ニ決セスンハ、大事差迫ルハ案中ト存、戦ニ決ス

ル紙面相認、朝廷ニ大事ヲ被為失、既ニ三大事ヲ被

失ントスル危迫之得失明白認メ、西郷へ及質問候、然

処伏見ヨリ報知有之、早々出殿候様返詞有之、則出殿

候処、昨日来坂兵會・桑等、大兵戎服ニテ、大砲・小

銃押立、追々着伏押テ入京候ハ、不得止及防戦候段、

届相達候由承ル、

一伏見応援二ノ手早々繰出相成候事、

一岩倉公へ参殿、断然 朝決可被為在必死言上、且愚考

紙面差上候、

七二七 大久保利通処分条項ヲ建言ス

正月三日、大久保一藏参 朝、有栖川総裁宮、三條・岩

倉副総裁、東久世参与ニ数条ノ処分条項ヲ建言ス、

(記)

形勢刻々迫ルニ依リ大久保参朝、三條・岩倉・東久世三

官ニ面シ、刻下ノ処分ヲ申稟シテ決行ヲ請へリ、三官之

ニ同意セラレ、尚総裁宮ニ請ハシメラル、大久保参殿請

フ所アリ、其条項ノ要旨ニ曰ク、

一外国公使ニ上京ヲ命セラル、事、

一叛逆顯然ニ付、本藩・土佐・尾張・安藝藩へ、禁闕守衛ヲ命セラルベキ事、

一仁和寺宮へ征東將軍ヲ命セラレ、禁闕守衛ヲ督セラレ、伏見ノ情状ニ依リ、進軍アラセラルヘキ事、

但節刀ヲ賜ヒ、錦旗ヲ捧ラルベキ事、

一高野山屯集ノ官軍へ大坂城攻撃ヲ命セラルベキ事、

但紀州藩へ官軍ニ合力大坂ヲ責メ、王事ニ勤勞スベ

シトノ命アル事、

一備前山岡・因幡取鳥へ徳川家叛逆頭ハル、トキハ、征討ヲ

命セラル、ニ由リ、本国ニ於テ用意シ、王事ニ尽スベ

キ事、

一列藩へ御布告ノ事、

一平戸・大村・佐土原・藝州・因州・備後・彦根へ、東

兵防禦ヲ命セラルベキ事、

一尾州・越前へ禁闕守衛ヲ命セラレ、国兵ヲ召集セラル

ベキ事、

宮追条容ラレタリ、大久保即チ参内、三條副總裁ニ禀ス、時ニ諸官ヲ参集シテ、討幕ノ英断ヲ討論スルモ、諸官多

クハ遲疑シテ決セス、大久保・西郷等ノ議ヲ排スルノ傾

向ニシテ、又言ヲ交ユルモノナシ、偶々鳥羽口ノ砲声轟

キ戰報達スルヤ、人々色ヲ失ヒ殆ント挙措ヲ失フモノアリ、夜ニ至リ官軍ノ捷報伝フルヤ、挙朝色ヲ直シ、遽ニ

大久保・西郷ノ議ニ賛スルニ至リ、事々皆大久保等ノ意見ニ決スルニ至レリ、

【参照】

大久保利通日記節録

正月三日

一外国へ上京被命候儀、断然御施行之事、

一伏見迄大兵ヲ繰出シ、且會人數黒谷へ追々クリ出シ入

候付テハ、叛逆不可疑候付、

禁闕へ警衛土・尾・藝・御国へ、早々改テ御沙汰ノ事、

但兼テ四門警衛蒙命有之故也、

一仁門公仁和寺宮親王へ早々征東將軍ノ命ヲ下サレ、今日ヨリ戎服ニ

テ、禁闕警衛之人数指揮被為在、伏見一左右次第御進

軍之事、

但進軍ノ節、節刀ヲ給ハリ、錦旗ヲ飄シ、官軍ノ威

ヲ輝シ候事、

一高野山屯集之官軍華城へ追討可責落命ヲ被下候事、

但紀州へ同断御達、本文官兵合力同心王事ニ勤勞イ
タシ候事、

一備州・因州へ徳川叛逆之色相顕、追討被 仰付儀モ可
有之候間、於本国用意イタシ、事有ルノ日

王事勤勞可致、早々御達可有之事、

一列藩へ大ニ御布告之事、

一平戸・大村・佐土原・藝・因・備・彦根へ東兵防禦被
命候事、

一尾・越へ 禁闕警衛被命人数及不足候ハ、早々国兵
クリ出シ候様、

右参

朝ノ上、岩倉卿・三條公・東久世公へ差出、尚言上イ
タシ候処、有栖川宮へ早々言上候様被仰付、則參殿言
上候処、一々 御同意被為 在候事、

早々参

朝右次第條公へ言上、

一尾・越・土・藝・宇和島公参

朝、君公御同断、

七時分鳥羽街道戦争ニ及候段報知有之、伏見モ同断ノ
事（開戦ノ報石室秘稿参看）

一追々官軍勝利賊退散ノ注進有之候事、

今夜徹夜、

四日

一昨夜寸時モ座スルコト不能、

七一八 幕兵上京ニ付キ朝廷警備ヲ嚴令セラル

旧邦秘録

正月三日、朝廷徳川氏ノ從兵上京ニ付、警備ヲ嚴令セラ
ル、

旧邦秘録

薩州

別紙ノ通、尾・越兩藩へ被

仰出候ニ付テハ、坂上可引取候得共、万一押テ登京ノ

儀申立モ難計、其節ハ穩便応接ハ乍勿論、不得止時機

ニ至リ候ハ、別紙御趣意ノ次第ヲ以、所置可有之候

事、

正月三日

但長・土・藝等へモ同断被仰出候間、尚申合所置可
有之候事、

尾張大納言

越前大藏大輔

昨日ヨリ今晚ニ至リ、坂兵戎服大砲等携、追々伏見表へ出張ノ趣、如何ノ儀ニ候哉、不容易進退其俣難被差置ハ勿論ニ候得共、当前ノ周旋ノ筋モ有之、旁右人数早々引払候様取計可致候、若不奉命候得ハ、不被止ノ場合ニ付、為朝敵ヲ以テ御所置可被 仕候事、

【参照】

大久保利通日記節録

正月三日（続）

一土・長・御国人数三藩ニテ、於伏見坂兵へ引合、何様ノ訳ニテ御出張ニ相成候哉相尋候処、彼云、徳川氏就上京、先手被命上京イタシ候、我云、成程御先手ノ命御受相成候共、

朝命之旨有之、警衛イタシ候付、御上京ノ義何分

朝命有之迄ハ御扣有之度、若押テ御通行候得ハ、相応御会釈可申上云々、彼云、尚徳川役筋ノ者へ相談、何分可及御答ト云々、
右之趣相達候事、

七一九 薩藩兵伏見口ノ警備ヲ嚴命セララル

正月三日日本藩兵伏見口警備ヲ嚴重ニスベキヲ命セララル、
(記)

三年十二月晦日、慶喜尾張・越前兩家ヲシテ、奉命書ヲ上ラシメタリ、適々江戸田町邸攻撃ノ報ヲ得タリ、是ニ於テ會・桑兩藩ノ士主トシテ、討薩ノ議ヲ迫リ、終ニ討薩ノ表ヲ草シ、之ヲ諸藩ニ示シテ大ニ其兵ヲ徵シ、大目付瀧川播磨守具ヲシテ、表ヲ齎ラシ、會・桑其他諸藩ノ兵ト共ニ北上セシム、前軍伏見・鳥羽ニ至ル事聞ス、朝廷乃チ尾張・越前兩家ニ命シテ諭示、大坂ニ在テ後命ヲ俟タシメ、本藩及ヒ長州・土州・藝州三藩ニ命シテ、警備ヲ令セラレタリ、

七一九ノ一
旧邦秘録

薩州

坂兵出張不容易趣追々言上候ニ付、猶更伏見表防禦筋精々尽力可有之、尤早々人数相加、嚴重警備可致被仰出候事、

正月

追テ長・土・藝へモ同様被 仰下候事、

七一九ノ二
旧邦秘録

正月三日夜半御沙汰

長州

坂兵出張不容易趣、追々言上ニ付、尚又伏見表防禦筋
精々尽力可有之、尤早々人数相加、嚴重警衛可致被
仰出候事、

追テ土州・藝州へモ同様被仰付候事、

七一九ノ三

一二條城黒谷賊巢窟故、急速御払攘被 仰出度事、

自今以後賊類私ニ潜伏仕セ間敷旨ハ、洛中へ精細布
告ノ事、右へ御手ヲ被付候上ハ、山崎関取締方御吟
味（候カ）事、

一払攘御手当トシテ、一中隊差出可申事、

正月四日

本書正月五日大久保一蔵へ相渡、

【参照】

寺師宗道日記節録

（当時藩地ノ報聞ニ係ル、参考ノタメ載ス）

正月七日 晴

一前將軍ニは、去月十四日東帰之賦ニテ御暇、大坂江
引取滞在之処、廿五日方會津・桑名・膳所・大垣・
高松・松山等之人数召列、軍粧ニテ大砲押立候て、
大坂より伏見江登り相成り候由、又細川良之助（長岡護美）ニも、
一緒ニ出会上京相成候由、是は將軍兵トハ別揆ニテ
之由、同藩士津田（山三郎）讚三郎、年内より兵士引率上京相
成、参与も被仰付候由、

一伏見（途中二行省路あり）・桃山薩州、竹田街道越前、鳥羽作道尾州、山
崎海道土州、淀辺藝州、長崎も山崎辺江出張相成候
由、右之所々京師より堅出張相成候由、

一京師より尾州・越前此方之人数ニテ、伏見江堅出張
相成候由、赤塚源六（真成）春日丸より帰り申出候、今月四
日夜船より火之手見ル、伏見并ニ大坂之方也、

一京師此方之屋敷三十日之兵粮ありと云、余は下之關
江困有之候由、
（寺師宗道日記（東京大学所蔵）にて校訂）

七二〇 加藤泰秋京都市中巡邏ヲ免セラル

正月三日、加藤遠江守（泰秋、伊予）京都市中巡邏ヲ免セラル、
（大洲藩主）

加藤遠江守

右市中巡邏被

免候事、

(記)

留守居新納立夫ノ届書ヲ載ス、

御書附一通(前文)

但

加藤遠江守市中巡邏御免候儀、

右只今参与御役所ヨリ一人可罷出、御切紙ヲ以御達ニ

付罷出候処、非藏人松尾伊勢ヲ以被成御渡候間、可申

上候、申述置候、

右之通私共差支、御留守居付役勤永山左内相勤申候間、
(盜種)

相添此段申上候、以上、

辰正月三日

新納嘉藤二

伊勢様

(島津忠義家記所収)

七二一 島津茂久病ヲ勉メテ参内

正月三日、茂久参内ノ命ヲ蒙ル、病ヲ勉メテ参内、

(記)

徳川氏ノ兵漸次上京スルノ警報頻至スルニ由リ、朝廷諸

藩主ヲ召シテ処分ヲ議セラル、仍テ有栖川総裁宮命ヲ伝

ヘテ之ヲ召ス、

自昨日至今曉、坂兵追々伏見表へ出張、其実如何難計

候得共、何分不容易形勢ニ付、早々可有

御参

総裁宮御沙汰候事、

正月三日

追テ参与之人一同相召連、可有参

朝候事、

薩摩少将殿

斯ク有栖川総裁宮ヨリ、参朝ヲ促カサレタルモ、病ニ卧

シ辞退セリ、

伏見表へ坂兵出張ニ付、早々参

朝可仕旨

総裁宮御沙汰之趣承知候得共、所勞ニ付御断申上候、

此段宜敷御取成奉願候、以上、

正月三日

薩摩少将

留守居新納嘉藤二立届書ヲ載ス、

御書附一通(參朝辭退ノ書面)

但參 朝御断之儀、 御直名

右

禁中御仮建へ持參、非藏人中川對馬へ面会差出候処、
可申上置旨申聞候、

右之通私共差支、御留守居付役勤永山左内相勤申候間、
此段申上候、以上、

辰正月三日

新納嘉藤二

伊勢様(家老島津後
諏訪甚六)

(島津忠義家記所収)

時ヲ経テ、伏見・鳥羽兩道ノ急ヲ告クルコト頻ニシテ、
朝議又決スル所アラントス、尾州・越前・藝州・宇和島
ノ諸藩主漸次参内アリ、申刻七時乃チ
后四時鳥羽・伏見口ノ戰報
伝リ、事情益々切迫セシヲ以テ、茂久病ヲ勉メ、同亥刻
四時乃チ
后十時兵ヲ率ヒテ参内シ、同四日夜半ニ至レリ、

【参照一】

新納嘉藤二書狀節録正月三日

上様ニハ御野羽織・御小袴ニテ、御讓ノ八幡大菩薩ノ
御旗サ、セラレ、同夜四時分

御参内、翌夜九時御帰殿被遊候、拙者ニモ陣羽織着用、

御供イタシ其候、御所へ、内田ト詰通ニテ候、

【参照二】

旧邦秘録

土方久元日記

正月三日 晴

朝拜如例、今朝前田杏齋(元寇)来候テ承候処、暮兵追々伏水

駅迄進来候ニ付注進有之、薩・長共二人數繰出候由、

夫ヨリ(基修)壬生殿ニ拝謁致シ候処、格別ノ御談モ無之、夫

ヨリ同藩重役方ニ罷越候得共、一人モ不居、引取掛途

中ニテ承リ候所、伏水駅ニテ戰爭相初候由ニ付、銘々

用心共致シ候テ、自分モ物見ノ役被仰付、直ニ騎切(馬切)ニ

テ罷越、伏水ニテ薩州大山彦八ニ致面会、委細之ヲ承

ル、然ルニ賊ハ會・桑名歩兵等有之趣ニテ、既ニ残兵

ニ相成居候由、火勢ハ誠ニ以テ猛烈千万也、生捕モ会

人二人連来有之候、砲声ハ此所ト鳥羽街道トノ外無之、

夫ヨリ罷帰候処、西方ニ当リ火ノ手又々相見へ候ニ付、

又々斥候ニ行候所、畠山町ト申所ニ出火有之、商家二

軒計リ焼失、直ニ鎮火ニ相成候位ニテ、外ニ異議無之、

直ニ罷帰候、夫ヨリ御所ニ罷出候テ、通宵不眠、條

公ニモ今夜御所ヨリ御下無之候、

七三二 仁和寺宮嘉彰親王軍事總裁兼務ヲ命セラ

ル

正月三日、仁和寺宮嘉彰親王ニ軍事總裁ヲ兼ネシメ、守衛其指揮ヲ受クベキヲ命セラル、

(記)

本日伏見口ノ戦激シカリシモ、官兵薩・長擊テ之ヲ破ル、

是ニ於テ更ニ仁和寺宮ヲ以テ、軍事總裁ト為シ、議定伊

達少將宗・参与東久世少將通・烏丸少將光ニ參謀ヲ兼ネシ

メラル、伊達少將ハ參謀ヲ辞シテ軍ニ從ハサリシナリ、

旧邦秘録

仁和寺宮軍事總裁被

仰出候間、御守衛兵士奉

御指揮進退可致候事、

留守居新納嘉藤二ノ屈書ヲ載ス、

御書付(前文)

仁和寺宮様軍事

總裁被

仰出候儀、

右於

禁中御手前様被成御承知候付、相添此段申上候、以上、

辰正月三日

新納嘉藤二

佐次右衛門様(家老若下)

(島津忠義家記所収)

七三三 仁和寺宮征討ニ付本藩兵從軍ヲ命セラル

正月三日、仁和寺宮征討ニ付、本藩兵從軍ヲ命セラル、

(記)

開戦ノ事聞ス、朝廷仁和寺宮ヲシテ征東將軍トナシ、征

討ヲ命セラレ本藩兵ノ從軍ヲ命セラレタリ、

是ニ於テ本藩兵〔マ〕警衛トナリ、錦旗ノ奉持ヲ藩

ノ重臣ニ命セラル、茂久留守居新納嘉藤二ニ命セリ、

旧邦秘録

薩州

仁和寺宮為征東將軍御出陣ニ付、人数一小隊急々指出

候様、

御沙汰候事、

(附)

藩老朝命ヲ藩地ニ通セリ、其書牒ヲ附記ス、

旧邦秘録

仁和寺宮様

仁和寺宮軍事總裁等被仰出候旨、別紙三通之通從

朝廷被仰渡候付、向々へ申渡、別紙相添此段申越候条、
中將様被達御聴、其元申渡之儀ハ、何分モ可被取計候、
以上、

辰正月五日

島津伊勢(正兼)

嶋津圖書殿(久松)

桂右衛門殿(久武)

小松帶刀殿(雷藤)

川上龍衛殿(久松)

町田内膳殿(久松)

朱書

本文承知、達御聴向々へ申渡候、別紙扣置、此旨及御

返答候、以上、

辰三月十五日

川上龍衛

島津伊勢殿

旧邦秘録

正月三日昼時

宣下

軍事惣裁

右洛中御巡見錦御旗持御国重役へ被 仰付、新納嘉藤
次奉守、宮様御馬ニ御烏帽子、直垂ニ金御太刀・御征
矢、前後守衛御国兵隊へ被 仰付、御通奉拜候処、頭
之アカルモノ無之、

右之上東寺へ御宿陣、

以上、

七二四 本藩兵西園寺鎮撫惣督ニ從軍ヲ命セラル

正月三日、本藩兵西園寺鎮撫惣督ニ從軍ヲ命セラル、

(記)

仁和寺宮軍事總裁ヲ兼サセラル、ト共ニ、西園寺参与甲二
兵ヲ丹波口ニ督セシメラレ、藩兵ノ從軍ヲ命セラレタリ

(山陰道鎮撫記事参看)

(按)参与橋本少将梁突・参与助役柳原侍從光前ヲシテ、兵

ヲ大津口ニ督セシメラレ、緩急ニ備ヘラレタリ、

旧邦秘録

薩州

西園寺三位中將、為鎮撫惣督丹波口江出張ニ付、急々

人数一小隊可指出候旨、

御沙汰候事、

〔島津忠義家記所収〕

正月

征討將軍

二品親王

御印判

慶應四年辰正月四日

七二五 征討大將軍嘉彰親王戦士ニ勤功ヲ諭ス

正月四日、軍事總裁仁和寺宮征討大將軍ヲ拜セラレ、東寺ニ次セラル、戦士ニ勤功ヲ諭サル、

(記)

三日、伏見・鳥羽兩道ノ賊兵官兵ニ破ラル、是ニ於テ弥々征討ノ議決シ、仁和寺宮征討大將軍ヲ拜セラレ、東久世參謀、御旗奉行四條(隆調)・長谷兩卿(信忠)ヲ随へ、午ノ刻出テ東寺ニ次セラル、藩兵ニ小隊其他(之方)藩兵之ニ從フ、時ニ戦士へ勤功ヲ励ムベキコトヲ諭サル(征東大將軍記事參看) 旧邦秘録

藩老通牒抄

仁和寺宮様ヨリ御達御書付之写

此度征討之議ハ、神州之御存亡ニ関候儀ニ付、不肖嘉彰抛身命尽馬力之心得ニ候間、各抽精忠速ニ奏成功候様、依頼ニ候事、

右ハ同日昼比東寺迄御出張ニテ、猶同所御達相成、尤此御方ヨリ二小隊、外藩ヨリモ御供被仰付候事、但錦御旗御携之事、

〔参照一〕

大久保利通日記節録

正月四日

一 今朝来鳥羽街道危急ノ由風説有之候得共、四過益満・田中清右衛門報知有之、全ク虚説ニテ、三度之戦争 賊徒敗北之事、 一 昼時分鳥羽ハ賊徒打散ラサレ、伏見モ同断之由注進 有之、

一 今日四條卿、山崎へ為 勅使被差立候事、

〔参照二〕

旧邦秘録

土方久元日記

正月四日 晴

朝拜如例、今日亦砲声不止、併シ官軍甚盛ニテ、賊軍

次第二退候様子ナリ、追討將軍トシテ御室宮様、參謀東久世様、御旗奉行四條様・長谷様今日御進發、伏見駅迄御進ミニ相成候、

七二六 伏見・鳥羽戦争ノ情況ヲ藩老ニ通知ス

正月五日、伏見・鳥羽戦争ノ情況ヲ藩老ニ通知ス、

(記)

本日藩老家老座書役堀直太郎(為影)ヲ命シテ、京地ノ戰報ヲ藩地ニ報セシム、同十五日藩地ニ達シテ藩庁ニ報セリ、

徳川内府上京之由ニテ、去ル二日翌曉三日ニ至リ、坂

兵戎服・大砲等携、追々伏見表出張之趣相聞ヘ候付、

御別紙一印之通被

仰出、尤此

御方様ヘモ、御別紙二印之通被

仰出候付、早速伏見又ハ鳥羽街道筋ヘ、兵隊人数繰出

シ相成、鳥羽街道出張、坂兵ヘ右

御趣意ヲ以及応接候処、彼方モ蒙

朝命上京ト申偽、理不尽ニ押通り候付、砲發戦争イタシ、昨日迄入替々々々押寄及合戦候処、毎度坂兵致敗走、

且伏見之儀モ同様及合戦、是亦十分之勝利ニテ、追々坂兵引退候付致追討、薩・長合兵淀城迄押詰メ候段、斥候之者共ヨリ注進申來候、委細之儀ハ御家老座書役勤堀直太郎ヘ申含越候間、御聞届、

中将様可被達

御聴候、以上、

但殊之外戦死等モ相少ク候、此段ハ為御心得ニ申上候、

辰正月五日

島津伊勢

島津圖書殿

桂 右衛門殿

小松帶刀殿

川上龍衛殿

町田内膳殿

藩地ノ返翰ヲ載ス、

(朱)一本文致承知達

御聴、先便別段御返答申越通ニ候、不容易變動到来、彼是御配慮之程、致深察候、併御勝利ニテ、無此上御同慶存候、別紙扣置、此旨及御返答候、以上、

辰三月十五日

島津圖書

桂 右衛門

小松帶刀

川上龍衛

町田内膳

島津伊勢殿

〔島津忠義家記所載〕

七二七 有川七之助戦状ヲ同席藩吏ニ通スルノ書

同日有川七之助戦状ヲ同席藩吏ニ通スルノ書アリ、併載ス、

旧邦秘録

(上略) 正月五日立ノ飛脚、同十五日ニ着イタシ、左ノ通り、一昨三日七ツ過、伏見・鳥羽・竹田三方へ大合戦相始リ、敵ハ徳川勢并會・桑・松山・高松ト大勢、味方ハ薩州・長州・土州ノ三藩候得共、先薩・長ノ両藩迄ノ様成事ニテ、実ニ前代未聞ノ働キ、中々難述言語次第、壮士達ノ勇氣感スルニ余リアリ、夫故今日ハ七ツ時分過ニ終候半、淀小橋ヲ涉リ逃去リ、彼方ヨリ橋

ヲ燒候テ、追手ヲ絶候付、無致方戦ヲ止、城中ニ大砲

少ク打掛候得共、応砲無之、尤城ノ四方ハ悉ク灰燼ト

相成、炎天ヲ照シ、戰場ノ敵死体如山、足ノ踏所モナ

キ様ニテ、味方ノ両藩戦死式三十人位モ有之候半ト存

候得共、未点檢相調不申、昼時ヨリ〔嘉影親王〕御室宮征東將軍

トシテ、日月錦ノ御旗ヲ翻シ御出陣、東寺ニ御宿陣、

今日ハ淀城迄御出張、式正ノ御鎧ニ虎ノ毛ノ尻鞆被為

帶、御馬ニ被為召、誠ニ御器量骨柄勇々敷奉見、外ニ

東久世公并鳥丸公御同様、死体ヲ乗越シ御往還、実ニ

感心ノ至リ奉存候、今朝ヨリ淀責出張罷帰候処、飛脚

立ノ段承リ、其上堀氏〔堀直太郎ヲ指ス〕ヨリ御直達可被申候間、

荒々如此御座候、謹言、

正月五日

有川七之助

御同席様

【参照】

寺、師宗道日記節録

正月十六日(統)

同十五日晩御家老座書役堀直太郎着、尤六日朝京都出

立之由ナリ、

七二八 宮門警衛ヲ嚴重ニスヘキヲ達セラル

伊勢様

〔島津忠義家記所収〕

正月五日、宮門警衛ヲ嚴重ニスベキヲ達セラル、

(記)

本日賊徒潜伏ノ虞アルニ仍リ、宮門警衛ヲ嚴重ニスベキ旨ヲ命セラル、

賊徒潜伏投火之悪謀有之由、既昨夜両所ニテ召捕候趣

ニモ聞候付、宮門警衛之輩、各其場所相定申合候テ、

嚴重見廻取締候様可致事、

留守居ノ届書ヲ載ス、

御書附一通

但賊徒潜伏投火之悪謀有之由ニ付、嚴重見廻之儀、

右ハ九門へ御達ハ、過刻乾御門番兵御呼出ニテ、御達

相成候得共、右外々之御固メ場へ被仰渡候旨ニテ、非

藏人ヲ以被成御渡候、

右之通今晚

御所御仮建詰、御留守居付役遠武橋ニへ被成御渡候間、

御書附相添、此段申上候、以上、

正月五日

新納嘉藤二

七二九 西郷隆盛戦状ヲ報シテ処分ヲ大久保利通

二議ス

正月五日、西郷吉之助戦状ヲ報シテ、其処分ヲ大久保一

蔵ニ議ス、

(記)

西郷吉之助、書ヲ大久保一蔵ニ致シテ、戦況ヲ報シ、伏

見附近ノ鎮撫ヲ策問シ、大坂藩邸吏ノ去就、及ヒ平運丸

砲撃ノ情報ヲ通セリ、

今晚より淀城江取掛賦ニテ、二十拇ニ丁昨夜申来候故、

差遣置申候間、速ニ焼落し可申と奉存候付、淀之賊兵

退散いたし候ハ、直様八幡・山崎之御固ハ、官軍江

繰替被仰付候様、御達相成候処、御尽力被成下度御願

申上候、

一伏見之義、只今一二小隊を以相固居候由御座候得共、

只夫迄ニテハ不相濟事ニ御座候間、鎮撫之者久留嶋様

ニても被仰付候ハ、是を助けて如何様共鎮撫之道ハ

相立可申、いづれ小諸候ニても、君公出張居不申候て

ハ、土地之人心安堵も六ヶ敷候付、誰様ニても宜敷御座候得共、久留嶋様ニハ何方も不被仰付候ハ、折角之御願も御座候由ニ被相聞、何欵御勤被成度との事御座候間、卒度申上置候、

一 大坂より一人飛脚参り申出候ハ、御屋敷も白ラ火を掛、詰人数ハ都て御当地江罷登来候由御座候、道筋ハ丹波路欵、大和路欵之間にて御座候由申出候、二日大坂より平運丸出帆之処、徳川船二艘を以炮発いたし候付、兵庫港江乗入候由御座候、此旨荒々早々奉得御意候、頓首、

正月五日

(巻封)

大久保一藏様

西郷吉之助

要詞

(大久保利謙氏所蔵本にて校訂)

(按) 書中大坂ヨリノ飛脚ハ、大坂留守居木場傳内ノ通信ヲ云フナラン、別項就テ參看スベシ、

木場傳内ノ書信左ノ如シ、

七九ノ一

旧邦秘録

太守様愈無御別条恐悦奉存候、当御屋鋪へ差火イタシ候迄之次第ハ、別冊通ニテ、土地不案内之人モ有之候

付、伊地知壯之丞ト樺山平左衛門・寺島陶藏・福島新次郎、私ト税所長藏(寫)同伴之賦ニ申談、屋敷駈出候処、

一里計之所ニテ焰硝火移り、大雷声ヲ発シ、二三十間モシテ、御殿上火焰天ヲ焦シ候付、一先藤安吉次郎方へ差越、落着相究度、藤安差テ走セ行候処、前以ヨリノ風説ニテ、過半起居、半道ハ燈灯タヘス、火先ハ如昼、雑踏場筋ハ、十二藩之人数固メ居候事モ可有之、小道ヲ廻テ長堀へ出候処、土佐屋敷ハ高張出シ有之、近辺ハ歩兵等敷者諸所ニ立休ヒ居、直様藤安方江モ難行、廻リ道致候、道スカラ外場所へ相迦可申、長藏へ語ラへ候へ共、氣遣ハ無之候間、是非藤安へ差越へク、長藏申候故、廻リ道シテ藤安戸口ヲ叩キ候処、トナタト相答候間、拙者ニテ候、爰ヲ明ヨト申候得トモ不明故、税所長藏ニテ候ト申候得共、何トカ内ヨリ答候様子ニテ不埒明、其内ニハ前後へ氣ヲ付候処、土佐土藏へ蝙蝠ノ如ク、身ヲ軋シテ幸橋ヲ渡り、袴ヲ抜捨、何方へ可忍ヤ、道スガラ及工夫候得共、町人又ハ女タテ之処へ差越候テハ、自訴ニテモ被致候テハ相成間敷相考、タトヒ夜明ケ候テモ、一日位ハ大坂中ヲ行キ廻リ候テモ可被宜、夜中遠方ヲ差テ出候テハ、固メノ見咎

候ハ案中ト決心イタシ、往来ニテ夜ヲ明シ、当分ハ去
ル方ニ医者之風ニテ罷居候、寺島ニモ行逢ヒ一所ニ罷
在候間、左様御承知可被下候、

一其許三日戦争ハ、別紙通り承リ候得共、其事之事委細
不相知、潜伏之身無致方次第、就テハ御金御入用差見
得申候間、兼テ現金壹万五六千兩カクシ置候処有之候
付、今晚ハ右ノ方へ引合、為替ニテ都テ為差登候様、
手当イタシ可申、尤去ル二日仕立一万兩差上候間、相
届可申筈、此地金二万五六千兩余ハ有之候間、非常ノ
御儉約被成候ハ、当月中ハ潤沢ニ可有之候間、砂糖代
銀札預置候処有之候間、今月末相成候ハ、右ヲ以金
ヲ買為差登候様、計策イタシ置候由、此金買テハムタ
事金弥少ク相成申候間、今月末方相成候ハ、金目モ
治定可致候間、損亡薄キ賦ト相考申候、

一上屋敷ハ自火ニテ都テ焼失、蔵少々相残り居申候由、
町家類家ハ格別無之仕合ニ御座候、中屋敷ハ會津改ト
云札立居候由、大坂之義漸々ト探索強ク相成候場ニ御
座候間、金子調達之事ニ三月迄之処、計策残置候ハ
、当所へ長居イタシ候テハ、無謀ニ可有之候間、今
明日掛テ大坂ヲ拔出テ、藝・長へ差越、軍勢ヲ催シ、

且ハ御国元へ町便ヲ以テ、成行御届申上候様可致決定
イタシ候得共、探索方嚴敷候テ、其儀相叶申間敷也、
色々工夫イタシ居申候、

一別紙密書通信差上候間、御受取可被下候、

右書略

正月四日

木場傳内（滑告）

島津（久那）求馬様

西郷吉之助様（隆盛）

田尻（種賢）務様

大久保一藏様（利通）

七二九ノ一
一月八日付通信ヲ載ス、

木場傳内贈京師書

一去月廿三日江戸西丸ヨリ出火之事、廿五日炭屋彦五
郎ヨリ告来、三時限ヲ以京師へ申遣ス、

一晦日江戸芝御屋敷之變動戦争、サト（英國公使）共其
外ヨリ為知有之、京都へ三時限ヲ以届申遣ス、
（館通訳官）

一右ニ付テハ、当所城内之模様相変候儀モ可有之聞合
候処、今夜評決之上、三四日之内、一橋上京可有之
候間、諸藩其心得ニテ罷居候様、手当向申付候由、

尤此節ハ、イツレ戦争ヲ待居ルトノ事ニテ、時宜次
第当所薩摩屋敷へ砲発致トノ事、

一元且昼七ツ過、高森直助ヨリ遣シ候書状之内へ、切
迫相成リ候間、随分用心イタシ候様、サトーヨリ伝
言有之候事、

一今夜砲発之吹聴諸所探索ヨリ告来ル、屋敷屯集夜明
シ候事、

一二日七ツ過、恵美須屋甚七息ヲ切テ走り来リ、告テ
曰、今夜會津ヨリ御屋敷へ砲発ノ用意、極密有之候
間、為御知申上候トノ事、

一同刻津和野屋鋪周旋方小川勘左衛門ヨリ、竹村宗左
衛門方へ、今夜會藩ヨリ砲発ノ模様有之候間、用心
イタシ候様申来、諸所探索方ヨリモ同断報告致候付、
菓子売女婦へ金五円(四ツ)為取、夜五ツ時分ヨリ御堂辺探
索為致候処、彼方ニハ別儀無之、人数ハ過半城中へ
入込、残ル人数百人内外ニテ、至極静謐之段報知之
事、

一二日朝ヨリ城内勿論諸藩川陸ヨリ上伏、一橋進退駭
ト不相分、既ニ二兩日前上京、亦ハ肥後隊中へ今日
紛レ、上京トモ、又ハ城内へ相殘候トモ諸説紛々、

一三日ニ至リ右之通切迫之趣ニ付、會津押寄来候ハ、
御屋敷ハ此方ヨリ発火ニテ、有限之人数ヲ以一戦争、
上京ハ兎角相叶マシク候間、一往兵庫辺迄相開候様
可致衆評イタシ、御殿内へ有限リノ焰硝磚居付置、
火ヲ差候手当イタシ置候事、

一夜半時分安田鞆藏(前年銅錢鑄立ノ為メ抱入レノ者)屯
集場へ来リ申候趣ハ、道頓堀茶屋へ遊ヒニ差越、帰
掛候処、會津巡邏ヨリ咎ラレ、漸ク言遁レ、御堂辺
ヲ通り候処、御堂辺戦争起リ候吹聴ニテ、諸道具片
付大混雑之由申出候付、鞆藏事幕府方之間者モ難計
候付、鞆藏我宿へ帰候カ、又ハ外所へ行候哉、跡ヨ
リ付ネライ、若我宿へ帰り候ハ、幕人等来リ居候
事モ難計候間、道頓堀ヨリ帰掛道筋聞テ来レト申候
由、使ニテ屋敷ヨリ来リ候趣ヲ以テ、家内之様子伺
ヒ候様、仲仕武次郎へ申付候、帰サゲルニ如クハナ
シト衆評ニテ、黒田嘉右衛門細請・折田要藏秀年ヨリ程
能論相成、安田ニモ徹夜之筋ニ相成候事、前段安田
御堂辺混雑之咄ト、菓子売女報知并斥候ノ報知ト、
齟齬ノ所不審ナリ、

一夜半比見聞役中ヨリ申出候ニハ、京都イヨク戦争

- 相成候得ハ、上様藩主ヲ指ス御安否之程難計候付、皆々上京可致ト評決イタシ候間、如何可仕哉、安田轍蔵ヨリモ上京相進メ候由承候付、上様御馬前ニテ、生死相決度ト之事、尤之儀ニ候間、此上ハ上京致度人ハ上京、相殘度人ハ相殘可申、拙者ニハ御留守居之事故、此屋敷之落着ハ見届候上ニ無之候得ハ、進退難致段申断候処、此ヨリ溜方上京ノ用意頻リニシテ夜明ル、
- 一 三日朝黒田藩右衛門・折田殿へ上京ヲ進メ、駕籠ヨリ山崎街道、又ハ丹波街道都合次第ニテ、入京之筋ニ相決シ、朝四時ヨリ出立相成候、
- 一 夜明候処、見聞役方上京勢ヒ醒シ姿ニ付、イヨ／＼上京可被致哉相尋候処、御留守居其外相殘候人数モ有之ニ付テハ、先見合之筈ニ相成候由承届候、今夜又物淋シク相成候ハ、上京説相起ルコトモ可有之ト、残り方ノ人数ニテ咄合候事、
- 一 今朝伊東次右衛門等下坂、八ツ半時分ニモ候哉、春日丸江乗組候、
- 一 三日夜五ツ半時分、津和野小川ヨリ書面ヲ以申遣候事、

- 先刻譜代留守居呼出ニ相成、明早朝薩州誅戮之管候間、其用意可致、又別ニ外様留守居ヘハ、薩州追討之事ヲ伝奏衆迄、伺ニ相成居候間、明日朝廷ニハ
- 勅許可相成、其用意可致、且郡山・彦根・松山・高松・姫路等へ薩邸固メ被申付候迄也、
- 一 同日夜五ツ時分、伏見之方へ火相見得、探索之者差遣候処、伏見ニテハ無之淀之兵火ト申事ニテ、八軒屋船場へ頻ニ兵糧飯相運ヒ候様子ニテ、橋本辺長兵ヨリ淀へ寄候半坏推評イタシ、稍安心致居候、
- 一 四ツ時分、大垣出兵ニ從属イタシ候人足定、水主所へ參申候ニハ、右人足伏見ヨリ北海道ニテ、上京之途中東福寺辺迄一説ニ東寺辺ト云參り候処、戦争起り候ニ付、槍ヲ溝ニ棄候テ、跡へ逃歸リ、只今漸々着坂致候ト相咄候ニ付、兵火ハ伏見辺ニ相違無之事相知申候事、
- 一 御出入安田屋番頭、商用ニテ只今京ヨリ下坂イタシ候ト、申參リ承候処、弥伏見辺ニ相違無之ト申候事、
- 一 同夜九ツ時分、安田轍蔵參リ、弥明早朝十二藩へ被申付、此屋敷遠巻ニテ相固、屋敷及砲発可申旨、僅二十人ノ人数ニテ、防禦出来難ク、犬死イタサンヨ

り各方命ヲ全シ、上京相成候ハ、格別之大切ニ可相成、就テハ大垣留主居市川元之助ハ、兼々懇意ニ付、市川へ相頼明朝乱妨無之様、老中方又ハ會津へ申合候ハ、如何ト申事ニ付、京都落着迄当屋敷御留守居へ預置、乱妨等不致トノ事ニ候ハ、此策モ宜シカルヘク、何分衆評之上、早速福島新次郎ト安田同道ニテ、市川旅宿へ差遣候、一時計相待候得共、イマタ帰不申候、

一右之通弥明早朝御屋敷取囲ニ参ル、左右所々ヨリ告来リ候ニ付、見聞役共ハ兎角踏ミ留リ防キ候、詮無之者ナラハ上京イタシ、御馬前ニテ奮刀仕度旨、頻ニ申事ニ付、昨日申渡候通、拙者ヨリ申渡ニハ無之候得共、各方ヨリ望ミナラハ、上京可被致ト申渡候テ、一統へ途中用心金相渡出立爲致候、

一右出立モ程々ニ打立候様子ニ相見得、最後之人數等未出立不相成内、高鍋之士淺田某^{辰巳}但今淀ヨリ下坂致シ候間、戦争之模様見聞爲御知申上度、懇情ヲ以罷越呉候付、伊地知^{丞社}・拙者対面致シ承候処、右士ハ京地探索被申付、早船上京イタシ、淀ノ朋友ノ処迄参リ居候所、伏見ノ方砲声聞へ、火相見得候付、

家之屋根ニ上リ見、弥兵火ト相決、再上京イタシ度行掛候へ共、往来大混雜ニテ、淀之方へ逃歸リ候人而已、去ナガラ強テ参ラント致シ候処、途中ノ浪人ノ風情之者兩人罷居、姓名何藩ヲ問候付、秋月ト答候処、外様大名ハ通シ不申ト申候故、無抛引返シ候、淀ノ噂ニテハ、伏見ノ薩邸へ會津兵挾ミ打致候由ニ付、御屋敷ハ御難渋ト被察候、併桑名・幕歩兵大敗走ノ様子ニモ見受候ト申候、

一八ツ半時比安田・福島兩人罷歸リ申出ルニハ、市川へ出会、前刻評議之主意申込候処、市川承知之上、直様登城、良久シク有之候テ、罷歸リ返答イタシ候ニハ、登城之上、閣老へ右趣申込候之処、別テ繁用ニテ隙取候儀不叶、追々時刻モ遅成候付、無是非罷歸ル、乍併決シテ、暴発等イタシ候事ニハ無之段、元之助申居候由、安田・福島^{新次}申候得共、閣老聞届無之候、付テハ何様間違相成モ難計候間、此方ヨリ屋敷焼払、可立退評決イタシ、安田ニハ早々罷歸候様相達候事、

一既に鷄鳴ニ近付候間、居付之者及仲仕共へ、金子致配当、早々立去リ候様申付、跡ニ伊地知^{丞社}・税所

長・寺島藏・樺山・福島・拙者六人相残り居申候、尤

居付書役杯ハ不残上京為致不申、夫々知己之方へ立去候様支度為致、直ニ火薬ニ点候手当相改候事、

一少シ前ニ轍藏頻ニ嘆息致シ、燒候ハ甚残念、是非持留度旨申候付、然ハ拙者ニハ御留守居之事ニテ、一人相残、時宜次第之取計可致申候処、税所長藏御方残候ハ、拙者ニモ可相残ト申シ、外四人モ立退キ候気色無之処、轍藏私人相残申度承候得トモ、轍藏へマカセ候筋モ無之、何様計略有之候モ難計ニ付、安田ニハ早々帰り呉候様申渡候処、其何方へ差越候也、薩モ相見得不申候、時刻不移内ニ早ク火ヲ差シ、可立去ト同意相決候、

一其後火道ノ綿ニ火ヲ付、門外ニ出、一町程參リ候処、火薬ニ火移リ候音聞へ、又半町計參リ、フリ返リ見候得ハ、炎烟タチノボリ市人驚起致シ騒キ、跣足ニテ男女門外ニ飛出候、

薩邸ニ火起ルト呼バリ申候、

別紙四日附之通、相認置差上申度、色々手筈仕候得共、探索嚴敷、私共ニモ忍居候所へモ難罷居、大和川内之間へ諸所ニ隱忍ヒ承候成行、左ニ申上候、

一六日河内へ差越候途中、淀・枚方之方火烟盛ニ相見得候間、道々方角相尋候処、淀之城ト申候事、

一六日・七日ヨリ大坂市中之者共、大和路十三峠道々ヨリ、諸道具持運ヒ逃来候絡繹引モ切ラス、

一橋ハ四日、堺町奉行所へ十人計ノ人数ニテ、潜伏之噂モ有之、長持其外諸道具、境へ大坂ヨリ持運ヒ、早追ノ声絶ス、大砲三挺大坂ヨリ堺へ引候事、

一南都ニハ桑名人数騎兵百五十、上下六七百人、六日夜ニ掛リ參リ候処、同所諸道具諸所へ持運ヒ、大騒之由、然処八日未明ヨリ大将跡ヨリ着之筈候処、着無之トノ由ニテ、都テ伊賀路へ引取候由、

一郡山ハ、西大寺・尼ヶ辻辺薩・長之兵廻リ候トテ、大恐怖之由、

一長兵、甲山又天保山沖へ船ニテ出掛候噂有之、大坂中之人氣立變候トノ事、

一橋ハ、四百人計之異人ト、堺へ逃レ候トモ噂イタシ申候、然シ是ハ異人体ニ出立候カニモ申事ニ候、一異人ハ、都テ天保山川口ヲ差向、引退キ候トモ申候、一兵庫小豆屋ハ、幕兵取巻居候由、新納郡・五代助身上イカガト存申候、然シ今日迄切迫可相成候ハ、解

兵相成候半、

一大坂會・桑之探索方モ大方引取候由、今日承り申候、

一大坂城ハ昨日ヨリ明退キ候ヨシ、人足共立込盜賊雜

具盜事、勝次^{手籠}第^カト申候事、

一今日守口迄、勤王之兵下り候トノ評判有之候事、

一大垣ハ過半大和路へ引取申候事、

一鳥羽モ同断、

一會津ハ平野へ一往屯集、今日堺へ参り候トノ事、

一一橋ハ異船ニ乗込候トモ噂有之、又ハ紀州へ逃候ト

モ申候事、

一日月ノ御旗ヲ見ル賊兵開キ靡キ、藤堂反忠イタシ候

事、

一江戸者ノ兵モ有之候得トモ、一橋敗軍ニテ、器財入

之長持五六竿、大和路差シテ逃ケ、奈良へ預ケ度ト

テ、参り候ヲ見届候事、

一天満橋・天神橋ヲ引キ候巷説有之候共、偽説之由、

一兵庫春日丸戦争不相分、砲声一発兵庫へ聞得候トノ

事、

一米千石年内買入、請取方ハ正月ノ筈ニ究置候間、当

月中之御米ハ差支無之事、

一大坂米蔵ハ焼ケ候トノ事ニ御座候、焼候ハ、員數ハ

七八百石ニ御座候、

行之儀船手当モ出来候得共、大坂吹聴宜候付、取止

候事、

一税所・伊地知^丞等之落去、相分り不申候、京都へ

参り候人数ハ、藤堂反忠イタシ候付テハ、参り付候

事モ可有之哉ト存申候、

一昨夜ヨリ幕兵勿論、奉幕家之兵隊、右往左往ニ堺へ

逃込大混雜、今朝ヨリ出火ニテ、右之兵モ紀州差シ

テ引取り候トノ事、尤差火失火不相分、堺町家十分

一モ焼失相成候半トノ事、

右之通御座候間、御披露可被下候、以上、

辰正月八日

大坂

木場傳内

時在京師

島津求馬様

西郷吉之助様

田尻 務様

大久保一蔵様

【参照一】

國府本町

林 甚助

右甚助甥

海江田市太郎

右ハ辰二月六日三邦丸へ乗船、大坂ヨリ出船、兵庫へ
 四日、長崎へ五日滞船、同十八日晚、前ノ濱へ入津イ
 タシ、右市太郎直咄ニ、去十一月ヨリ、煙草為商売上
 坂ニテ、京都へモ罷登リ居候処、旧臘十二日晚方ハ既
 ニ戦争相初ル勢ヒニ候処、一橋十四日ニ出立下坂相成、
 其後市太郎ニハ晦日下坂、阿波屋茂兵衛所へ罷在候処、
 正月三日夕方ヨリ、伏見辺出火、夜分ニ相成、砲声無
 間断相聞得候間、荷物モ都テ土蔵内へ致格護、股引草
 鞋ニテ終夜不卧入候処、曉七ツ比御屋敷焼失ニ付、夜
 明候テ、五町位モ有之候間、脇差ヲ懐中へ入、手拭ヲ
 以ホウ冠リイタシ出掛候処、辻々へ五十人位ツ、堅メ
 居ニ付、町家へ走込、杖笠丸扱笠ヲ借受、道具運ヒノ姿ニ相
 ヤツシ、堅メノ側ヲ罷通候得共、無事ニテ御屋敷へ差
 越候得ハ、御国人ハ一人モ不相見得候付、其俣本ノ通

リ間屋へ歸り候処、先程八十人位拔身ヲ持、薩人ヲ相
 尋參候間、商売人八人參居候得共、今朝出去後一人モ
 不罷歸候旨、相答置候付、二町計有之処へ從弟罷居候
 間、其所へ隠居候様、尤列越參リ、其所二階へ隠居候
 処、其後其所へモ探索參候旨、又々亭主親類長堀へ有
 之逃込候、其後長堀モ探索ノ様相聞得、又々本ノ所へ
 逃込隠居候処、九日朝大坂城焼失ト申事ニテ、見物ニ
 可差赴ト兩人申談、前件通ノ支度ニテ、御城下へ差越
 候処、見物人多ク、人ニセカレ御城門ヲ入候処、土相
 詰不差通ニ付、塀ヲ越へ入候処、下人ト見得候者三人
 罷居、同所へ一列ニ相成、御城内見物可相廻ト申談踏
 入候処、向へ銃炮・筒袖・鉢巻・ミニヘルヲ持候者五
 十人計相見得候間、先へハ難通ト存、跡ヲ見掃候得ハ、
 同様ノ者五六人モ參候間、無致方向へ通掛候処、采配
 ヲ以相招キ參候様承リ、跡へ付越參り候処、火事場近
 方へ陣笠・ミニヘル余多捨有之、右ヲ持出候様被申
 付、五人ニテ取掛持出シ、山ヲ成候、大砲ヲ引出候様
 承リ、五丁位乍漸出候処、御城門ヲ明キ、見物人ヲ都
 テ入レ、大砲ヲ持出候様下知有之、多人數ニテ忽チ引
 出候由、右下知人ニ●ヲ付居候ヲ見付、長州人ニテ

可有之ト存付、下人へ何方ニ候哉ト相尋候処、長州ト相答へ候ニ付、致安堵ホウカムリヲ取り脇差ヲ対シ、薩人ト申聞候処、奇特ノ者ノ由、ミニヘールヲ一挺ニテモ被下度申聞候得共、是ハ不相成候間、和筒ヲ何程ニテモ取候様ニトノ事ニ候、昼過ニモ相成、空腹相成候処、長州人共兵糧ヲ食シ候ニ付、少シニテモ御分ケ給度申入候処、我々共ニモ空腹相成、難分配申、追テ外ニ可參ト被申聞、兵糧方へ差越、ニキリ飯一ツ貰ヒ喰シ候、城内へ残り人数ニモ候半、所々へ切捨有之候、城内蔵々いろは番付ニテ、四十余モ有之候、ミニヘール并大砲ハ都テ長州分捕ニテ、夥敷物ニ候、金蔵三ツ二ツハ不明、一ツハ長州分捕銀ノ竿金ニテ候由、翌十日ヨリ薩人追々下坂ニ付、又々城内へ差越、分捕品持越、兩日ニ銃砲十挺ツ、陣笠四ツ、馬柄杓二ツ、此ハ黒塗ニ桐頭丸菊ノ蒔絵柄迄モ付、分捕相成候由、市中屋敷へ米蔵有之、町人共踏込、米ハ勿論置・障子・鴨居迄モ相廻シ分捕候処、米ハ都テ差出候様、薩州ヨリ廻文ヲ以被申渡候処、御屋敷近辺へ都テ持出、山ヲナシ積立有之、薩州分捕ト札立居候由、

一天保山ヨリ塚迄、三里計新台場出来、大砲居付有之候

処、薩州ヨリ分捕相成候由、

一兵庫台場モ同様ノ由、

一大坂市中店ヲ閉チ居候処、十二日比店ヲ開キ、商売イ

タシ候様、薩州ヨリ廻文ヲ以テ御達相成、則店開キ賑

々敷相成候事、

一御屋敷焼失跡、船々水主等其外滞在人モ差越、瓦並焼

土持出家作則相立候由、

一三日晩戦争相初候間、大坂詰人数へ、邸ヲ致自焼相忍

ヒ候様、伏見ヨリ申来候付、諸道具持出塩硝ヲ入置、

大砲ヲ打込候半、如雷鳴動地震イタシ候処、則燃上リ

候由、詰合六十人計、船底杯へ被忍居候由、八日、九

日比諸所ヨリ出来、一人モ無怪我候由、尤千両入四百

箱位平野屋庄助所床ヲ廻シ、土中へ格護相成候由、長

キ土蔵ハ不致焼失由、

一橋五十人位ニテ、長持へ入、境へ被差越、酒屋へ立

寄酒ヲ為吞候様、茶碗ニテ冷酒ヲ吞ミ、亭主ヨリ飯ヲ

可差出ト申候得共、其俣ニテ紀州へ被差越候由、其節

金子二千七百兩肌付持越候得共、重ク候付、預ケ置以

後取ニ可遣ト被申置候由、然処右ノ儀ヲ宿ノ下女口走

リ、薩摩者聞出、御紋付挑灯ヲ張調差越、金子ハ不残

差出候様申掛、都テ取揚、茶屋遊等イタス由相聞得、
捕方相成候処、最早七百兩位ハ仕捨居、殘金御取揚相
成候由、

【参照二】

外務省記川勝近江守右
河内守書東

且今四日晝、当地坂大薩州蔵屋敷へ陸軍隊ニテ取圍、
一ヶ所ハ焼失、一ヶ所ハ乗取候処、米・砂糖等夥
敷貯蓄有之候由、

【参照三】

春嶽私記

雪江大坂中島邸へ着船ノ処、昨夜ヨリ薩邸火攻ノ聞エ
有之、嚴重ノ御手配ニテ、彼方角殊之外騒ケ敷杯物語
罷在候内、忽然トシテ地雷ニ発ス、是必ス薩邸ナルヘ
シト、楼上ヨリ望ムニ、果シテ薩邸ニ当リ失火セリ、
後ニ聞クニ、薩邸ニテハ勢ヒ遁レ難キヲ知り、昨日来
老幼ヲ為立退、諸具ヲ他所ヘ搬ヒタル後、火葉ヲ以テ
自焼セリト、

【参照四】

伊地知貞馨略歴

一明治元年正月三日、伏見・鳥羽ノ役起ルヤ、貞馨大坂

ニ留リ十日前二京、御留守居木場傳内君及ヒ税所長蔵君・
（舎生）

寺島陶蔵君等ト邸中ニ居ル、事逼ルニ及ヒ、自ラ邸ヲ
（宗則）

焼キテ、諸君ト共ニ各所ニ潜匿シ、事定ルノ後暫時出
京、正月下旬ニ帰国、藩務ニ就キ、翌月参政ヲ兼ネ、
藩政ノ改革ヲ再命セラレ、大目附ヲ廢セラレシヲ以テ、
其席ヲ以テ詰所ト定メ、御家老新納刑部君等ト之ヲ議
シ、凡ソ半年ニシテ終ル、

【参照五】

松永清左衛門宿許状節録正月十
五日

一去ル三日夜半過、大坂御屋敷會・桑其外押寄セ、兵
火之為ニ御殿蔵々都テ焼失、殘念千万、拙者ニハ前
々ヨリ御金才領ニテ相廻シ、右之始末不存位ニテ、
九日迄ハ詰所ヘ身ヲヒソメ、千辛万苦イタシ候得共、
強運ニテ父子共無恙罷在申候間、御安心可被成候、
其後ハ相変事モ無之、朝敵追討ニヨリ物騒キ候得共、
自反心可致候間、今通ニテハ軍ハ不相見得候共、一
橋・會・桑兵氣ヲ養ヒ、再上京難計候、

七三〇 大久保利通開戦ノ次第等ヲ報ス

(記)

本日、大久保一藏・木場傳内ノ書信ヲ領セシニヨリ、一日以降開戦ノ次第等ヲ報スルノ書ヲ贈リ、帰藩之ヲ藩庁ニ達スルコトヲ託セリ、

大久保一藏ノ返信左ノ如シ、

(鳥津久光)

中将様益々御機嫌克被遊御座、大慶奉存候、於御当地

太守様御同然被遊御座、御同慶奉存候、旧臘廿八日迄之形勢は、申上候通御座候処、徳川氏・尾公・越公之御尽力にて、両事件御受、上京之上被遂

奏聞と之趣、旧臘晦日言上相成候処、去ル二日猶亦

朝議被為在、兼て言上之會・桑未帰国不致候付、早々

帰国取計、鎮定之実跡挙り候上、慶喜上京候様、

御沙汰相成ル御評決ニ御座候処、例之通後藤ナド異論

相生シ、当日御運不相付候処、翌三日坂兵大軍伏見迄

進入会・桑・松山、戎服にて大砲押立、追々ニ到着、上京

イタスト之事故、兼て同所出張、巡邏被仰付置候三藩

ヲ以薩土・長、引合ニ及候処、徳川氏上京ニ付、先手之

命ヲ受、上京イタシ候と返詞にて、然ラハ

朝命ヲ以警衛被仰付置候付、何分御沙汰有之迄之間、御差扣可被成段申入候処、書通を以押て致上京候段、

相答候由、右引合之次第、当日早朝相達候付、則

朝廷江御届ニ及候処、尚尾・越江是迄之手続も有之候廉を以、断然大坂迄為引払候様、尽力可致旨ヲ以、早々

朝命有之、且兼て伏見出張之四藩江、尾・越江御達之

趣も有之候付、若背 命不得止時宜ニ及候節ハ云々、

御達之御紙面相下り候、然処同日七ツ時分、鳥羽街道

鵠橋辺にて始戦と相成、続て伏見奉行所辺及砲戦候

趣、追々注進有之、終ニ干戈と相成候次第ニ御座候、

一鳥羽街道之方見廻役と称し候得共、專會・桑之人數ニ

て、大砲等押立進入候間、此方より申入候ハ、

朝命を以通行不相成候段、一応は及応接候得共、押て

進入いたし候段相答候付、則砲発ニ及候由、固より於

伏見、三藩より引合押て入京之段、書通にて返詞有之、

押て通行候得は、及干戈候旨をも相答置たるよし候得

ハ、始戦之処ニおひても、曲直分明なる訳ニ御座候、

扱成敗之上ニおひても、連日之戦一度も敗軍無之、今

日淀城迄責詰、賊徒敗走、

官軍別て相振、淀も官軍ニ属シ候由、

一昨日

仁門公江征東將軍ヲ被

命節刀を賜り、烏丸卿・東久世卿〔通德〕江參謀被命、錦之

御旗ヲ被飄、未刻比御進軍被為在候次第、固より壯烈之

宮ニまし〜候得は、嚴威当りを払ひ、只々忝シケナ

サノ感涙ヲ催シ候外無御座候、昨夜東寺江

御宿陳にて、今日早々淀近辺迄御進軍被為在、誠雄々
鋪御振舞、

官軍之振起イタシ候ホド御親察可被成候、

一御国兵隊之猛烈進戰、誠ニ紙筆ニ難尽、聞ク人見る人

舌ヲ卷ザルハ無之候、初戰之処御大事ニ候得は、実ハ
握掌イタシ居候処、注進之度ことに捷軍ヲ

奏シ、

朝廷ニ奉對候ては勿論、諸藩ニ對シ候ても、

御国之美目無此上難有次第、御同慶此事ニ奉存候、土

藩ナトモ十分之戰ニ不至、合力一体、決死ヲ以憤戰ス
ルハ長而已ニ御座候、

一山崎固メ藤堂にて候処、是も

官軍ニ屬シ候、依て今日藝州江も固メ被仰付出張之賦

御座候、長ヨリノ応接にて動シ候訳ニ御座候、依之ハ

幡・山崎ハ 官軍ヲ以取固メ候にハ相違無御座、賊之

勢ひ大ニ挫ケ可申候、是を固付候得は、華城之巢窟も

たまり得申ましく候、

一大津江橋本廟〔実徳〕・柳原侍從殿〔前光〕為

勅使被差立、熊本・彦根・佐土原・大村・備前人数發

向ニテ相屬シ候、彦根ハ掃部頭出張よほと憤發にて、

是非実行ヲ挙ケ、罪ヲ償ひ候トノ事ニ御座候、実ニ世

中ハ意外なるものニ御座候、是ハ關東ヨリ東海道ヲ人

数クリ出シ候故、防禦ノ為ニ候、既ニ草津迄一大隊ノ

歩兵到着之由被相聞候、

一備前・因州官軍ニ相違無御座備ハ本・末共ニ大津江出

張、大ニ相振ひ申候、因ハ本・末山崎江出張、同断相振申

候、就ては御疑念も可有之候得共、勢ひハ言外ニある

ものにて、実ニ

皇威振興

神州地ニ墜サル所以カト被存候、紀州も愈憤發、奉

勅之向ニ御座候、鷲尾卿〔隆繁〕被奉

内勅、浪士或ハ十津川士等相募り、高野山ニ屯集、凡

千人余之

官軍ニ相及候処、紀州ヨリ及贈品、相互ニ為

皇國可致尽力旨ヲ以、使節迄相立テ候由、自然勢ニ依
テ反シ候場も可有御座候得共、何ニセヨ

御威光之然る所以ニテ、不堪欣喜事ニ御座候、尼ヶ崎・
高槻同断ニテ、是等ハ小藩トイへとも別て要所之事情
処、山崎路ハ道を開キ候訳ニ相成候、

一丹波路之方、正親町卿(西園寺卿望ノ誤)為

勅使被差立、長藩御国人数相属シ、今日御発向相成候、
是ハ三丹ヲ占メ、万一之節

鳳輦之道を開キ候為也、固より山陰道列藩江ハ直様

勅命ヲ以 御沙汰相成居、一公卿御差向ひ相成候得ハ、
尽ク

官軍ニ相属シ候模様も有之候故、右之御計ひ相成申候、

長兵ハ雲州路ヨリ中国を責上り候手筈も有之候、

一今日刑部殿上京、兵庫滞留、各国夷情委曲相分申候、

去ル二日平運丸開帆之処、幕船ヨリ及砲発、其マ、兵

庫港引返シ候由、ダウダ、モンフランヨリ相諭シ候ニ

ハ是非談判ニ及ブベシ、如何様之儀有之候共、港内ニ

テ及砲発候事ハ、万国公法ニおひて無之事ニ候、江戸

之事も固ヨリ曲在彼、且此一条十分之曲ニテ候、若応

接之上六か鋪クバ、夷人江可任ト申シタル由、最

王師被起候ニ付、何れへも荷担不致筋評議決定ニ及候
ト之事、

一京師中ハ幸干戈不動、兵火之憂無御座、粮米等ニ條城
等之貯も有之、

朝命ヲ以夫々御取調相成候、若粮米等差支候節ハ、申
出候様 御沙汰も承知仕候、尤彦根

官軍ニ属シ候間、江州之道相開ケ候間、暫時大坂之通
路相絶候とも、決て差支無御座候、仍て米穀ハ、余分
ハ凡て伏見辺兵火之者救米、京地市中等江配当被為在
候御内評ニ御座候、

一明日徳川逆罪之次第

朝敵タルヲ以瞭然相鳴シ、天下江大号令

御發表之御評決ニ相成申候、為鎮撫下坂ト表面ヲツク

ロヒ、則籠城割拠ノ形ヲ成シ、新柵ヲ結ヒ、要所々々

ニ公然警衛ヲ

命シ、且外夷江

朝廷ノ悪ヲ示シ、暴戾之所為ナドトノ文面ヲ以、布告ニ
及候次第等、重罪顯然タルコト、殊ニ御当地戦争前日
ニ当リ、於攝海砲発ニ及候儀、各国公使群集之中ニテ、
公法ニ戻リタル所為、宇内ニ曲ヲ広メ候訳ニテ、大ニ

我カ幸ト可申候、

右大略之形行申上候、

朝廷ヨリ之御達書且戰爭之御届、死傷手負等或ハ
分捕打取等之員、夫々從政府御問合可有之候間、態
と相略、見聞之及候丈相認候、昼夜之參

朝ニテ許多之事情難申尽、宜鋪御洞察被下、被達
尊聽候儀共以賢慮可然奉願候、頓首百拜、

正月五日夜認

大久保一藏

(島津忠家氏所屬本にて校訂)

養田傳兵衛様

侍史

七三一 戸田忠至慶喜ノ討薩ノ表ヲ上ル

正月五日、戸田大和守至忠徳川慶喜ノ討薩ノ表ヲ上ル、

(記)

徳川氏江戸藩邸ノ警ヲ聞キ、旗下及ヒ會津・桑名諸藩士
ノ激昂ヲ制シ得ス、徳川慶喜自ラ兵ヲ率ヒ、表ヲ捧ケテ
上京シ、(島津茂久)松平修理大夫家来ノ不臣ノ罪ヲ声ラシ、之ヲ追
討スベシト決シ、之ヲ在坂ノ諸藩ニ達シタリ、

七三二ノ一

旧邦秘録

大坂ニテ徳川外藩へ廻候檄文

先般献言ノ次第モ有之候処、豈計哉、松平修理大夫家
来共、擁

幼帝不尽義

叡慮ヲ矯、天下ノ乱階ヲ醸候件ハ不暇枚挙、此ニ依テ

別紙而通ノ奏聞ヲ遂、大義ニ依リ勤

王同心ノ面々ハ、速ニ馳登リ、為

皇国尽力可被致候事、

七三二ノ二

奸臣誅伐ノ表

一臣慶喜謹テ去月九日以来、御事件ヲ奉恐察候得共、一々
朝廷ノ御真意ニ無之、全松平修理大夫奸臣ノ隠謀ヨリ
出候ハ、天下共所知、殊ニ江戸・長崎・野州・相州所
々乱妨劫盜ニ及候ハ、同家来ノ唱導ヨリ東西響応シ、
皇国ヲ乱候所業別紙ノ通ニテ、天人共ニ所憎御座候間、
前文ノ奸臣共御引渡御座候様、御沙汰被下度、万一御
採用不相成候ハ、不得止誅戮ヲ加ヘ可申、此段奉
奏聞候、

正月

慶喜

薩藩奸党ノ者共罪伏之事

一大事件衆議ヲ尽シ可被仰出ノ処、去月九日、突然非

常御変革ヲ口実ニ致シ、奉侮

幼主諸般御所置、私論主張ノ事、

一主上御幼沖ノ折柄、

先帝御遺託被為在候撰政殿下ヲ廢シ、止參内候事、

一私意ヲ以、堂上方ヲ恣ニ黜陟セシムル事、

一九門其外御警衛ト唱、他藩ノ者ヲ煽動シ、兵仗ヲ以

宮闕ニ迫候条、不憚

朝廷大不敬ノ事、

一家来共浮浪ノ徒ヲ語合、屋敷ヘ屯集、江戸市中押込

強盜イタシ、酒井左衛門尉屯集ヘ砲發乱妨其他、野

州ヨリ相州処々焼打劫盜ニ及候ハ、証拠分明ニ有之

候事、

正月二日ニ至リ、大垣藩小原二兵衛(忠實)越州藩人ニ、徳川

氏上洛薩人討伐ノ事情ヲ密告ス、松平慶永之ヲ憂ヒ、山

内豊信・伊達宗城ト俱ニ、戸田忠至・成瀬正肥及ヒ土佐・

津・肥後藩老ト自館ニ集会シ、人ヲ遣シテ其拳ヲ諫止セ

シメンコトヲ議シ、其事未タ果サ、ルニ当リ、三日ノ開
戦アリテ、徳川氏ノ兵敗レ、期ニ先テ表文ヲ達スルコト
ヲ得サリシナリ、

是ニ於テ、表文ヲ京都ニ達スル者ナシ、酒井忠義若狭守、小浜藩主
ノ家臣之ヲ望ミ、士人三人姿ヲ僕隸ニ窶シ、交戦ノ間ヲ
田間ヲ潜行シ、戸田忠至ノ館ニ至リ、徳川氏ノ上書ヲ出
シテ伝奏ヲ請ヘリ、戸田之ヲ収メテ越前・尾張ノ両藩主
ニ謀リテ、遂ニ岩倉邸ニ達シタルナリ、

【参照一】

春嶽私記節録正月二日

夕七時頃、伊藤友四郎岩倉家ヘ參殿、密ニ申達候ハ、

唯今小原二兵衛方ヘ罷越、同人申聞候ハ、一昨晦日夜

於華城御達有之候ハ、上様近々御上京ノ御運ヒニ付、

御先勢追々御繰出ニ相成候間、在坂諸藩ノ人数モ指出

候様トノ儀ニテ、事ノ為体以ノ外切迫危険ニテ、専ラ

伐薩ノ御模様ニ有之、昨朔日ヨリ追々御出勢ニ相成ル

トノ事、坂地ヘ指出置候兵隊ノ向ヨリ報知有之ニ付、

此節左様ノ御事柄極テ御失策ト存シ、則チ微意為建言

井田五藏(諱)指出候ヘ共、迎モ行届申間敷、何分御不策千

万ト存候間、其段老公ヘモ申上吳候様トノ事ニ付、不

取敢參殿ノ由也、仍之下院ノ面々申談候ハ、此節ケ様ノ御妄動無之様、御抑止可被成ハ勿論候ヘ共、事爰ニ及ヒ切迫ノ次第ニ付、其段申上、公ハ御所勞ノ趣被仰立、御帰邸ニ相成、戸田殿ヘ下坂ノ支度ニテ、藩邸ヘ被罷出候様、為御使雪江被遣、肥後藩老溝口孤雲・津藩老藤堂帰雲高克モ參邸候様被仰遣、雪江ハ暮時過戸田殿ヘ罷出、大略及談判処、戸田殿ハ於旧幕兼々御所最眞ト唱ヘ、嫌疑有之、下坂致候テモ行届不申、夫ヨリハ有力ノ藩老ヲ被遣方可然、何分為御相談直様參邸可有之トノ事ナリ、夫ヨリ公モ御帰殿、而藩老モ參上、宇和島老侯・戸田殿モ来邸、尾侯ヘモ被仰越候脱カ処、為御名代成瀬隼人正罷出、後藤象二郎モ參上ニテ、種々御評議有之候ヘ共、孰レノ道ニモ御失体無之様、御諫諍ノ外無之候付、孤雲・帰雲ハ唯今罷歸リ、支度次第下坂可仕、象二郎モ同様可罷越候処、下院御用有之ニ付、土藩老深尾鼎御差出可相成、尾州ヨリハ田中國之輔・中村修之進下坂可然トノ御談ニ相成候ヘ共、兩人罷下り候テモ、非力ノ及フ所ニ無之趣ニテ固辞不及御請、尚老侯思召相伺候上ト申事ニ相成退出セリ、明日ハ公土予兩老侯ト御一所ニ御願ヒ可被成トノ御談極ニテ、何

レモ御退散ニ相成リシハ、曉原書刻計リナリ、雪江モ早々下坂、諸藩老申談候様被命之、柳川藩十時羅惠攝津ハ、下院ヨリ直ニ下坂ノ心得ニテ退出セシ由、右坂地一件為取調、青山小三郎眞ヲ穂積亮之助ヘ被遣候候處、亮之助申聞候ハ、坂地ヨリ監察妻木多宮御上京ノ御都合取調、且伐薩一条相含上京ニ付、先刻ヨリ大議論ニ及ヒ、遂ニ輕挙暴発ハ当今ノ大失策ナル事ニ論決シ、唯今引取タル由ニ付、小三郎ヨリ邸議ノ趣及論談候脱カ處、總テ同意ニテ、伏見辺ノ儀ハ猶多宮ヘモ可申談トノ事ノ由、小三郎罷歸申上候ニ付、多宮同道亮之助參邸候様、再小三郎ヲ以被仰遣候候處、妻木殿ハ不快ノ由ニテ、亮之助計罷出、戸田殿ヘ妻木殿被合越候密謀ノ不策ナル由ヲ物語リ、何分穩便ノ所置ニ相成候様、御尽力有之度ト必至及頼談タリ、又云後ニ聞ク、晦日大目附瀧川播磨守其外、江戸表ヨリ兵隊ト共ニ汽船ニテ着坂有之、東地薩藩ノ惡説、且二十五日薩邸攻撃ノ始末等敷演有之、此表ノ奸状ヲ合セテ、伐薩ノ儀ヲ主張シ、下地除森ノ説モ起リタルヲ、内府公御恭順ノ御誠意ヲ以テ無理々々ナカラ、御鎮庄被成置タル坂地麾下ノ人心ヲ一挙ニ煽動、誑惑セラレシカハ、滿城立地ニ鼎沸ノ勢トナリ、

憤慨激烈ノ党奮興シテ、板閣閣老勝靜其他ヲ压迫説倒シ、事遂ニ敗レニ帰シ、形勢一變専ラ伐薩除姦ノ兵事ニ及ヒ、内府公トイヘトモ、如何トモ為シ給フヘカラルニ至リナリトイフ、

【参照二】

中村武雄手記

諸軍已ニ浪華ニ下リシ後ハ、兵氣委靡シ、其惰慢ナル者ハ、浮靡遊蕩ニ流レ、其慷慨ナル者ハ、蓋憤嘆ヲ懷クノミニテ、大計更ニ定ラス、果々シカラヌ事共ナリ、如此ニテハ速ニ江戸城ニ還ラセ給ヒ、関東ノ地ニ抛リ、徐々天下ノ勢ニ依リ、其策ヲ施サル、ノ外、有之間敷ト論スレトモ、事亦此ニ一決セス、紛々雑沓中ニ日ヲ送ルノミニテ、有志ノ人々此末如何アラント、憂ヒヌ者モナカリケリ、是時薩藩ハ蓋幕府ヲ激シ、兵端ヲ開カシムルノ意ニヤ、浮浪ノ士ヲ集メ、江戸ニ於テ乱暴狼藉頻リナリ、遂ニ十二月二十五日ノ事、速ニ大坂ニ報アリ、前將軍已ニ此ニ至リシ上ハ、勢不得已ト思召シ、ニヤ、又ハ江戸ノ捷ヲ得テ事謀ルヘシト思ヒ給ヒシカ、親書シテ薩藩ノ罪ヲ責メ、遽ニ出兵ノ令ヲ下シ給ヒケリ、時ニ戊辰正月元日ナリ、嗚呼敵ノ計ル所ニ

陥リ、其勝算ヲモ定メス、卒然出兵ニ決シ給ヒシハ、何等ノ輕忽ナル事ニヤ、

【参照三】

岡谷繁實來歴

徳川氏ノ使正月三日討薩ノ表を携へ、京地に入りしも開戦に及んで、朝廷に達するを得ず、五日に至り、酒井若狭守小浜藩主の家来携へ、戸田忠至の館ニ来りたるを見る、其表文ハ四角の紙に「上」の字を記し、下に「慶喜」と記しありたり、之を官兵に奪ハれざる様、京都に出て戸田大和守忠に託して、朝廷に上るべしとの命なり、然るに開戦に及んで何人も之を捧くる者なし、是に於て我等三人死を決して、其使に当れりとて、三人共に仲間の姿にて、頭を剃り下賤の者に變し、表文ハ衣服の襟に隠し居たり、繁實出て応接セしに、重大の事件なるを以て戸田に直面せんことを請へり、繁實其用務を問ひしに、実は慶喜公の嘆願書を携へたりと答ふ、仍て戸田に通して、直に面して表文を収め、越前春嶽に致して謀る処ありしも、越前又其措置に窮せられ、尾張に謀り、遂に戸田より之を岩倉家に達したり、

〔表紙〕

忠義公史料 明治元年正月二

〔扉に、表紙の文字の外に市米四郎編の記載あり〕

目録

一 藩用運搬人夫ノ使役ヲ許サル

記 達書

留守居届書

一 藩庁上国ノ事変ヲ藩内ニ告ケ、緩急時ニ応スベキコトヲ達ス

記 達書

参照 寺師宗道日記

一 藩庁京都守衛トシテ、外城兵二小隊・私領砲隊一座ヲ

派遣ス

記 申渡書

参照 寺師宗道日記節録

石室秘稿節録

舊邦秘録

得能良介日記

一 茂久出戦ノ隊士ヲ見テ其戦功ヲ褒メ後事ヲ奨励ス

記 黒田嘉右衛門書翰節録

川上四郎次書翰

一 藩庁藩内守衛及京都救応トシテ兵ヲ国境及細島ニ出兵

ス

記 島津久家家記節録

柴山景綱事歴抄

無名氏記事

寺師宗道日記節録

一 近衛・一條両家ノ守衛ヲ命セラルル正月七日

記 達書并ニ藩吏通牒

一 朝廷茂久公ヲ召サル、モ疾ニ依テ辞ス正月七日

記 達書并ニ上申書

参照 由利公正談抄

一 大号令ヲ発シ諸侯ノ去就ヲ決セラルル七月七日

記 勅書

留守居ヨリ藩老へ届書

一 茂久公勅書ノ奉命書ヲ捧ケラルル七月七日

記 本書并ニ藩老通牒

回申

一 西郷吉之助書ヲ致シテ大久保一蔵ノ帰京ヲ促ス

一 大久保利通参謀ヲ辞任ス

一 朝廷軍勞ヲ慰メ酒肴ヲ賜フ正月八日

記 達書

一 大号令奉命ノ次第ヲ在京士民ニ告示ス正月八日

記 藩吏通達書並ニ別紙(茂久公奉命書ナリ)

一 徳川慶勝・松平慶永慶喜東帰ノ奏状ヲ上ル正月八日

記 慶喜奏状并ニ尾・越前藩へ委托書

参照 大久保利通日記節録

春嶽私記節録

一 茂久公親ヲ病院ニ臨ミ負傷者ヲ慰問ス正月九日

参照 平野不二彦來歴

舊邦秘録

一 藩老島津伊勢征討將軍官ヲ枚方ニ候ス

記 舊邦秘録

参照 島津伊勢日記節録

舊邦秘録

一 旧幕老中上国ノ報ヲ聞キ諸藩ニ嚴重警備ヲ為サシム正月九日

記 稲葉美濃守触書(品川冲出入船船改ノ件)

川村信濃口達(屋敷々々人数嚴重取締ノ件)

一 朝廷本藩・長藩へ糧米ヲ賜ハル正月九日

記 達書

参照 相良新右衛門覚書節録

一 平戸藩市中巡邏ヲ罷メラルル正月九日

記 通達書

一 藩士参与岩下佐次右衛門ニ外国事務取調掛ヲ兼ネシム正月九日

正月九日

(三條 岩倉 聖護院管 徳大寺 仁和寺管・東久世・後藤等ノ各職任命モ列記セリ)

記 本書并ニ留守居届書

一 付記一

肝付郷兵衛書翰

高田善助上国ノ形勢内報

一 徳川慶喜及ヒ松平容保・松平定敬等ノ官位ヲ褫キ、其

京邸ヲ没収ス正月十日

記 本書并ニ留守居届書

一薩兵京都高松藩邸ヲ没収ス

記 留守居届書

参照 相良新右衛門覚書

一京都詰家老ヨリ藩地へ戦状ヲ報ス正月十日

記 本書

一西郷・大久保ヨリ戦状ヲ報告ス

記 西郷吉之助ヨリ桂右衛門ニ戦状ヲ報スル書

大久保一蔵ヨリ蓑田傳兵衛ニ(同上)

一京都詰家老ヨリ竹内・木場兩人ノ進退ヲ通ス

記 本書

一有川七之助京地ノ情報ヲ報ス

正月十日京都ヨリノ報告

正月十一日浪花ヨリノ報告

一木場傳内ヨリ家老中へ書翰

一藩内旅人往復船舶出入ノ検覈ヲ達ス正月十日

記 本書

一茂久各隊ニ命シテ三日以降ノ戦功ヲ申供セシム

七三二 藩用運搬人夫ノ使役ヲ許サル

正月六日、藩用運搬人夫ノ使役ヲ許サル、

(記)

本日岩倉前中将ヨリ、上・下鴨両村農民三十五人宛ノ使役ヲ許サルノ命アリ、

薩州

思召有之、運送為一助下鴨百姓連日十人宛、上賀茂百

姓連日二十五人宛、為人夫罷出候様、一社中江被

仰付候間、此段申達候事、

正月六日

但シ不用之節ハ、尤勝手ニ指揮可致、尚又不足候ハ

、可申出候事、

留守居ノ届書ヲ載ス、

御書付 一通

但思召有之、運送為一助之儀、

岩倉前中将様

右ヨリ被成御渡候付、可申上旨申上置候、

辰正月六日

新納嘉藤(立去)二

〔島津広義〕
伊勢様

〔島津忠義家記所収〕

七三三 藩庁上国ノ事変ヲ藩内ニ告ケ緩急時ニ応

スヘキコトヲ達ス

正月六日、藩庁上国ノ事変ヲ藩内ニ告ケ、緩急時ニ応スヘキコトヲ達ス、

(記)

上国切迫ノ事情ハ、多少通スル所アリシモ、未タ確報ニ接セサリシニ、今六日四ツ時^{午前}春日艦入港シ、艦長赤塚源六ヨリ芝邸攻撃、翔鳳丸砲戦、平運丸神戸沖ノ砲戦、春日丸阿波沖砲戦ノ顛末ヲ申告シタルニ由リ、藩庁始メテ其実情ヲ知ルニヨリ、之ヲ藩内ニ告示シ、緩急時ニ応シ、人心動揺スヘカラサル旨ヲ城下士民ニ達シタリ、

旧臘廿三日、江戸城西丸出火、同廿五日未明ヨリ、徳川家手勢ヲ以、芝御屋敷ヲ襲来候付、詰在之人數出會、応接ノ央互ニ致混雜、終ニ及戰爭、且御軍艦翔鳳丸品川沖江致廻船居候処、徳川家之軍艦ヨリ及砲発候付、互ニ砲戦相引ニテ兵庫江廻船、平運丸ニハ、去ル二日大坂川口出船之処、和田岬辺ニライテ、是又徳川家船

ヨリ砲発、兵庫迄廻船、春日丸ニハ出帆之処、同四日於阿波ノ沖辺、又々致砲発候付、此方ヨリモ砲発、戰爭夜入相引ニテ、前ノ濱江着帆之段乗頭申出、戰爭之基等委細之儀、未相分候得共、早々為守衛諸郷人數明七日上京被仰付候、猶一左右次第可申渡候、就テハ追々

中將様御沙汰モ可被為 在御事候付、曾テ致動揺間敷候、猶御軍制ニ付テハ、一涯嚴重相心得、急変到来之節ハ、別紙御定之場江可致参着候、此旨向々江不洩様、早々可致通達候、

但

火用心之儀、弥以入念候様申渡、市中末々之モノ共不致混雜様、分テ町奉行兼帯ヨリ可申渡候、

正月六日

〔島津久治〕
圖書
〔桂久松〕
右衛門
〔小松清藤〕
帶刀
〔川上久壽〕
龍衛
〔町田久慈〕
内膳

御定場左之通

一陸軍兵士

右陸軍所江可相集候、

一海軍兵士

右海軍所江可相集候、

一相場所持之面々々ハ、夫々持場江可相集候、持場無之

面々々ハ、其勤場江可相集候、

一無役之面々々、下方限ハ

御城下供屋江組々不入交様相集、上方限ハ種子島彈

正屋敷辺江前条同断可相集候、

一御兵具方与力之儀ハ、御木屋場江可相集候、

一一番早鐘ニテ軍粧之用意、二番早鐘ニテ、早々右之

場所へ可參着候、

以上、

〔卷〕辰正月六日

御本文之通、御役人中江致通達、御一門方之外

大身分之面々江モ申渡、二丸御側役江モ申渡候、

取次

北郷浪江

〔島津忠義家記所収〕

【参照】

寺師宗道日記 明治元年正月

同六日晴、市來正右衛門殿四ツ時分相凶砲声相聞得候、

船入欵と噂申候て、銃薬方藩ノ軍需品製造所へ出席候処、今朝軍

艦春日丸着船之由候、御勝手方より見聞役只今御用有

之、同席奈良原喜格罷出候処、去ル四日大坂兵庫辺幕

船より砲発にて、互ニ砲戦之形行申聞相成り、御手当

向段々御達相成候、

〔寺師宗道日記（東京大学所蔵）にて校訂〕

七三四 京都守衛ノ為外城兵二小隊・私領砲隊

一座ヲ派遣ス

正月六日、藩庁京都守衛トシテ、外城兵二小隊・私領砲

隊一座ヲ派遣ス、

〔記〕

春日丸入港、上国ノ事變ヲ報セシニ依り、本日京都守衛

ノ為メ、嶋津織之介ヲ物主トナシ、串木野日置郡ノ郷名・隈之城

薩摩ノ銃隊二小隊、垂水大隅郡ノ一邑、島津謙政實教ノ領邑・平佐薩摩郡

北郷作左衛門久禰ノ領ノ私領砲隊一座ニ命シ、陸路阿久根出水郡

ニ出テ、小船十艘ニ乗り、長崎ニ渡リ、外国船ニ便乗シ

テ、上京セシメタリ、

一隈之城 一小隊

【參照四】

得能良介日記

正月六日

御小納戸森岡清左衛門・御小姓村田藤之助、即晚京都迄被遣候ヨシ、米之津ヨリ舟ニテ肥前へ相渡リ、夫ヨリ長州へ相渡リ候筈之由ニテ、森岡ハ肥後へ御使者ニテ候由、相聞得候、

七三五 島津茂久出戦隊士ノ戦功ヲ褒メ奨励ス

正月六日、茂久出戦ノ隊士ヲ見テ、其戦功ヲ褒メ、後事ヲ奨励ス、

(記)

本日午刻九時乃テ茂久出戦ノ隊士ヲ藩邸ニ召集シ、親ヲ見テ、元日以来ノ戦勞ヲ賞シ、尚後事ヲ依頼スルコトヲ告ク、隊士皆感激士氣ヲ励セリ、

七三五ノ一

黒田嘉右衛門書翰節録

同六日

一 監軍椎原小彌太・市來〔改正、異本に改正〕勤兵衛林光院へ合葬ス、

一九ツ時ヨリ

太守様御目見被 仰付旨致承知、一統罷出候処、御

書院御出座、御直ニ元日ヨリ連日之合戦ニ、一統尽

力イタシ、サゾ大儀候半、猶此上頼存ル、

右之通御沙汰奉承知候、実ニ恐入候次第候事、

七三五ノ二

川上四郎次書翰正月十日付節録

同七日昼九ツ時分ニ御目見被仰付候処、先日ヨリ一通ナラス相働ニテ大儀、猶又以来之頼存ルトノ御沙汰ニテ、実以難有次第第二御座候、

七三六 藩庁藩内守衛及京都救応トシテ国境及

細島ニ出兵ス

正月七日、藩庁藩内守衛及京都救応トシテ、兵ヲ国境及細島ニ出兵ス、

(記)

上国ノ警報ニ仍リ、藩庁藩内警備トシテ、私領都之城ニ銃兵一小隊ヲ、舩肥口ノ緩急ニ備ヘシメ、又与力吟味役兼御軍賦役鳥丸六左衛門・柴山龍五郎〔綱〕ヲ監軍差引トシ、高岡郷隊一小隊、私領都之城隊一小隊、大砲半座ヲ

率ヒシメテ、日州細島ニ至ラシメ、附近各藩及ヒ旧幕領ヲ鎮シ、京坂ノ戦況ニ由リ、春日艦ノ細島ニ回航スルヲ待チテ上京セシメタリ、

七三六ノ一

島津久家家記節録

初メ激・鳥羽開戦ノ報アルヤ、勝敗未タ明ナラス、宗家命シテ、都城小銃二小隊・大砲半座ヲ至急出軍セシム、其一小隊ハ鉄肥口ノ緩急ニ備へ、他ノ一小隊及大砲半座ハ、直チニ日向口ニ出軍シ、附近各藩及ヒ幕領ヲ鎮シ、京坂ノ戦況ニ由リ、春日艦ノ細島ニ廻航スルヲ待チテ、上京セシメントス、是ニ於テ、主宰龍岡小十郎、隊長有田甚右衛門以下、同月十一日、都城ヲ発シ、細島港ニ至ル、宗家ノ臣鳥丸六左衛門・柴山龍五郎、之ニ監タリ、已ニシテ京地開戦以來、官軍連捷賊兵東走シ、(官師兵日向也)闕下稍平穩ニ復スルヲ以テ、上京ヲ要セスト雖、尚富高新町ニ屯シ、地方鎮撫ニ從事スヘキノ命アリ、

七三六ノ二

柴山景綱俗名龜五郎事歴抄

明治元年辰戌一月、春日艦長赤塚源六鹿兒島ニ帰り、伏見・鳥羽ニ於ケル戦争ノ実況ヲ話ス、龍五郎之ヲ聞キ、

福島直之進・上床敬蔵ト直ニ馳テ、軍賦役所ニ至リ、奈良原幸五郎(繁)ニ面シ、急ニ出陣センコトヲ切願ス、幸五郎乃チ之ヲ具状ス、時ニ国老小松帶刀ヨリ鳥丸六左衛門ト俱ニ、日州都城及高岡郷隊ノ監軍ニテ、京師急命ヲ命スルヲ以テ、日州細島ヘ滞在シテ、汽船ノ寄島スルヲ待ツ可シトノ命ヲ伝ヘラル、龍五郎ノ喜ヒ知ル可キナリ、迅速該隊ヲ率テ細島ニ赴キ、汽船ノ来ルヲ俟ツ、実ニ一日三秋ノ思アリ、時ニ伏見・鳥羽ノ戦争、我カ軍大勝利ノ報アリ、応援ニ及ハサル議アリシ欤、汽船ハ我隊ノ細島ニ在ルニ関セス、大坂ニ向テ沖合ヲ直航ス、我隊岡ニ登リ、沖ヲ指シ大声ヲ発シ、遙ニ該船ヲ招クト雖モ、応セスシテ経過セシヲ以テ、隊中大ニ憤懣ス、然リト雖モ、又如何トモ為シ難カリシ、

七三六ノ三

一高岡 一小隊

一都之城 右 同

右ハ、与力吟味役御軍賦役兼務鳥丸六左衛門殿、監軍差引京師救応トシテ、細島迄被差出候、

七三六ノ四

寺師宗道日記節録

正月

同八日ニハ、高岡並都之城ノ勢ヲ、赤江口ニ堅メニ被差遣候由、

右被差越、

御所御取次ヨリ相渡候旨ニテ、被相渡候付、相添差上

申候、以上、

辰正月七日

新納嘉藤二

七三七 近衛・一條両家ノ守衛ヲ命セラル

正月七日、近衛・一條両家ノ守衛ヲ命セラル、

薩州へ

近衛殿

一條殿

右裏門警衛之事、

但シ、両三人ツ、之事、

昼之間家々之印鑑ニテ往来、夜分之儀ハ、切之事、

(記)

留守居ノ届書ヲ載ス、

御書附一通

但

近衛殿

一條殿裏門警衛之儀ニ付、

御所

御触使

加藤猪之助

七三八 茂久病ニヨリ参朝ヲ辞ス

正月七日、朝廷茂久ヲ召ス、疾ニ由リ其命ヲ辞ス、

(記)

朝廷征討大号令ヲ発セラルニ仍リ、在京諸藩主・議定・参与・名代ヲ召ス、本日申刻七時乃チ后四時茂久ニ参朝ヲ命セラル、

旧邦秘録

御用之儀候間、今日申刻参

朝可有之候事、

正月七日

茂久疾ニ仍リ之ヲ辞ス、
旧邦秘録

一私事、今申刻参

朝可仕旨蒙 命候得共、不快有之、参

朝難仕御断申上候、此段宜敷御執

奏奉願、以上、
(殿脱)

正月七日

薩摩少将

【参照】

由利公正談抄

正月六日ノ夜、三條・岩倉兩副總裁、西郷・木戸・廣
澤等ノ六七人集会、徹夜ノ會議アリ、公正等ハ宜シク
名分ヲ正シテ、天下ノ方向ヲ決セサレハ、輦下ノ諸藩
トイヘトモ、其適従スル処ヲ知ラス、或ハ世人ヲシテ、
私憤私闘ノ疑ヲ抱カシムルアラシ、然サレハ何以テ王
者ノ師ト謂ハント討論シテ、大号令ノ發布ヲ迫レリ、
稍ク曉ニ及ンテ議決スルニ至レリ、其間ノ困難人心ノ
疑慮ハ、名状スベカラサルモノアリタリ、

七三九 慶喜追討ノ大号令ヲ発シ諸侯ノ去就ヲ決

セラル

正月七日、大号令ヲ発シ諸侯ノ去就ヲ決セラル、
(記)

本日申刻、在京諸藩主及ヒ其名代・参与命ニ応シテ朝参
ス、夜半ニ至リ遽ニ小御所ニ召ス、茂久疾アリ、朝参ヲ
辞シタルヲ以テ、留守居附役東條慶二特ニ准サレテ参席
ス、席次ハ藩主・議定ノ名代・参与・諸藩ノ名代列次ス、
上段ニ有栖川総裁官・山階宮・公卿ノ議定・参与列次ア
リ、徳川慶喜追討ノ大号令ヲ読上ラレ、岩倉副總裁又大
号令ノ趣旨ヲ演達セラレ、真心朝旨ヲ奉戴スベカラサル
モノハ、帰国スルモ、又ハ徳川氏ニ対シ私恩捨テ難キモ
ノハ、大坂ニ下リ合カスルモ、断シテ止ムベキニアラス、
必ラス方向ヲ定メテ、去就ヲ決スベシ、然レトモ翻然志
ヲ改メ、今日ヨリ一意専心朝旨ヲ奉戴セバ、既往ノ挙動
ハ問フ所ニアラサルナリ、尚意見アルモノハ、詳ニ其理
由ヲ演フル所アルベシト告ケ、即座ニ奉命ヲ答ヘシメ、
名代ノ者ハ夜中ニ申達シ、即時ニ奉命書ヲ上ルベシト、
命セラレタリ、

勅書

徳川慶喜天下之形勢不得已ヲ察シ、大政返上、將軍職
辞退相願候ニ付、

朝議之上断然被

聞食候処、唯大政返上ト申而已ニテ、於

朝廷土地人民御保不被遊候テハ、

御聖業難被為立候ニ付、尾・越二藩ヲ以、其実効御迅

問被為遊候節、於慶喜ハ奉畏入候得共、麾下並會・桑

之者共承服不仕、万一暴挙可任哉モ難計候ニ付、只管

鎮撫ニ尽力仕居候旨、尾・越ヨリ及言上候間、

朝廷ニハ慶喜真ニ恭順ヲ尽シ候様被

思召、既往之罪不被為問、寛大之御処置可被仰付候処、

豈凶ンヤ、大坂城江引取候ハ素ヨリノ詐謀ニテ、去ル

三日麾下之者ヲ引率シ、剩前ニ御暇被遣候會・桑等ヲ

先鋒トシ、闕下ヲ奉犯候勢、現在彼ヨリ兵端ヲ開キ候

上ハ、慶喜反状明白、始終奉欺

朝廷候段、大逆無道、最早於

朝廷御宥恕之道モ絶果、不被為已追討被

仰付候、兵端既ニ相開候上ハ、速ニ賊徒御平治、万民

塗炭之苦ヲ被為救度

(篤彰親王)

叡慮ニ候間、今般仁和寺宮征討將軍ニ被任候ニ付テハ、

是迄偷安怠惰ニ打過、或ハ両端ヲ抱候者ハ勿論、仮令
賊徒ニ從ヒ、譜代臣下之者タリトモ、悔悟憤発國家之

為、尽忠之志有之候輩ハ、寛大之

思召ニテ、御採用可被為在候、依戰功此行末徳川家之

義ニ付、嘆願之儀モ候得ハ、其筋ニヨリ御許容可有之

候、然ルニ此御時節ニ至リ、不弁大義賊徒ト謀ヲ通シ、

或潜居為致候者ハ、

朝敵同様嚴刑ニ可被処候間、心得違無之様可致候事、

但

征討大將軍ヲ被置候上ハ、即時前件号令可被發ハ

勿論候得共、猶旗下粗暴之徒壘蔽爰ニ至リ候事哉

ト、彼是深重之 思食ヲ以、御遲延之処、三日ヨ

リ今七日ニ至リ、坂兵日々雖敗走、益出兵呉々不

被得止、断然本文之通被

仰出候、各藩陪臣吏卒ニ至迄、方向ヲ定メ為天下

奉公可有之候事、

留守居ノ届書ヲ載ス、

勅書一通

但

徳川慶喜大逆無道之所為相顯、
御追討之儀、

右ハ

太守様御用之儀候間、今日申刻

御参

朝被遊候様御達相成候処、御所旁ニテ御断被

仰上候、然処御留守居附役東條慶二、毎之通御仮建へ

相詰居候処、夜半頃御用召之諸侯方・御不参諸侯之御

名代並諸藩参与、都テ小御所へ被召候間、

太守様御名代モ罷出候様、非藏人ヲ以御達之処、差掛

リ之儀ニ付、右慶二

御名代之場相勤候段、御届申上、諸侯御名代一諸ニ罷

出候処、於御廊下今晚ハ非常出格之訳ヲ以、小御所へ

被召候段、以非藏人御達相成、小御所次之間闔涯へ御

大名方、其次ニ議定之御名代ヨリ、諸藩参与・諸侯之

御名代相並、上之間へ

総裁宮様御初

山階宮様、其外議定・参与之公卿方御列座、

勅書御読上之上、御大名上席ヨリ順々御請被仰上、御

名代之儀ハ奉畏、御主人へ可申上旨申上候、左候テ右

倉前中将様ヨリ前文

勅書之御次第詳ニ御演説、イツレモ一ト通りハ御請之

儀ニ候得共、真意ニ奉

朝命候哉、亦ハ

御趣意奉服仕兼帰国致致、私恩之情合難黙止、坂城へ

差越一味致致、イツレトモ於

朝廷御構無之候間、勝手ニ可致急度方向相定メ、即座

ニ御請可申上候、乍併是迄尽力等之次第、大同小異ハ

有之候得共、既往ハ不被為咎候間、真ニ不被得止之

御趣意ヲ奉シ、今日ヨリ奉帰

官軍御奉公可致、且所存有之者ハ、聊無忘憚申上候様、

委敷御演説被成、諸藩参与中へモ無腹臆申上候様、被

仰渡候、左候テ御名代之者共ハ、主人へ申聞、今晚即

刻御請書可差上旨モ被 仰渡候、

勅書差上申候、

右之通相勤申候間、此段申上候、以上、

辰正月七日

伊勢様

新納嘉藤二

七四〇 茂久勅書ノ奉命書ヲ捧ケラル

茂久即日勅書ノ奉命書ヲ捧タリ、

〔島津忠義家記所収〕

七四〇ノ一
旧邦秘録

一 徳川慶喜麾下并會・桑等之者共承服不仕、只管鎮撫之名ヲ以テ、一端大坂城へ引取候ハ、素ヨリ詐謀ニテ、去ル三日麾下之者ヲ引率シ、剩前ニ御暇被下候會・桑等ヲ先鋒トシ、

闕下ヲ奉犯候勢、現在彼ヨリ兵端ヲ開キ候付、速ニ御追討可被遊

御旨、精細被

仰出趣謹テ奉拜請候、此段御執

奏可被下候、以上、

正月八日

薩摩少将

(島津忠義家記にて校訂)

七四〇ノ二
同十日ニ至リ、京都詰藩老ヨリ、大号令奉命ノコトヲ通セリ、

太守様御事御用之儀候間、昨七日申刻御參

朝被遊候様御達相成候処、御所勞ニテ御断被

仰上候、然ル処御留守居付役東條慶二、毎之通

御仮建へ相詰居候処、同夜半頃御用召之諸侯方・御不

參諸侯之御名代並諸藩参与、都テ小御所へ被召候間、

太守様御名代へ罷出候様、非藏人ヲ以御達之処、差掛

リ之儀ニ付、右慶二

御名代之場相勤、諸侯御名代一諸ニ罷出候処、於御廊下今晚ハ非常出格之訳ヲ以、小御所へ被

召、

総裁宮様御初

山階宮様其外、議定・参与之公卿方御列座、徳川追討可被遊

御旨、御別紙

勅書御読上之上、御大名上席ヨリ順々御請被

仰上、御名代之儀ハ奉畏、左候テ岩倉前宰相(一本ニ)様

ヨリ前文

勅書之御次第詳ニ御演説、真意ニ奉

朝命候哉、亦ハ

御趣意奉服仕兼婦国致致、私恩之情合難黙止、坂城へ差越一味致致、イツレトモ於

朝廷御構無之候間勝手ニ可致、急度方向相定メ、即座

ニ御請可申上候、乍併是迄尽力等之次第、大同小異ハ有之候得共、既往ハ不被為咎候間、真ニ不被為得止之

御趣意ヲ奉シ、今日ヨリ奉帰

官軍御奉公可致、且所存有之者ハ、聊無忌憚申上候様、

委敷御演説被成、諸藩参与中へモ無腹臆申上候様、被仰渡候付、同夜

御別紙之通、御請書被差上候処、参与衆被成御落手候、右付

勅書并御請書へ添書イタシ、一統奉承知、於局々尚亦充分致手当、可奉待御差図旨、兵隊並御供又ハ詰中之面々、於

御書院直ニ申渡候、

勅書並御請書等相添、此段申越候条、

中将様達

貴聞、其許申渡等之儀ハ、何分ニモ可被取計候、以上、

辰正月十日

島津圖書殿
桂 右衛門殿
小松帶刀殿
川上龍衛殿

町田内膳殿

本文通知ニ接シ、同月十五日付ヲ以テ回申ニ及ヒタリ、

^{〔巻〕} 本文致承知

中将様達

御聽、御軍賦役頭取へ相達、

勅書御請書等扣置、此旨及御返答候、以上、

辰三月十五日

島津圖書
桂 右衛門
小松帶刀
川上龍衛
町田内膳

關山 ^{〔金生〕} 糺
新納 ^{〔久衛〕} 刑部
岩下 ^{〔方平〕} 佐次右衛門
島津 ^{〔延兼〕} 伊勢

關山 糺殿
新納 刑部殿
岩下 佐次右衛門殿
島津 伊勢殿

七四一 西郷隆盛書ヲ致シテ大久保利通ノ帰京ヲ促ス

正月七日、西郷吉之助書ヲ致シテ、大久保一蔵ノ帰京ヲ促ス、

大久保一蔵様

〔大久保利通氏所蔵本にて校訂〕

(記)

正月六日、征東將軍宮ノ命ヲ以テ、大久保一蔵ヲ軍參謀トナシ、東寺ニ至ラシム、大久保命ヲ領シテ即時營ニ至レリ、此時西郷吉之助ハ淀ニ在リシカ、夜京ニ入りテ面セス、朝廷征討大号令發布ノ會議アリ、西郷乃チ書ヲ致シテ之ヲ促カセリ、

兩日不得御意候処、昨夜ハ御出張之由、途中にて御行逢為申由御座候へ共、跡以承候事ニ御座候、東寺之方ハ先ツ穩成訳にて、懸口等之令を下され候訳にて無之、却て軍之模様ハ如何と、御尋共參候位之事御座候間、貴兄御滞留ハ無益之事と奉存候間、先御帰リ被下度、八幡・山崎之要所を占候間、今迄之手筈にてハ不相濟候付、得と成算を定、夫より追々責付候方、可宜と相考候付、当分之処ハ番兵を居へ、一応人数も繰上、其上相掛候筋ニ申遣候間、右等之処を以、今日ハ御引取被下度、奉合掌候、頓首、

西郷吉之助

正月七日

七四二 大久保利通參謀ヲ辞任ス

同八日、越前藩人徳川氏ノ東下ノ奏状ヲ達スルニ当リ、大久保馳セテ京ニ帰レリ、岩倉議定重大ノ時宜ヲ顧ミス、命ヲ請ハスシテ輕動シタルヲ責メラル、大久保深ク謝スル所アリ、參謀ヲ辞スルニ至レリ、

大久保利通日記節録

正月八日(続)

今夜岩倉公ヨリ、小子參謀御受、
朝廷ヲ迦シ候義ヲ大ニ御叱リ、是迄相共ニ謀リ、死生ヲ共ニイタシ度思召候処、今
朝廷如此御大事ノ砌、跡ヲ如何イタシ候ヤ、一応不同御受ノ儀、甚御不滿ノ由ニテ、御落涙ニテ懇々拝承平ニ御断申上候、

七四三 朝廷本藩兵ノ軍勞ヲ慰メ酒肴ヲ賜フ

正月八日、朝廷本藩兵ノ軍勞ヲ慰メ、酒肴ヲ賜ハル、

明治元年(1868)

旧邦秘録

薩州

一賜物

酒 拾六挺

鯛 五拾束

右累日之交戦屢得勝利候趣被聞食、

歡感不斜候、依之軍勞ヲ被慰賜候事、

但後日屹度思召モ被為在候儀ニ付、死傷ノ輩巨細ニ

可記置候事、

正月八日

七四四 茂久大号令奉命ノ次第ヲ在京藩人ニ告示

ス

正月八日、茂久大号令奉命ノ次第ヲ在京藩人ニ告示ス、

(記)

正月七日、茂久大号令ヲ奉命シ、本日其ノ次第ヲ藩人ニ告示シテ、予メ準備スル所アラシメタリ、

旧邦秘録

徳川慶喜追討之儀、昨夜

勅命被為 蒙候付、御別紙之通即時御請被仰上候間、

此旨謹テ奉承知、於向々尚亦充分致手当、可奉待御差

図候、

正月八日

伊

勢(津島)

刑

部(新納)

佐次右衛門(下室)

糺

(山岡)

七四五 徳川慶勝・松平慶永慶喜東歸ノ奏状ヲ上ル

正月八日、徳川慶勝・松平慶永慶喜東歸ノ奏状ヲ上ル、

(記)

慶喜左右親近ノ者ヲ率ヒ、六日ノ夜窺ニ城ヲ出テ、天保

山沖ヨリ船ニ乗リテ、東ニ帰ルニ当リ命スル所アリ、翌

七日旧幕目付妻木多宮(頼起)越前藩士ヲ呼ヒ、奏状ノ伝達ヲ託

シタリ、今日越前藩士長谷川貫一・岡本晋太郎八幡ノ陣

營ニ至リ、吉井幸輔(友亮)・伊地知正治ニ面シテ、其顛末ヲ伝

フ、伊地知等之ヲ淀ノ総督府ニ稟シ、参謀大久保一藏馬

ヲ驅テ京ニ歸リテ、越前ノ奏達ヲ候フ、夜ニ入り尾張・

越前両家ヨリ奏状ヲ上レリ、其奏状ヲ載ス、

此度上京先供途中、偶然之行違ヨリ、近畿騒然ニ及候段、不得已之場合ニテ、素奉対

天朝他心無之段ハ、兼テ御諒知之通ニ候、併聊タリ共奉惱

宸襟候段、恐入候儀ニ付、謹テ浪華城各へ相預、退去帰東ニ及候間、右之趣可然御執成、御奏聞有之度頼存候、

正月七日

慶喜

尾張大納言殿

松平大藏大輔殿

【参照一】

大久保利通日記節録

正月八日

一今朝越前藩兩人我陣營ニ来、吉井・伊地知へ引合候趣、於大坂城中呼出有之登城候処、目附妻木某ヨリ、徳川慶喜始會・桑東退ノ趣遂奏聞候付、何分早々薩・長先鋒へ通シ呉候様承候ニ付、参候トノ由ニテ、奏聞写持参之由ニテ、吉井ヨリ御届申出候、依之小子朝廷ノ御模様弥越ヨリ御届相成候哉為伺、早馬ニテ引取、直様参

朝相伺候処、未御届無之、今夜半 奏聞書尾・越ヨリ差出候由、

【参照二】

春嶽私記節録

八日午後、坂地ニ罷在候岡本晉太郎罷帰リ、申上候次第ハ、昨七日御城ヨリ申来リ罷出候処、御目付妻木多宮殿逢対ニテ、昨六日上様御城御明退キニ付、尾・越而藩へ御託シ 御奏聞状并御書有之ニ付、両家ノ衆へ可相渡所、尾邸ニハ一人モ詰合無之候付、晉太郎へ被相渡由、且御城モ引渡被申度トノ事ニ付、晉太郎申候ハ、重キ 御奏聞状等、私式ノ者拝受仕候儀ハ、恐入御請難仕、且御城受取ノ儀ハ、猶以可及手閑様モ無之候間、御免被下候様申達候処、 御奏聞状ハ是非共致持参呉候様、御城ノ儀ハ早々受取人指出候様可致、薩・長迫リ来候へハ、御城ハ元ヨリ土地可及放火、左候へハ諸民ノ難儀トモ可相成儀ニ付、其処ヲ思召御開城ニモ相成事ニ候へハ、此訳合モ帰路薩・長陣所へ罷越申説キ、止戦ノ儀申入候様トノ頼ノ由、肥後首藤某へモ止戦申通候儀、頼有之趣ニ候へ共、首藤ハ戦地罷越候儀、懸念候へハ京都へ申遣、京都ヨリ指留ニ相成候様、

可取計トノ緩計ニテ、抄取申間敷様子故、晉太郎申遣候ハ、ケ様ノ時節候へハ、成敗ハ難量候へ共、何分指向ヒ見可申候間、御奏聞狀御写一通御渡被下度、夫ヲ以テ懸合可仕、尤御城ノ儀ハ、尾・越ヨリ 奏聞済受取人指上候迄ハ、御受取申候トハ難申上ト相答へ、御奏聞狀並御写共受取罷帰、夫ヨリ支度相整北上ノ処、途中按外ニ兵士等見受不申、枚方迄無何事到着、彼是深夜ニ相成ニ付、暫時休息罷在候処、長陣ヨリノ巡邏六人入来リ、通行ノ趣意等相糺ニ付、有体申答へ陣所へ案内相頼ミ、橋本駅ノ陣宮ニ至リ隊長へ面会、御奏聞狀写為見多宮殿頼ノ趣申演候処、仁和寺宮御本陣へ申上候様トノ事ニ付、淀表へ罷出候処、参謀伊地知正治逢対ニ付、前条申述処、尤ノ次第候へハ、宮へ相伺ヒ思召次第ニ可致トノ事ニテ、懇懃ニ慰勞ノ挨拶致シ相帰シ候、右等ノ次第ニテ、彼是手間取之由申達、御奏聞書一封指出、御一封ハ、尾侯御連名ニ候へ共、先ニ御開封、右ニ付、尾侯ヨリ成瀬隼人正^{正肥}、^{大山藩主}御家ヨリ酒井與三左衛門、夜ニ入参 朝、公卿ノ議定衆迄指出候、

七四六 茂久病院ニ負傷者ヲ慰問ス

正月九日、茂久親ヲ病院ニ臨ミ、負傷者ヲ慰問ス、

(記)

茂久正月四日及ヒ本日、親ヲ今出川相國寺内病院ニ臨ミ、負傷者ヲ見テ、手カラ傷痕ヲ撫シテ慰問スルアリ、傷者大ニ感激セリ、

【参照一】

平野不二彦來歴

慶應四戊辰正月三日、徳川慶喜會・桑ノ兵ヲ合セ、大軍ヲ引率シ、京都ヲ襲フノ警報アリ、之レニ因テ猝ニ我カ藩ノ兵々ハ、伏見・鳥羽ノ両要道防禦ノ為メニ分遣セラル、余ハ此時砲兵トシテ、伏見ニ出張ス、当日午後四時頃ヨリ遂ニ開戦、大戦争トナル、今夜奉行所ヲ攻撃、破テ追戦ノ際、余ハ右腕ニ銃創ヲ受ケ、重傷ニシテ、御幸宮内臨時病舎ニ護送セラル、同六日ハ大坂落城、賊軍敗潰シテ東国ニ走ル、京・坂平定ス、官軍大捷ノ報至ル、茲ニ於テ、負傷者ヲ京都今出川相國寺内ニ設ケ有ル病院ニ送ラル、此ノ日始メテ余ハ、雇医神宮拙藏ノ診断ヲ受ケタリ、其間銃創ヲ受ケシ俛、

疵所ヲ手拭ニテ卷結セラレ居タレハ、出血乾燥シテ肌肉ニ粘着シ、之レヲ解放スルニ酷ク痛ク苦ミタリ、実ニ其時分ノ医者ノ治療法タルヤ、今日ノ如キ者ニアラス、寔ニ迂遠極マリ、夫レカ故ニ傷者ニ於テモ、幾分か損セシ者多シ、余カ銃創タルヤ、右腕ヲ貫キ、骨ヲ碎欠シ、筋髓ヲ断ツト雖モ、幸ニ要脈ヲ絶タザレバ、日ヲ経ルニ随ヒ、追々痛ミ減少ス、然ルニ英人サトフ、米國医ウイルス(英医ニシテ米医ニアラス)ヲ雇ハレ、戦傷者厚ク治療セラル、或日我カ君公親シク病舎ニ臨ンテ、傷者ヲ巡視慰問セラル、時ニ親ヲ余カ右腕ヲ撫セラレ、曰ク、切斷セヨ、速カニ全快セント、余ハ恐縮シテ答ヘス、又タ或ル日益滿壯之助慰問シ来リ、頻リニ切斷ヲ促カス、余對テ曰ク、嚮日モ既ニ君命アリ、之レヲ猶予スルハ、真ニ臆病ニ似タリト雖モ、熟惟スルニ、手足全備アリテスラ、足下等ト共ニ功ヲ争フコト能ハス、況ンヤ今偏腕ヲ失フ、仮令一命ハ存在スルコト有リト雖モ、後日ナスコトナキヲ如何セン、故ニ医癒ヲ加ヘ全癒セハ宜シ、若シ否ラスハ寧ロ死スルニ若カスト、益滿聞テ黙啞シテ去ル、然ルニ追々各藩々降伏、或ハ帰順シ、官軍ノ勢威愈々盛大ニ、日々東國ニ向テ出兵ト

ナル、二月ヲ過キ三月ヲ越シ、奥州白川口ノ劇戰、江戸上野ノ大戰爭ノ如キ報知ヲ聞クコト屢々ナレトモ、身ハ銃創ノ為メニ動キ得ス、只徒病床ニ在リ、實地ノ景狀ヲ遠察スルニアリ、四月ニ入り五月ニ至リ、疵傷稍ク痛ミ間ナク、然レトモ動モスレバ痕出シ、或ハ回リ或ハ(起カ)凸瘳シ痊癒セス、然ルニ同月下旬ニ出院シテ、兵舎ヘ退キ、随意ニ彷徨遊歩スルコトヲ許サレタリ、此ノ間ニ於テ、摧欠シタル骨屑ノ疵口ヨリ出テ、大ニ痛ミヲ減少ス、此ノ骨ノ欠ハ、後世參看ノ為メ秘藏シ置ケリ、

【参照二】

舊邦秘録

正月四日・九日兩度

太守様病院へ 御出、手負人数へ御沙汰有之候事、

七四七 島津伊勢征討將軍宮ニ伺候ス

正月九日、藩老島津伊勢征討將軍宮ヲ枚方ニ候ス、

(記)

本日藩老島津伊勢藩兵総差引トシテ、大坂下向ヲ命セラレ、巳刻四時乃チ前十時京都ノ藩邸ヲ出立、枚方ニ至リ征討將軍

宮ノ宿営ニ參シ、茂久ニ代リ起居ヲ候フ、宮茶菓ヲ賜ヒ
情ハル、島津亦同所ニ宿シ、同十日大坂ニ着シタリ、左
ニ藩地家老ニ贈レル書牒ヲ載ス、

旧邦秘録

爰許へ兵隊被差出候付、拙者儀差引方トシテ被差越、
一昨九日枚方へ致着候処、 將軍様(征討將軍宮)ニモ、
前以同所へ御着相成居候ニ付、則御旅宿へ參上、
太守様ヨリ伺御機嫌之趣モ致演説、左候テ 宮様御儀
同所御一泊、拙者ニモ同断ニテ、昨日致着坂、詰役々
並御軍役頭取江当地之形勢承候処、賊徒儀ハ去ル七日
退城、慶喜並會・桑ハ蒸氣船ヨリ東帰、高松・松山等
ハ致帰国、又ハ東兵半方ハ、紀州へ逃去候説モ有之、
城中ニハ一昨夜長州ヨリ火ヲ掛候由ニテ、昨暮方迄ニ
都テ灰燼ト相成、偏ニ
御威光ヲ以速ニ退散、実ニ大慶之至ニ候、左候テ昨日
午過 將軍様ニモ御着坂、直ニ西本願寺へ被為入、御
宿陣相成候、右旁ニ付市中一同相騒候ニ付、此節賊徒
退散 將軍様為鎮撫、兵隊等被召列、御下坂被遊候ニ
付テハ、最早平穩相違無之候ニ付、致動揺間敷、且殘
党其外、騒動紛レ強盜等致儀モ有之候ハ、自他之無

差別此方陣営へ申出候様、触書ヲ以相達候処、稍人心
モ相鎮、且又邸中之人數モ銘々諸所致潜伏居、此節追
々無恙帰邸仕合之到ニ候、

一米三千石程

右賊兵所持品ニテ致分捕、外ニモ諸所へ相囲置候由ニ
付、方々探索申付置候、

一御屋敷近隣類焼又ハ致迷惑候者共ニ、御米施行被成下
候ハ、尚又御徳沢(更方)ニ浴シ可申存候ニ付、此節分捕米
之内ヨリ見計ヲ以、被成下候筋相達置候、

右旁申越候条、

中將様被達 御聴候儀共、何分ニモ可被取計候、以上、

但委細之儀ハ高崎(正風)左京江申含越候、

辰正月十一日

島津伊勢

島津圖書殿

桂 右衛門殿

小松帶刀殿

川上龍衛殿

町田内膳殿

藩地家老ノ回申ヲ載ス、

(米)
一本文致承知、

中将様達

御聴候、以上、

辰三月十五日

川上龍衛

島津伊勢殿

【参照一】

島津伊勢日記節録

一九日(正)今日將軍宮様、賊徒為御征討御下坂ニ付、

今朝拙者ニモ兵陣為惣率下坂被仰付候付、四ツ時分

打立、夜四ツ時分大坂江致着陣候(番隊中ハ同夜一泊シ、見テ姑ク原書ニ從フ)

尤征討將軍枚方江御泊ニ付、太守様ヨリ伺御機嫌、

次ニ拙者ニモ為何御機嫌致參陣候処、拜謁被仰付、

御菓子等頂戴致退出候、尤宮様ニハ明日辰刻御打立、

御下坂之御咄候(下略)

【参照二】

舊邦秘録

於御地

上様方御機嫌克、貴兄方弥御壯健、御同席中御揃御

毎勤之筈奉寿候、次ニ野生無異相勤居候間、御安意

可被下候、扱京地去ル五日迄之形行ハ、堀直太郎被

差下候ニ付、委細御承知之筈、下拙ニモ五日淀出陣、

六日早朝ヨリ八幡へ出掛候処、双方大小砲戦甚敷、

八幡町家へ二十柵ヲ以、乍漸火ヲ掛候処、昼時分終

ニ落去、戦死手負等モ有之、山崎口へハ長兵被差向

候処、藤堂勢官軍へ与力シ、橋本ヲ攻落シ、薩兵ニ

ハ橋本攻ニハ間ニ不合、夕方総勢引揚、下拙ニハ戰

濟、京都御手当向モ有之候付、直様一本松邸へ罷帰、

両日休戦ニテ、九日ヨリ 將軍宮様淀ヨリ枚方へ御

陣ヲ被遊、十日御下坂ノ節、被仰渡候ニ付、薩兵・

長兵九日ヨリ下坂ト相成候ニ付、下拙ニモ為差引下

坂被仰付、直様打立、於枚方 太守様ヨリノ御機嫌

伺等申上、右へ一泊昨致着坂候、宮様ニモ昨昼比御着

坂相成候、賊兵中々手強相防候得共、薩・長ノ兵勢

ニハ当カタク、戦一步モ退不申候、誠ニ此節御国勢

ノ働ハ感心之至、此度御褒美モ有之度、重テ取調可

申上候、慶喜并會・桑モ八日朝浪華城退散、九日朝

ヨリ火ノ手相見へ、昨日迄ニ鎮火相成申候、長人為

明トノ説モ有之、分捕等夥敷、難波米蔵十万石計ハ

為取トノ事、其余城中ノ砲器類、数日数フルニイト

マアラス、此度モ相応ノ分捕、御軍賦役ヨリ可申上

候、当地御蔵屋敷ノ儀、残多ノ至御座候得共、何分

対戦出来候丈ニモ無之、自焼イタシ、類焼迪ハ相少、

夫丈ハ先仕合ニ御座候、砂糖致焼失候得共、代料相

納候株モ有之、米モ格別焼失ト申場ニハ不至、京師

当地ノ分捕ニテ、随分御苦心ニハ及間敷奉存候、徳

川十八万ノ金子、船口運兼候趣相聞ヘ候ニ付、何方

ヘカ為忍置候半、当分探索中ニ御座候、何分長兵小

賢敷手モ付跡越ノ事ノミ、残多ノ至ニ御座候、此節

戦ハ大勝利、御互御同慶奉存候、

一 蒸気船一条取々ノ説ニテ、江戸軍艦開陽丸ヨリ致砲

発、平運丸・翔鳳丸ニハ沈没イタシ候説モ有之、又

御国船上坂ノ折ハ、其度津口河掛イタシ居候トノ説

モ有之、取々ノ風説取留難申上候、昨日京師ヨリ高

崎、左京飛脚被差立、今朝致着坂、御用差急直ニ出帆

ノ模様ニ付、細事認兼、又宿陣方ヘモ急々不差越候

テ不叶御用モ有之、定式方ノ儀モ承リ、大取込ニ付、

委敷高崎ヘ申合候ニ付、大略申上候、猶追々当地ノ

形行可申上候、荒々不悉、

辰正月十一日

島伊(島津伊勢)

桂右様(桂右衛門)

小帯様(小松帶刀)

七四八 旧幕府老中稻葉正邦諸藩ニ令シテ西上ノ

備ヲ為ス

明治元年正月九日、旧幕府老中上国ノ報ヲ聞キ、諸藩ニ令シテ西上ノ備ヲ為ス、

七四八ノ一 明治元年正月九日

稻葉美濃守様御渡大目附様ヨリ御触

大目付ヘ

此度御府内御取締筋之儀、被

仰出候付テハ、諸家手船并商人共所持之船ハ、品川

冲入津之節ハ、蒸気・帆前之無差別、其筋之者差遣

候、乗組人ハ勿論米港之趣意等為承候筈ニ付、兼テ

其心得可罷在候、

右之趣万石以上之面々江不洩様可被相触候、

正月

七四八ノ二 旧邦秘録

正月九日

松浦肥前守様・京極佐渡守様・稻葉右京亮様御重役

左之通、

大目付川村信濃守様ヨリ御口達

去ル三日 上様為 御上洛、御先手會津・松山・姫

路等罷出候処、先方ヨリ致砲發候哉、是ヨリ致砲發

候哉、何分睨ト分リ兼、全御用飛脚致到着候儀ニハ

無之、飛脚屋ヨリ申出、併戰爭ハ慥ニ相違無之候得

共、勝敗モ分リ兼候、此程薩州動揺ノ節、船ニテ逃

延候族モ有之、海路・陸路共襲来候モ難計、何分戰

国ト相成候心得ニテ、屋敷々々人数嚴重可致置候、

只今ニテモ彼等襲来モ難計、此段無急度拙者ヨリ御

咄之旨、御同席中様江御内達被下置候様、尤御用状

致到着候ハ、何レ御一統江御達可申候得共、此段

御心得迄御達申候事、

正月

〔島津忠義家記所収〕

七四九 朝廷薩・長へ糧米ヲ賜ハル

正月九日、朝廷本藩及長州へ糧米ヲ賜ハル、

長州 薩州

是迄守護職勤仕中、為手當會津江遣置候知行所、別紙

之趣ニ候間、両藩儀ハ殊ニ頃日連戰、彼是

思食之次第モ有之候付、右村々積米之分、糧米トシテ

下賜候間、速ニ出張所置可致候事、

山城国愛宕郡

一高四拾壹石四斗壹升六合 西賀茂村

一高貳拾石九斗貳合三勺 田中村

一高三百八拾五石五斗壹升四合八勺 岩倉村

一高五拾六石八斗七升七合三勺 市原村

同国葛野郡

一高四拾三石貳斗八升四合五勺八才 小北山村

一高四拾壹石四斗壹合 木辻村

【参照】

相良新右衛門覚書

正月九日 晴

一御台所御番ニテ、昼夜相勤候事、

〔島津忠義家記所収〕

一今日諸所分取物運方相成候処、御屋敷中ハ分取物山
ニ相成候、尤大津・白川・宇治辺へ米囲置有之、運
方相成候得共、二三日ニテ不運取様有之、未何万俵
ト不相知候事、

(記)
今日議定三條前中納言美始メ任職アリ、本藩人参与岩下
佐二右衛門平方、又外国事務取調掛ヲ兼シメタリ、

七五〇 平戸藩市中巡邏ヲ罷ラル

正月九日、平戸藩市中巡邏ヲ罷ラル、
旧邦秘録

副總裁議定故ノ如シ

三條前中納言
岩倉前中將

松浦肥前守

議定職

聖護院宮嘉言親王
徳大寺大納言

市中巡邏被免候事、

仁和寺宮嘉彰親王

右之通可相達旨、参与衆被申渡候、仍テ申入候也、
正月九日 参与

外国事務總裁大將軍故ノ如シ

役所

三條前中納言

薩摩少將殿

東久世前少將

家来中

岩下佐次右衛門

後藤象次郎

七五一 参与岩下方平外国事務取調掛ヲ兼ネシム

正月九日、本藩人参与岩下佐二右衛門(次)方、
外国事務取調掛ヲ兼ネシム、

外国事務取調掛

右以

叙慮被

仰出候事、

七五ノ二
留守居ノ届書ヲ載ス、

御書附 一通

但三條前中納言様・岩倉前中將様副總裁等之儀、

右

禁中御仮建江外御用ニ付、罷出候処、議定職御老人様

江御一通ソ、御渡ニ相成御書付之由ニテ、非藏人ヲ以

被成御渡候間、可申上旨申述置候付、相添此段申上候、

以上、

辰正月九日

新納嘉藤二

伊勢様

〔島津忠義家記所収〕

七五ノ三
同十六日ニ至リ、在京藩吏ヨリ藩庁ニ通牒セリ、

三條前中納言様・岩倉前中將様・副總裁等、且 思食

有之、運送為一助百姓人夫之儀ニ付、別紙式通（百姓人夫
ノ達ハ正
参看）之通被

月六日

仰渡候付、向々江申渡候、此段申越候条、

中將様被達

御聴、其許申渡之儀共、何分ニモ可被取計候、以上、

辰正月十六日

關山 糺

島津圖書殿

桂 右衛門殿

小松帶刀殿

川上龍衛殿

町田内膳殿

〔朱〕
一本文

中將様達

御聴、別紙扣置、此旨及御返答候、以上、

三月十五日

關山 糺殿

〔島津忠義家記所収〕

七五二 付記一

七五ノ一
旧邦秘録

一十月九日ニ

王政御発頭ニ相成、大ニ騒働ニ及候、就テハ尾・薩・

越・土・藝五藩六門堅メ被 仰付、其嚴ナル事、譬

へ難定勢ニ候、將軍ニハ二條城へ即ヨリ様子相交、

守護職ノ會侯、所司代ノ桑名侯引入候折柄、

朝議モ稠敷御奉問候処、尾・越願候ニ付、御内諭ニ相成候処、

朝命ハ何様共領受可仕、乍去兵隊下々ノ決定難事ノ申立モ有之、其内十二日夜ニハ大勢引率下坂ニ相成、尤會・桑付添先夫ニテ無事ノ処、段々子細柄ニ相成、尾・越モ下坂ニ被及候得共、終ニ去三日昼過ヨリ兵端相開、度々大戦有之、伏見・鳥羽街道・竹田街道・大宮筋四ヶ所へ一所打立砲戦、誠ニ勇々敷申ニモ余リ有、四ヶ所專薩兵ノ手并長兵而已引受、官軍卓強ノ次第、今日ニ至リ数度大戦、一度モ敗リ取候事無之、薩兵ハ未一步モ引候事無之、兵氣勢熾ハ和漢無之程ニ強兵ト可申、手柄ノミ夫程ノ事故、手負死人モ少々ハ有之候得共、敵ト競ヘ候得ハ、百分一モ不及、三日ヨリ今日迄、終ニ衆中以上九人程、奇ト申妙ト申欵ト申事ニ付、皆強勇文ノ事候欵、兎角天神神武可然奉存候事共ニテ、四ヶ所昨晩迄淀辺迄打退ケ、今未明四五百人ハ、川下候様落行、残兵征伐、尤淀城焼打只今モ最中ニテ、砲声乍聞此状モ認、此戦ハ何モ子細有之間敷存候、手負死人名前不申越、自然九乍自本

本マ、
宮ヨリ仕出ス文言、

肝付郷兵衛殿状ニテ候半、

七五二二一

高田善助通信正月八日

一 ヒイロン船入港便ヨリニテ、廣島産九助ト申者、ボウトイン部屋ニ居申、上方ノ形勢粗承婦リ候風評、御聞被成度ニ付相尋候処、勿論兵庫ニテ承ル事故、睨ト仕候事ハ無御座候得共、世評凡左ノ通申出候、
一去ル四日夜、伏見放火、
一五日、大坂御屋敷出火、
一六日、淀ノ城其外ハ、會津・幕府歩兵大勢固メ居申候処、伏見ヨリ ⊕ ⊖ 其外、八ヶ国ノ勢ニテ押寄戦争、翌七日、落城仕候由御座候、尼ヶ崎落城仕候由、西ノ宮・兵庫山手・神戸山手ニハ長州勢入込、并ニ播州辺ヨリ、段々押行候趣ニ相聞ヘ、幕府兵庫詰ノ咄ニハ、西国方少々敗北ノ趣ニ申候得共、御承知ノ兵庫小豆屋ト申候間屋、ボウトインヘ帰り、咄仕候趣ニテ、幕勢大敗北、薩州・長州・土州ノ猛勢難当、大坂ノ者共、西国勢ニ随從仕候趣ニ相聞得申候、尤是ト申候テ、慥成証拠ハ無御座候得共、風聞

如斯御座候、五代様(才助)、当地迄御下り被成候様子ニハ、相聞得申候得共、是以耽ト仕儀ハ相知レ不申、御頼ニ付、直ニ御内々御耳ニ入置申候、決テ本説ト相成候儀ハ御断申上候、御覽ノ後ハ、御火中可被下候事、

辰正月八日夜

高田善助

七五ノ三
旧邦秘録

一 公家御門ノ前桑名守衛ノ儀、被止候ニ付、其場所速

ニ嚴重可警衛ノ旨、御沙汰候事、

一 其藩中可然仁両三輩、為参与即時可差出旨、御沙汰候事、

参与人体各注進ノ通被仰付候、御改革ノ御時節、万事尽力可有精勤候事、

但

御政事規則相立候迄、一同辰刻参集、於夜分ハ

申合、四五人宿直可有之候事、

一日御門并穴門四ヶ所内外、

一 御台所御門并北ノ方穴門二ヶ所内外、

一 参台殿并奏者所ノ前、

一 神仙御門往反人数改取締所、

一 公家御門前桑名固被免引替、

外御座檐下詰、任撰十人ノ事、

御邦道廊下檐下詰従僕ノ事、

王政復古大变革ニ付テハ、何時非常ノ儀モ難計、依

之右御場所藩兵ヲ以、嚴重警衛可有之旨、

御沙汰候事、

但九門内ハ勿論、

七五三 徳川慶喜以下ノ官位ヲ褫キ其京邸ヲ没収

ス

正月十日、徳川慶喜以下ノ官位ヲ褫キ、其京邸ヲ没シ、家人ハ敵境マテ追放スヘシト令セラル、

(記)

本日徳川氏以下ノ六人、及ヒ徳川氏家臣十九人ノ官位ヲ褫キ、其京地ノ邸ヲ没シ、家人ハ皆之ヲ追放シ、若州小濱以下五人ハ不審ノ廉ヲ以テ、入京ヲ禁セラレ、本藩及ヒ土州・藝州・長州・肥後四藩ニ命シテ、會津・桑名・

明治元年(1868)

高松・松山伊予、久松定昭・松山備中、板倉勝靜・大田喜河上總、大内正質ノ京邸没収

ヲ命セラル、
七五三ノ一
旧邦秘録

御達書

御達書

奥州會津

勢州桑名

讚州高松

豫州松山

備中松山

上総大田喜(多)

右慶喜同意反逆顯然候間、悉屋敷召上、残兵追放被

仰出候事、

但残兵敵地迄可相送事、

若州小濱

濃州大垣

志州鳥羽

丹後宮津

日州延岡

右御不審之次第有之付、被止入京候事、

七五三ノ二
旧邦秘録
一

徳川慶喜

奥州會津

勢州桑名

讚州高松

豫州松山

備中松山

上総大田喜

若年寄

永井玄蕃頭(尚志)

同並

平山圖書頭(敬忠)

同

竹中丹後守(重國)

塚原但馬守(昌善)

大目付

戸川伊豆守(安悉)

同(大坂町奉行也)

松平大隅守(信敏)

目付

新見相摸守〔正典〕

設楽備中守〔龍標〕

榎本對馬守〔道章〕

牧野土佐守〔成之九〕

岡部肥前守〔家次〕

大久保主膳正〔陸軍奉行並〕

小栗下総守〔政重〕

星野豊後守〔成美〕

高力主計頭〔陸軍奉行並〕

小笠原河内守〔前京都見廻長〕

大久保能登守〔統隊奉行〕

戸田肥後守〔勝強九〕

室賀甲斐守〔正容〕

室賀甲斐守〔側衆〕

右今度慶喜奉欺

天朝反状明白、既ニ兵端ヲ開候付、追討被 仰出候、

依之右之輩随從于賊徒反状顯然候間、被止官位候事、

留守居ノ届書ヲ載ス、

御書附式通

但奥州・會津外ニ五藩、徳川慶喜江同意ニ付、屋敷

召上、残兵追放之儀、

徳川慶喜外ニ會津・桑名等、奉欺

天朝候付、被止官位候儀、

右禁中御仮建へ可罷出旨、以御切紙御達ニ付、罷出候

処、土州・藝州・長州・肥後一列鶴之間ニテ、西四辻

大夫様ヨリ被成御渡、五藩人数中并主水致同道、屋敷

有品等同人へ引渡候様、御口達ヲ以被成御達候付、五

藩申談之上、一藩又ハ二藩請持相改候上、主水へ引合

相渡候筋ニ相同候処、其通可取計旨承知仕候、將亦残

兵敵地迄可送トノ御ケ条之儀ハ、洛外へ追払、諸所固

メ場江宛付状相渡度旨、申談候上相同候処、其通取計

候様、御達承知仕候付、可申上旨申上置候、

右之通、私相動申候間、別紙相添此段申上候、以上、

正月十日

新納嘉藤二〔立夫〕

伊勢様

七五四 薩兵京都高松藩邸ヲ没収ス

正月十日、薩兵京都高松藩邸ヲ没収ス、

(記)

十日本藩・長・土・藝・肥後ノ五藩ニ、會津始六藩ノ京都在邸没収ノ令ヲ伝ヘラル、是ニ於テ各藩協議シ、一藩又二藩邸ヲ請収ムヘシト決シ、本藩ハ高松藩邸ヲ収ムルコトニナシ、本日申刻七ツ時方大工頭中井主水ヲ監視トシ、本藩軍賦役田中清右衛門、六番小銃隊及ヒ足輕若干ヲ率ヒ、高松藩邸ニ臨ミ、藩吏北原直左衛門・一井信吾ニ命ヲ伝ヘテ、邸ヲ収メ器具類ヲ出サシメ、悉ク之ヲ中井主水ニ交付シ、藩吏北村ヲ始メ、男女壹百五拾壹人ヲ門外ニ追放シテ帰邸シタリ、

高松屋敷

右慶喜同意反逆顯然候間、屋敷召上殘兵追放被仰出候付、御大工頭中井主水殿致同道、屋敷相請取有品等相改、右同人江引渡候様被仰付候付、昨十日夕七ツ時分、右同人并御軍賦役田中清右衛門同道、右屋敷江差越、留守居北原直左衛門・一井信吾江面会演舌之上、從朝廷被 仰渡候御書付写、為致拜見候処、此節之儀何トモ奉恐入候次第二テ、委細奉畏御請仕候段承届、左候テ殘兵別紙之通罷居候間、不殘為引取候上、屋敷中相改、有品等中井主水殿江引渡置罷帰申候、

但

有品之儀過分ニ有之、急々取調行届兼候付、今明日中細々取調候上一帳取仕立、
朝廷江御届之節、同案此御方江モ差廻候様、可致段モ承届置候、

右之通御座候間、別紙人数書一通相添、此段申出候、以上、

御留守居付役

辰正月十一日

隈元敬一郎

新納嘉藤二殿

右之通相勤申出候間、此段申上候、以上、

但名書一通相添差上申候、

辰正月十一日

新納嘉藤二

伊勢様

右ニ添別紙

高松家中

北原直左衛門
一井 信 吾
女式人

家来 八人

小泉 七藏

総人数

百五拾老人

馬一疋

留守居ノ届書ヲ載ス、

高松屋敷

右慶喜同意反逆顯然候間、屋鋪召上残兵追放、敵地迄

可相送旨、被

仰出候付、中井主水同道仕、残兵追放之上、屋敷并有

品等、右同人江引渡置申候間、此段御届申上候、以上、

正月十三日

新納嘉藤二

京都詰藩吏、正月十六日付ヲ以テ藩地ニ通シ、同月二十

五日付ヲ以テ、回申アリタリ、

去ル十日

禁中御仮建江可罷出旨御達付、御留守居新納嘉藤二罷

出候処、奥州會津外ニ五藩、慶喜同意反逆顯然候間、

悉屋敷召上追放之儀、且慶喜外ニ會・桑等奉欺

天朝候付、被止官位候儀ニ付、別紙式通之通被仰出候

ニ付、高松屋敷江御大工頭中井主水殿、并御軍賦役田

中清右衛門同道差越、留守居北原直左衛門・一井信吾

江面会演説之上、從

朝廷被 仰渡候御書附写、為致拜見候処、何トモ奉畏

御請仕候段承届、左候テ残兵不殘為引取候上、屋敷中

相改、有品等右主水殿江引渡罷帰、右付御名内御留守

居名前ヲ以、御届被仰上候、別紙相添此段申越候条、

中将様可被達

御聽候、以上、

辰正月十六日

關山 札

島津圖書殿

桂 右衛門殿

小松帶刀殿

川上龍衛殿

町田内膳殿

本文通知ニ接シ、三月十五日付ヲ以テ回申シタリ、

〔参考〕本文致承知 中将様達 御聽、御書附并別紙・御留守

居首尾書控置候、以上、

三月十五日

川上龍衛

關山 糺殿」

(按)別紙トハ左ノ二通ナリ、

御書附二通

但

奥州會津外ニ五藩、徳川慶喜江同意ニ付、屋敷召上残兵追放之儀一通、徳川慶喜外ニ會津・桑名等、奉欺

天朝候付、被止官位候儀一通(本文ハ、正月十日ニテアリ、參看)

【參照】

相良新右衛門覚書

正月十日 晴

一桑名屋敷請取ニ、六番隊並足輕差越相成、請取方有之候由、

七五五 京都詰家老ヨリ藩地へ戦状ヲ報ス

徳川慶喜上京之由ニテ、坂兵戎服大砲等携、伏見又ハ鳥羽街道筋へ出張、蒙

朝命上京ト申偽、理不尽ニ押通り候付、砲発及合戦、毎度坂兵致敗走、十分之勝利ニテ追々致追討、淀城迄

押詰メ候筈之段ハ、堀直太郎急便申越通ニテ、右同日淀城近辺潜伏之賊兵合戦ニテヨヒ、尚亦勝利ニテ淀城へモ及砲発候処、全ク彼方ヨリ不致砲声候故、益満與右衛門右城内へ使者ヲ以、此節賊兵相困置候聞得有之、致探索差出候様申述候処、全ク左様成者無之旨承候付、左候ハ、城内可致見聞申聞、都テ相改メ候処、不審成者モ無之候付、尚亦官軍可繰入旨致演説候得ハ、美濃守留守中御受難仕、併勅命ニ依テハ、無致方旨承届候付、官軍之儀候得ハ、

勅命同様之儀、殊更

征東將軍ヨリ命令モ有之候段、申聞候処、無訊城中差出候付、則兵隊等繰入、翌六日晝ヨリ八幡山へ責入、追討候処、同断及接戦、至極之難戦ニ候得共、終ニ勝利ニテ、橋本迄追退ケ、当分同所台場乗落シ、致伏勢居、翌七日枚方迄押詰メ候賦之処、枚方辺賊党相退キ下坂、最早賊兵無之旨、斥候ヨリ申出、然処

勅書被 仰出候付、追々坂城へ攻寄候賦候処、慶喜儀右始末恐入候儀ニ付、浪花城ハ尾・越之両侯へ相託、慎テ東退仕候旨、越前ヨリ使者ヲ以別紙之通、橋本出陣先伊地知正治へ致演説候旨申出候、且 征討將軍モ

昨日ヨリ浪華迄御出陣之由ニ候、右通初発ヨリ度々之合戦、始終得勝利、速ニ賊兵追払、

朝廷之御威光ハ無申迄モ、此

御方様之御美目、実ニ御同慶之至ニ候、委細之儀ハ高崎左京へ申含越候条、御聞届之上

中将様可被達

御聴候、以上、

但

砲銃其外武器類分捕等多ク、且殊之外戦死人數等相少、為御心得別紙サシ越候、

辰正月十日

關山 糺

岩下佐次右衛門

新納 刑部

島津圖書殿

桂 右衛門殿

小松帯刀殿

川上龍衛殿

町田内膳殿

七五六 西郷・久保ヨリ戦状ヲ報告ス

七五六ノ一

西郷吉之助ヨリ桂右衛門ニ戦状ヲ報ズル書

尚々、江戸御屋敷を焼崩され、大坂之御屋敷焼失、

此両件実ニ残念之仕合、是丈ケか負ニ相成候事ニ御

座候、

中将様益御機嫌能被遊御座、恐悦之御義奉存候、陳ハ去ル三日徳川暴挙之振舞、先日申上置候通ニ御座候、六日迄八幡江押詰無難攻落橋本迄追詰候処、山崎御固ハ藤堂ニテ御座候処、是も官軍ニ属し共相戦候故、訳もなく責拔追卷り候処、枚方迄も足を止候義不相叶、勿論枚方江出張之兵も共崩いたし、大坂江逃込候処、大坂城中大ニ恐怖を懷、一足もたまり得ず、薩・長之兵今夜押寄も不被計と申事ニテ騒立、取る物も取あへず逃支度を成し、七日朝より八日迄ニ相掛、一人も不残大坂城中ハ逃去、越前藩大坂詰之者を召呼、別紙之書面慶喜東掃之届書を相渡、早々薩・長之先手江写ヲ以相告異、急撃を免れ度之事而已ニ御座候、三日より六日迄之連戦一步も不退、少々之敗もなく、勝どほし之軍ハ未曾有之戦ニテ御座候、為

皇國御悅可被下候、人数之多少を比較いたし候へハ、
 賊軍ハ五増倍之事ニ御座候得共、かくのごとき勝利ハ、
 いまた不聞義ニ御座候、京攝之間余程人心を失ひ居候
 事ニて、今日ニ至りてハ、伏見辺ハ兵火之為ニ焼亡い
 たし候得共、薩・長之兵隊通行之度毎ニハ、老若男女路
 頭ニ出、手を合て拜を為し、難有くくと申声而已ニ
 御座候、戰場ニも路々糧食を持出し、汁をこしらへ、酒
 を酌て戦兵を慰し、国中之人民藩地ヲ指よりハ、まさり
 て覚候事ニ御座候、淀城ハ前以より、賊兵を城内江不
 入付、城下迄押詰候処、頻歎願有之、焼落し不呉候様
 との事ニ御座候て、城内よりハ一発も不打出候故、城
 ハ不焼ニ市町之賊巢を焼払て、賊ヲ追落候処、其後ハ
 淀ハ余程世話をいたし呉、大ニ都合能事ニ御座候、近
 畿之諸侯は皆官軍ニ属し、又両端を懐き居候藩々も方
 向相定、官軍日々に盛大ニ罷成申候、御安慮可被下候、
 山陽道ハ姫路賊ニ与し居候故、長兵備前と合し、打卷
 る賦ニ御座候間、必ず不日勝報可有之と相待居申候、
 山陰道ハ西園寺様惣ニ宰て、薩・長之兵を率御出張相
 成候処、是ハ戦ハ不致、丹波、丹後、但馬三丹ヲ御説得相成候て、官軍
 ニ被属候御策ニて御座候処、龜山ハ早く相隨ひ候趣申

来、追々官軍ニ属し候向と被相聞申候、大坂之通路を
 久敷被塞候てハ、大ニ困究可仕と相考居候処、案内急
 速ニ相開、天幸此事ニ御座候、今日ハ征討將軍之宮錦
 之御旗を押立、浪花迄御出張之賦ニて、昨夜枚方御泊
 ニて御座候、

皇威之輝とハ今日之事ニ御座候、御遙察可被下候、い
 また混雑中ニて、不能詳悉候得共、大略勝軍之一左右
 迄、如此御座候、恐惶謹言、

正月十日

西郷吉之助盛隆

右衛門様桂久

御侍史

(島津忠承氏所藏本にて校訂)

七五六ノ二

大久保一藏ヨリ養田傳兵衛ニ戦状ヲ報ズル書

去ル五日、堀直太郎被差立形行申上置候処、其后日々
 官軍之勢相加、同日淀屯集之賊徒悉ク退散、淀城之儀、
 賊滞陣之趣申触候得共、左ニあらず、城内ニハ一人も
 入れざりし由ニて、点検ヲ受、
 官軍を迎へ候次第ニ御座候、此日戦もよ程烈鋪、当朝
 四日ニ追退られ候残徒、鳥羽口迄進出、根強ク必戦、
 味方手負・戦死も相応有之候得共、終ニ

官軍之勝利と相成、淀ニもたまり得ず、八幡をさして敗走、仍て淀市中ハ兵火と相成、城内無難ニて相濟候官軍長・薩ノ、力ヲ以如此

一同六日、

官軍益進んで八幡ヲ進撃、同所要地故賊も十分ニ手配りいたし、新ニ砲台等相構へ、八幡宮前人家、或ハ橋本辺関門等迄人数相備へ迎戦候得共、

官軍薩短兵急ニ相懸り、尽ク破られ、関門之儀ハ搦手之山合ヨリ薩・長不意を打、且藤堂勢

官軍ニ属シ、前面ヨリ砲発ニ及び、終散々ニ討成され敗北す、関門之守兵固より若州勢・官津勢ヲ以警衛之上、會・桑残兵取合、此要地を被取候ては不相成とて、死力ヲ以防禦に賢ク手を廻し、用意いたしたる向ニ候得共、終ニ利あらず、此日賊兵死傷不知数と申事、我兵も死傷も少々有之候、関門ハ直ニ薩・長兵ヲ以相固メ候事、

一七日平方迄賊兵落たると之説ニて、斥候差出及探索候得共、中々同所ニも足を留る事不能、華城をさして逃去りしと聞候、

一八日朝、大坂邸中詰合之者之由にて、越藩兩人八幡先

鋒我軍宮ニ来り、徳川慶喜始會・桑東退いたし候趣演舌、就ては此一封別紙に記

奏聞ニ及筈なり、早々薩・長之先鋒隊江通シ呉候様、華城目付役妻木某より頻ニ相頼と之事候由、於大坂ハ、既ニ今晚森口辺迄薩・長先鋒押寄、直ニ華城江急撃いたすと之事ニて、狼狽不可謂、実ニあはたゞしく軍艦を以東帰いたし候次第ニて、見苦鋪体なりしとぞ、凡先鋒隊賊兵は、會・桑新撰宗徒之者にて、委曲ハ分り兼候得共、二千人余ハ有之たるニ無相違相聞候処、何分頼切たる人数残少なに打成され、薩・長之官軍不可当之勢を相通し候処より切迫し、右時宜ニ相及候事と被察候、賊之巨魁打洩したるハ、別て遺憾に堪す候得共、始終

官軍之大御勝利ト相成候段ハ、

皇運弥挽回之瑞と可申候、是偏ニ薩・長之粉骨碎身、苦戦を成たる故也、

一征東將軍宮江六日晚より小拙随從仕候、翌七日東寺

御発途ニて淀江

御入城、翌八日御参詣被為 在候也、八幡・橋本関門等之戦地、凡て

御巡覽被為、遊、隊長共被 召出、戰之始末

御尋問 御慰勞被為 在候、錦之御旗飄され、処々

御巡覽ニ就て老若男奉迎望、難有々々トいえる声、流

石ニ一天之主之

御軍はかゝるものと、涙を吞候計ニ御座候、

御巡覽先にて華城之様子御届相成候付、

朝廷上之御模様弥越藩より

奏聞ニ及候や為伺、小子其尽帰京仕候処、同夜半無相違

奏聞相成候事、

一昨九日、將軍

宮は平方^枚迄御進發、先鋒を華城迄被差向、報知次第御

入城、尚

官軍之 御威光被輝、外夷御布令等も可被為 在様、

朝議被相決候、小拙ハ被差留大山格之助被差出候、大

坂江は今早天より御国人數九小隊クリ出シ、長兵も同

様差出候、然処昨夜華城焼失之段相違、先殘兵之所為

と被聞候得共、未しかと相分不申候、必処々殘兵も難

凶、同所次第ハ出張之者より申上ニても可有之候、

一昨日三條卿副總裁外國掛被 命候、東久世公外國掛被

命候、

一徳川慶喜罪状ヲ鳴シ、御布告之發するニ臨ミ、岩倉卿

土佐^{山内}^堂ニ御出、大議論ニ被及、最早今日を手切ト思

食候、此上扶幕之御考ニ候ハ、早々坂地江御下り、

十分ニ慶喜を御助可被成、少も遺憾無之候、是迄通曖

昧たる事ニては、不相濟候付、断然御断決可有之ト御

切詰相成、流石ニ閉口ニて、此上ハ

朝廷御沙汰次第可奉畏ト之事ニて、家中一同江も布告

等有之、後藤・福岡等も承伏之由ニ御座候、其余尾・

越・宇和島等も無子細、実ニ此卿ハ希代之人傑と可申、

今日此に至りしハ、一人之力と謂ツテ可なるべしか、

徳川慶喜姦惡之次第、別紙^{對薩}^ヲ奏 御国之事ヲ布告等い

たし、兩三日跡

朝廷にも差出候由、大ニ姦謀有之たる事と相見得、間

ニ不容髮之危と可申候、旁

天運之不尽処御同慶奉存候、

右今日高崎等被差立候付、大略申上候、尤小拙事戰

地ハ踏不申、事実少々相違之事も可有之、委曲ハ外

より御問合可相成と、早々如此御座候、奉達

御聽候儀以御勘考可然奉頼候、以上、

正月十日

大久保一藏

叢田傳兵衛様

〔島津忠承氏所藏本にて校訂〕

別啓

別紙之通今般大合戦、連日之間一日も敗軍無之、

官軍之御勝利と相成、終ニ華城を捨賊徒落去之次第、

誠ニ

皇運之然らしむる所以、先々御同慶奉存候、乍恐

太守公にも別て御安堵被遊候、賊徒姦謀実ニ可惡次第

にて、別紙之通罪状を鳴し、御国を宛にして先鋒をク

り出シ、

朝廷ニ奏し、一挙して可討と之策ニ相見得申候、然る

ニ早断然

朝廷之御達も有之、機先を制シ一撃して打払ひ候故、

密策も画餅ト相成候姿ニ御座候、いかほど罪名を数へ

候ても、

朝命を相反シ候筋合無之、固より九日之挙ニおひてハ、

五藩同意各君侯参

朝、警衛被差出候得ハ、一藩をさし候道理も無之、最

両事件^{官位}領地^{領地}之儀ハ、第一御国より之論ニ候得共、是ハ

字内之公論にて、寸毫私ヲ容るニ地なきものと云ふへ

し、猶東浪士之事ハ、失なしとも難謂候得共、是も

渡ス渡ましとの事より、及砲発候訳にて、武門之不可
止者も可有之、何分ニも当らざる之罪名、おかしなも
のニ御座候、幾重にも

朝廷無御動揺御確定、征東將軍官被置錦旗ヲ飄し、

御出軍被為在候故、三軍鼓舞いたし候事ハ勿論、四方

孰れか移靡帰響セざるへき、既ニ因州・藤堂如キも、

砲発ニ及び賊ヲ討候時宜にて、今日ニ至候ては、弥

官軍勢盛ニ相輝キ申候、順逆曲直明瞭たる次第にて、

誠ニ以無此上御都合之事ニ御座候、此上ハ外国御交際

之儀第一にて、則將軍官華城御入城、三條公なども

御下坂、御取掛之御賦御座候、賊関東ニ退キ候儀、万

々遺憾之至候得共、尊氏西国より再挙セシ様ニハ、今

時にてハいたり不申候、尤早々御処置なくんハあるへ

からす事ニ候、此跡

朝廷之御処置振御大事にて、寸毫被失候得ハ、人心相

背、必武家を慕ノ復轍を可被為踏御事候間、精々尽力

もいたし候事ニ御座候、既ニ賞罰之御内話も承候間、

談合之上決て長・薩ニ私し給ハす、戦候藩々ハ同様ニ

御褒賞被為在候様、精々申上置候処、先其通御治定ニ

て御座候、内夷ハ兩藩之力ヲ以社、此ニいたり候訳な

から、外ニ同様賞ヲ被与候得ハ、大ニ感動之場も可有
御座と奉存候、尔后ハ合力同心を以、

皇国維持不致候ては、万々相済不申候間、折角談合も
いたし候事ニ御座候、長候不遠上京可相成と、折角相
待居申候、願クハ

中将公三月比ニハ寸時ニても

御上京被為在候様、奉渴望事ニ御座候、

右老兄迄申上候、御差合居可被下候、以上、

正月十日

一藏

傳兵衛様

(天久保利謙氏所蔵本にて校訂)

七五七 京都詰家老ヨリ竹内・木場兩人ノ進退ヲ

通ス

同日、本藩脱士竹内・木場兩人進退ノ事ヲ通セリ、

旧邦秘録

竹内建蔵

木場十蔵

右ハ昨年致脱走候者共ニテ、此節爰許ヘ差越、不容易
形勢ニ付、滞京御奉公仕度歎願申出、形行達賞聞候段
ハ、去ル五日、堀直太郎急便申越通ニテ、尚又及吟味

候処、当世態無抛願意難被捨置訳ニハ候得共、其通被

仰付候テハ、以来之御取締ニモ相拘リ、不容易事候ニ

付、高野辺ヘ浮浪輩多人数相集、鷺尾侍従様ニモ御潜

居、勤 王之御趣意モ相立候間得有之候間、此節柄可

御用立モ難計候付、彼方ヘ差越、国家為尽忠之志ヲ立

候テ、オノツカラ御採用モ可被為在旨、内諭イタシ置

候、御心得旁此段申越候条、中将様被達御聴候儀共、

何分ニモ御吟味次第、御取計可給候、以上、

辰正月十日

新納刑部

島津圖書殿

桂 右衛門殿

小松帯刀殿

川上龍衛殿

町田内膳殿

七五八 有川七之助京地ノ情報ヲ報ス

同日、有川七之助京地ノ情報ヲ報ス、

旧邦秘録

一大坂城八日朝ヨリ長兵火ヲ掛、昨日迄ニテ都テ灰燼

ト相成申候、

一 大坂詰役所へ潜伏、御屋敷ハ此方ヨリ火ヲ掛焼払、
外御屋敷ハ無事、

一 昨十日宮御下坂、西御堂御出陣、

一 高松・桑名屋敷此方ヨリ乗取、

一 會津用達所同断、

一 当所長崎会所同断、

一 米五千石余分捕、

一 川口番所大砲其外分捕数不相分、

一 川舟其外海舟品々同断、

一 此御方川御座舟無難、

一 御物黒砂糖千四百丁程焼ケル、

一 黒砂糖一万五千百六十五丁、

一 白砂糖五千百六十樽、

右二行残ル、

一 白砂糖千三百挺、

高松屋敷ニテ分捕、

一 會兵殘党今日ニ至リ一人モ不相見得候、

右之通ニ付、先爰許荒増相分候丈申上候、委細ハ追テ

可申上候、已上、

辰正月十日

有川七之助

京都ヨリ

旧邦秘録

有川七之助書状

一 筆啓上仕候、諸君被為揃御堅安可被成御座、奉恐喜候、随テ私モ無異送光、乍憚御放慮可被下候、然ハ京都表ノ形勢、京都表ヨリ右通被仰越候通、去ル六日八幡・山崎、南ハ橋本マテ追打、同所賊軍固メ、長兵ヨリ手強相掛候処、川越ニ藤堂固ヨリ横矢ニ打スクメラレ、賊兵足ヲ止不得、浪花ヲサシテ落行候、然処八日ヨリ薩・長兵下坂、直ニ浪花城へ火ヲ掛候処、昨日暮方迄ニテ鎮火相成、日本一ノ名城一時ニ灰煙ト相成候儀候間、硝薬ニ火移候ヤラ、大坂中鳴動夥敷事、中々難述言語候、前以尾張へ引渡、東退イタシ候儀ニテ、焼打ニモ不及答候得共、長ヨリ火ヲ掛、城丈ハヲシキ物ニ御座候、左候テ桑名ハ勿論、松山・高松・若州・大垣・宮津・延岡等ノ屋敷ハ都テ乗取、追々追討モ被仰出答候、乍然大垣等ノ小藩ハ官軍ニ属候向ニテ、様々謝罪申立候様ニ成立、関西ハ一統立所ニ官軍ニ属シ可申、肥後杯首迄ハ始終両端ヲ抱キ、傍觀ノ体御座候

得共、首ヨリハ不目立様官軍ノ形ヲ顯シ可申、大藩トシテ見苦敷次第、且可憎ノ物ニ御座候、

一米ハ京都並当地ノ分捕無際限モノニテ、余イ八石(有餘アリ)トシテ、全御統等ノ手数ニ及不申、金モ少々手ニ入候得トモ、是ハ纔計ニテ、当座ハ先差支無之候得共、追々

ハ事欠可申、首ヨリ相応之御物入可相成候得共、後々ハ補ヒノ道ハ、現在相見得居候事ニテ、差掛リノ心配

迄ニ御座候、弥以此節ノ大機會絶言語、畢竟朝廷ノ御威光、且ハ兵威ノ盛ナルヨリ、一時ニ大敵ヲ

退ケ、皇國中武名ヲ輝シ、日ヲヘスシテ一統官軍ニ服屬ノ儀、相違無之、誠ニ大愉快ノ事ニ御座候、

一於御国元ハ、海軍其外猶更嚴重御堅備第一之事ト奉存候、何分東賊ノ頼所、佛国ヨリ外ニ有之間敷候得共、幸

白山来港ニテ、佛国使へ及談判、終ニ免書迄モ受候テ、彼是周旋ノ賦ニ御座候、復古一条御布告ノ由、兩日中

勅使モ御下府ノ筈、人柄ハ睨ト不相分候得共、烏丸公ニテハ有之間敷哉トノ事ニ御座候、乍然全体徳川家親

睦ノ佛国ニ候得ハ、未油断ハ不相成、勝テ甲ノ緒ヲ占候時節ニ御座候間、返ス〜モ御用意ハ專要被為在度

事ト奉存候、右之外段々申上度奉存候得共、多端不能

明細極簡毫如此御座候、

慶應四辰正月十一日

有川七之助

浪花ヨリ

御同席中様

二白、一昨日ヨリ伊勢様へ随從、馬場氏・有馬氏下坂、此御方陣營東本願寺、西本願寺ハ將軍宮御本陣ニ相成、京都ハ勿論大坂中ノ人民雀躍飛立、薩州大明神様ト合掌、我々マテモ、実ニ鼻ノ高キ事ニ御座候、余ハ御察可被下候、

一京都戰爭中当地ハ詰役ノミニテ、賊兵押候氣先相顯レ、皆々上京又ハ諸所へ潜居、御屋敷ハ此方ヨリ焼払、此方皆々無恙歸邸、仕合ノ事ニ御座候、乍然大野正左衛門儀其許ヨリ出立、去ル六日当所川口へ入来候処、賊兵ヨリ逢擒于今不帰来、下人迄暇差免、是ハ決テ就死候儀、相違有之間敷、実ニ残念之至ニ御座候、其外一人モ別条ナク候、

七五九 木場傳内ヨリ家老中へ書翰

旧邦秘録

一去ル八日迄之形勢ヲ以、別紙京都へ御届申上写差上
申候間、御聞通可被下候、尤京都へ差遣候都合之義
ハ、藝・長へ相開キ候船手当、黒田彦左衛門等へ潜
伏之所へ、内々手筈仕置候所、七日夜今北次郎太ヲ
以、船手当致出来候間、住吉冲手ヨリ米異国船ヨリ
夜中乗込候様、申来候得共、別紙之通官軍大勝利之
噂、追々相聞へ申候間、藝・長行之儀ハ取止、右今
北次郎太ヲ飛脚ニ取立、京都へ御届申上候、私相忍
候場所へ住吉御誕生石神主、田中和佐大夫所而夜止
宿、六日朝住吉出立、阿州龜瀬峠鷓鷹兵右衛門ト申
者、和佐大夫縁家ニ付、差越居、日々峠之茶屋へ出、
往来之咄承合居申候、
一十日朝大坂ヨリ飛脚到来、早々罷帰候様申来候間、
夜掛帰坂仕候処、詰中之人数一人モ輕我無之、(傳)再会
イタシ候、仕合之至ニ奉存候、大野正右衛門モ六日、
川口番所ニテ召捕候由ニテ、生死相分不申候、尤上
坂掛ニ御座候、
一別紙通之訳合ニテ、自焼仕候ニ付テハ、誠ニ以無申
訳次第、何共恐入奉存候得共、尚追々差控相伺候様
可仕候、

一戦争後、京都へ現金一万五千両差続、跡残金六千両
御座候間、当月中ハ御用途差支不申、外ニ砂糖代四
万兩程有之、未御払不相成、砂糖代凡十萬兩余ハ有
之賦ニ御座候、ケ様之世体相成候上ハ、随分御金談
ハ程能ク出来可申、相考申候事ニ御座候、

一此内ヨリ申上候通、蒸氣艦ヲ以、砂糖早々御仕登有
之候様、被仰渡度奉存候、

一私ニモ昨夜罷帰候テ、当地之形行ハ巨細承得不申、
ヲノツカラ伊勢殿ヨリ御問越相成義ト奉存候、此段
申上候、以上、

辰正月十一日

(本場書生
木傳)

御家老中様

七六〇 藩内旅人往復船舶出入ノ檢覈ヲ達ス

正月十日、藩庁藩内旅人出入船舶ノ往復ヲ檢覈スヘキコ
トヲ達ス、

(記)

本日藩外旅人ノ社參温浴ノ為メ、領内ノ出入ヲ禁シ、其
取締方ヲ嚴達セリ、

旧邦秘録

一御領国中大社參詣、又ハ温泉等へ差越候旅人差通候儀、不苦旨申渡置候得共、吟味ノ訳有之、右体ノ旅人差越候儀、一往差留候条、旅人入来候ハ、於其関所子細相尋、主用又ハ商法等付用向有之、慥成国所証文等ヲ以入来候者ハ差通、右体大社參詣等ノ者ハ、右之趣意叮嚀申聞可差返候、右ニ付テハ第一取締向ノ儀、受持郡奉行致差引、地頭・領主ハ勿論、此節廻勤之宗門掛並取締向面々へ申請候儀ハ、其通ニテ精微ニ行届候様、可被取計候、且旅船入津之節ハ、諸所津口番所不及改方差通候様、申渡置候通ニテ、其所ニ入港ノ上ハ、夫々関係ノ役々一涯厳重入念可相改候、若不審ノ儀モ候ハ、其段早々産物方掛・御裁許掛へ届可申出候、乍然是迄交ニ商法向取組居候者ハ、勿論差向、為商法差越候船々等ハ、可成丈早目弁別イタシ、為致出帆候様可取計候、此旨早々向々へ不洩様、可申渡候、

辰正月十日

圖書

右衛門

七六一 島津茂久各隊ニ戦功ヲ申供セシム

正月十日、茂久各隊ニ命シテ、三日以降ノ戦功ヲ申供セシム、

七六ノ一

五番隊届書

正月十日

半隊長

大山十郎次

分隊長

山口孝右衛門

小頭

坂元愛之丞

右同

郷田正之丞

小頭

山口喜右衛門

右同

松永清之丞

右同

吉井 叶

小頭見習

穎川與五郎

愛甲嘉右衛門

右同

右ハ初ヨリ隊ニ加リ同様相働キ、染川彦左衛門手負之
後ハ、則ヨリ喇叭役等相働申候、

益満宗之介

大和藩当分御抱相成候事、

斥候役狙撃兼ル

山下助右衛門

川上源七郎

右ハ初ヨリ隊ニ加リ、斥候等相働、抜群粉骨之勞ヲイ

大寺 矢七

タシ、別段一隊之加勢ニ相成仕合之至ニ御座候、

川崎清左衛門

右之通取調御届申上候、以上、

相良五左衛門

野津七左衛門〔鑓進〕

木藤清次郎

監軍

山本正之介

山口 仲吾

廣瀬喜左衛門

七六二ノ一
旧邦秘録

山口 十藏

正月十日

坂元 仲藏

二丸御小納戸谷村小吉〔宣武〕其外、肥後へ御使者トシテ被遣

右之通小頭並小頭見習・斥候役之儀ハ、衆ニ抽粉骨之
勞ヲイタシ申候、

候由、

戦兵

野崎喜左衛門

七六一ノ三
同上

右ハ衆ニ抽初戦之節、太刀初敵ノ首ヲ揚申候、其外何

正月

レモ一同抜群ノ働キニ御座候、

此度

朝命ヲ被奉、御兵馬御差向被成候処、王政御復古ノ

御折柄、一藩ノ枝論全ク大義滅親ノ儀ニ一決、

朝命ヲ一途ニ遵奉仕候趣意申述候得ハ、御人数御引揚

ニ相成候、然上ハ以後

朝命ヲ奉戴シ、弥忠勤相励可申事、

慶應四年辰正月十日

七六ノ四
同上

一 入來一小隊、正月十三日立、阿久根辺迄被遣候、

一 正月十四日朝、高見彌市長崎ヨリ阿久根へ着、

一 正月九日、三邦丸長崎出帆、十日朝着、

一 旧臘廿八日、新納喜之助京師立、正月十二日着、

〔表紙〕

忠義公史料 明治元年正月三

〔扉に、表紙の文字の外に市来四郎編の記載あり〕

目録

- 一 長崎警備トシテ藩兵三小隊派遣ス正月十日
- 参照 無名氏記事四條
- 一時節切迫用途欠乏ナルヲ以テ藩内士民ニ貸上金ヲ命ス正月十日
- 記 達書一通
- 参照 舊邦秘録
- 一朝集會議ヲ止メ諸侯ニ各兵ヲ率テ入勤スルコトヲ令シ

在京各藩臣ヲシテ予メ其期ヲ上申セシム正月十日

記 本書

一 茂久公参内ヲ命セララル正月十日

記 本書

一 征討府高松外三藩ノ征討ヲ命ス正月十日

記 木場傳内書牘

一 征討府本藩兵及ヒ長州藩兵兵庫港警衛ヲ命セララル正月十日

参照 島津伊勢日記抄正月十日

附録 舊邦秘録

一 藩庁兵二隊ヲ日向ニ派遣シテ附近ヲ徇フ

一 茂久公復古討賊ノ功ヲ賞セラレ御劍ヲ賜ヒ尚戦亡者ニ

金ヲ賜フ正月十日

記 本書

御沙汰書二通并ニ留守居届書

藩吏通牒往復

参照 藩記節録

大久保利通日記節録

相良新右衛門覚書節録

一 小濱・大垣兩藩謝罪先鋒ヲ許サレタルコトヲ達セララル

正月十日
二日

記 達書

一 徳川慶喜東帰ノ情由及ヒ後日ノ形勢ニ因リ再ヒ上京ノ意ヲ列藩ニ告ク正月十日

記 触書并ニ老中口達書二通

届書一通

参照 木下家記

大村家記

勝安房日記抄

一 徳川慶喜諸藩老ヲ召シ三日以後ノ事体及ヒ其心情ヲ陳

シ朝敵ニ無之趣ヲ救解セシム正月十日

記 書付(上意書)

老中演説書

参照 春嶽私記

水野忠敬家記

上杉茂憲戊辰事情

仙臺藩記

加賀藩上申

中村武雄手記

開成所会議概略

一 茂久公議定ノ任命ヲ訓示シ賀詞ヲ達セリ正月十日

記 本書

一 茂久戦亡藩士ノ墓ニ臨ミ勅書告祭式ヲ行ハル正月十日

参照 藩記

大久保利通日記節録

一 茂久公岩下・西郷・大久保ノ功劳ヲ録シ物ヲ与ヘテ之

ヲ賞セラル正月十日

参照 大久保利通日記節録

一 本藩長藩ト俱ニ粮米下賜ヲ辞退セリ正月十日

記 本書

一 戦功賞賜ノ勅書ヲ出軍人ヘ告示ス正月十日

記 通達書

一 本藩士十六藩士ト会議所ヲ置キ長崎ノ施政ヲ管理セリ正月十日

正月十日

記 河津伊豆守各国領事ニ賜ル書

同人ヨリ肥・筑二藩士ニ賜ル書

同人ヨリ各国岡士ニ賜ル書

各国領事肥・筑二藩士ニ贈ル書

各国領事書翰

運上所答書

肥・筑二藩士答書

諸藩士誓書

十六日會議所布告書

各国岡士ニ贈ル書

運上所ニテ英岡士ト筑・肥・薩・土四藩士ト
接書

運上所ニテ各国岡士へ応接書

薩州・肥後・筑前・土州藩士佛国岡士へ応接
書

英国領事答書

参照 鶴津一掃記節録

寺師宗道日記節録

舊邦秘録

無名氏記事節録

中江九左衛門外二人書牘

杉孫七郎書牘抄

七六二 長崎警備ノ為藩兵派遣

正月十一日、藩庁長崎警備トシテ、藩兵三小隊ヲ派遣ス、

(記)

本日、城下兵具方与力一小隊・蒲生郷一小隊・國分郷大

砲半座ニ、長崎派遣ヲ命シ、兵具奉行益満新之丞差引、

帖佐彦助監軍トシテ之ヲ率ユ、同十三日鹿兒島ヲ出立ス、

尋テ入來郷一小隊又出發ス、

【参照一】

舊邦秘録

正月十日、与力一小隊・蒲生一小隊・國分大砲半座、

長崎表へ被差出、益満新之丞差引被仰付候、

【参照二】

同上

正月十一日、御兵具方与力ニ蒲生・國分衆中ノ三小隊、

長崎辺へ被遣候ヨシ、物主ハ益満新之丞、監軍ハ帖佐

彦助ニテ候ヨシ、

【参照三】

同上

十一日、

御兵具方人数出兵前日、調練場へ狐一疋出候間、尻ヲ

居暫時罷居候ヨシ、出兵人数是ヲ見テ一統拜礼シ、大

ニ勢ヒ出シ、又垂水ノ屋ノ上ヲ鶴舞候処、段々舞下、

終ニ納所縁ノ池ノ中ニトマリ候ヨシ、御家内中、是ハ

吉事ナラント、大ニヨロコヒ、則祝ヒナサレ候ヨシ、此方説ハ、実事ナリト申事ニテ候、十一日承候間記置也、

【参照四】

同上

正月十八日、谷村小吉豊〔自武〕後肥田〔自巳〕へ被差越、長崎へ被遣候与力隊ヲ揚ケ、京都之様ニ差越候由、

七六三 藩庁士民ニ貸上金ヲ命ス

正月十一日、藩庁時節切迫、用途欠乏スルヲ以テ、藩内士民ニ貸上金ヲ命ス、

(記)

藩庁上国ノ警報ヲ伝へ、諸兵派遣ノ出費トシテ、士民ニ貸上金ヲ命セリ、

旧邦秘録

一江戸・兵庫等ニテ戦争之形行ハ、先達テ申渡置候通ニテ、則諸郷・私領之兵隊、出兵上京被仰付、何分不容易形勢成立、京師ニテハ被為蒙重大之御職掌、禁闕御警衛御重任之御事ニテ、追々兵隊被差出候御

場合ニ相成リ、此末莫大之御用途差見得候処、当时大坂表御下リ金等之処モ、見留兼候時機合ニテ、是迄追々御貸上被仰付候末之事ニハ候得共、御国政不得止次第ニ候間、此涯御一門方初諸士其外三町ハ勿論、諸郷・私領末々ニ至迄、危急之御時節深奉汲受、御国家之御一大事ヲ遵奉シ、御用途可相勤、世上穩成立、御用金ニ不及候節ハ、直様御差返シ可相成候間、此旨向々へ早々致通達、諸郷・私領へモ可申渡候、

但御貸上イタシ候面々ハ、御用入御勝手方掛へ相

付可被申出候、

正月

〔島津久也〕
圖書
〔種久武〕
右衛門
〔小松清應〕
帶刀
〔川上久徳〕
龍衛
〔阿田久慈〕
内膳

尚同日家老桂右衛門ハ、一門閥族ノ輩ハ特ニ軍役ノ出費アルモ、尚節約シテ、多少ニ拘ラス貸上クヘキコトヲ諭示シタリ、

【参照】

舊邦秘録（正月十一日）

此節御貸上金之儀、別段被仰渡候付、各厚汲請、夫々富家之面々ハ、オノツカラ御貸上可致候得共、僅成共持合候向ハ、御貸上願書此節柄之御用途相勤候様、御一門方初一所持等之儀ハ、家中扶助且軍役手当向モ可有之候得共、精々繰合御貸上可被致、左候テ御貸上願出候向ハ、当月中御用人御勝手方掛江願書差出候様、右衛門殿ヨリ被仰渡候事、

辰正月十一日

七六四 諸侯ニ率兵入勤ヲ命ス

明治元年正月十一日、朝集會議ノ命ヲ止メ、諸侯ニ申令シテ兵ヲ率テ入勤セシメ、在京藩臣ヲシテ各其期ヲ上申セシム、

兼テ被召設候儀ハ、全公平ノ衆議ヲ可被為採 思召之所、豈図ランヤ、突然干戈ニ至リ、終ニ大号令被發候通ニ付、各国力相應人数引纏、速ニ上京可有之御沙汰候事、

正月

但危急之御時節ニ付、速ニ上京勿論ニ候得共、路程

遠近モ有之候事故、凡之所在京重役或ハ留守居共、見込之趣可申出、其上御沙汰之旨も可有之、猶又当主所勞等ニテ上京難致向ハ、名代又ハ家老之者可差出候事、

七六五 島津茂久参内ヲ命セララル

一月十一日、茂久参内ヲ命セララル、

（記）

本日茂久明十二日、病ヲ勉メテ参内スヘキノ命アリ、復古討賊ノ恩賜アランカ為ナリト云フ、

旧邦秘録

薩摩少将

御用之儀候間、明十二日午半刻、参

朝可有之候事、

正月十一日

追テ別段御用之儀候間、所勞候共被扶押^{マツ}テ参朝可有之候事、

七六六 本藩及ヒ五藩ニ高松等四藩ノ征討ヲ命セ

ラル

正月十一日、征討府本藩及ヒ五藩ニ、高松藩外三藩ノ征討ヲ命セラル、

(記)

本日征討府藩吏ヲ召シ、本藩及ヒ長州・藝州・因州・土州・津ノ六藩ニ命シテ、姫路・高松・松山伊予・大垣ヲ追討セラル、大坂留守居木場傳内ノ届書ヲ載ス、

旧邦秘録

御用之儀有之候付、(嘉彰親王)將軍宮様当所御本陣へ、御重役

急々被罷出候様、昨夜八ツ時参謀ヨリ申来候処、私罷

出候積御座候処、先頃ヨリ不快ニ付、御留守居付役勤

永井清左衛門差出候処、(平好 伏見宮家七)矢守對馬守・中沼了三・若松

因幡介・上田頼母参仕、別紙式通之通、被仰出候段承

得、重役へ可申聞旨答引取候段、清左衛門申出候付、

別紙式通相添、此段申上候、以上、

辰正月十一日

木場傳内

(島津法華)
伊勢様

(按) 別紙征討府ノ達書ハ、戦記正月十日ノ部ニ載ス、

七六七 征討府本藩及ヒ長州藩兵庫港警衛ヲ命セ

ラル

正月十一日、征討府本藩兵及ヒ長州藩兵、兵庫港警衛ヲ命セラル、

(記)

正月十日、本藩人五代才助、兵庫ヨリ大坂ニ至リ、島津伊勢ニ面シ、該地ノ情勢ヲ陳シ、不浪賤輩外国人居留地ヲ、侵暴スルノ虞ナシトセサルヲ以テ、速ニ本藩兵ヲ派遣スルノ必要ヲ申ブ、伊勢之ニ同シテ、征討府ニ稟ス、

本日本藩及ヒ長州藩ニ、警備ヲ命セラレタリ、

薩・長両藩申合、兵庫表鎮撫取締方可致、被

仰付候事、

正月十一日

【参照】

島津伊勢日記抄正月十日

前 尤此節変動、当地之次第様々成立候付、下輩共当地

異館江入込、乱妨ケ間敷儀モ有之付、本願寺兵隊江

(本藩兵本願寺ヲ宿陣トナセリ)取締被仰付、跡始末之儀モ右兵隊附人夫

江被仰付候テハ、イカ、可有之哉之趣承候付、本營役

所江差越内談可致、尤拙者ヨリモ相達候様、可致トノ
趣達置候事、

(附録)

徳川氏老中本藩ノ罪状ヲ声ラシ、上国ノ變警ヲ達スルノ
件

旧邦秘録

稻葉美濃守様御渡、大目付様ヨリ被仰渡候由、御

同席触ニテ来ル、左之通、

松平修理大夫奸臣共、兵仗ヲ以

宮闕ニ迫り、奉侮

幼主、私論ヲ主張シ、

先帝御委托之摂政殿下ヲ廢シ、恣ニ宮・堂上黜陟シ、

或ハ家来共浮浪之徒ヲ語合、屋敷江屯集、江戸市中押

テ致強盜、(忠篤、庄内藩主)酒井左衛門尉人数屯所江砲發乱妨、其他野

州・相州等所々焼討刦盜ニヲヨヒ候証跡分明ニ有之、

殊ニ此程御上洛前路ヲ遮り、砲發乱暴、終ニ三日ヨリ

京坂之間、不容易事態ニ押移候段、大坂表ヨリ注進有

之、此段為心得相達候、

右之趣向々へ可被達候、

正月(十一日)

(島津忠義家記にて校訂)

七六八 本藩兵二隊ヲ日向ニ派遣シテ徇フ

正月十一日、藩庁兵二隊ヲ日向ニ派遣シテ、附近ヲ徇フ、
(記)

正月六日、上国ノ警報藩庁ニ達ス、藩内ノ警備ヲ命シ、

一門島津元丸久二命シ、私領都城(マ)小銃隊二小

隊・砲隊半座ヲ出兵セシメ、小銃一小隊ハ藩領鉄肥口伊

東(マ)ノ緩急ニ備へ、小銃一小隊・砲隊半座ハ直

チニ日向口ニ出軍セシム、本藩人鳥丸六左衛門・柴山龍

五郎綱原ヲ、監軍トシテ之ヲ派遣シ、尚高岡郷ノ小銃一小

隊ヲ合シテ、細島ニ至リ、附近各藩及ヒ旧幕領ヲ鎮シ、

京坂ノ戦況ニ由リ、春日艦ヲ日向細島ニ廻航スルヲ待チ

テ、上京セシムルノ命ヲ伝フ、即チ諸隊細島ニ至リテ、

船ノ到ルヲ待ツ、一日汽船海上ヲ進航ス、人々之ヲ望ミ

見テ、海岸ニ至リ、遙ニ之ヲ呼フモ寄航セス、隊士頗憤

懣セリト云フ、

後日藩庁上国ノ報(戦力)勝ヲ伝フルヨリ又、兵ヲ發スルヲ要

セストシテ、船ノ回航ヲ止メタル旨ヲ通シ、尚富高新町

ニ屯シ、地方鎮撫ニ従事スヘキノ命ヲ伝ヘタリ、

七六九 島津茂久參朝ヲ命セラル

(記)

正月十一日、病ヲ勉メテ參朝ヲ命セラレ、本日午半刻

九半時、乃衣冠參朝ヲ命セラル、
七六九ノ一

薩摩少將

今日午半刻、

御用之儀有之、衣冠ニテ參

朝可有之候事、

正月十二日

七六九ノ一
茂久參 朝、小御所ニ召サセラレ、總裁宮ヨリ勅書ヲ伝
サセラル、

薩摩少將江

其藩事、積年抱勤

王之志、勲勞不少候処、応

召登京、

朝議之旨速ニ奉行彼是周旋、遂ニ使 王道復前古、殊

ニハ去三日、逆賊突然北上之砌、於伏見表防禦、其後

連戦処々ニ追撃、軍威之盛ナル事、実ニ前古ニ不愧也、

而テ遂ニ巨魁慶喜落胆、捨浪華城遁去之趣、達

宸聽 天感不斜候、愈以励兵勢屠其巢穴、可耀

皇軍稜威於内外候、依之御劍一振即今恩賞迄ニ下賜候

旨、

御沙汰候事、

薩藩

戰死人江

今度就兵革、其藩士之輩殉国戦死者共、具ニ達

天聰、被為愴

叡情候条不淺、宜厚其葬礼恤、其親眷慰忠魂于九原之

下、依之、宮弁之貲賜金五百兩候、藩主ヨリ可頒与之

旨、

御沙汰候事、

但設一社聚其忠魂、永可被令祭祀

思召候事、

御劍ハ西四辻大夫業公之ヲ伝ラレ、尚酒肴ヲ賜フ、戌半刻

五時、乃歸邸セリ、
七時九時

留守居ノ届書ヲ載ス、

一勅書 一通

但

積年勤

王之志勲勞不少、逆徒遁去、

天感不斜、為恩賞

御劍御拝領之儀、

一御劍 一振

一勅書 一通

但

殉国戦死之者へ賜

御金厚葬礼、設一社祭祀等之儀、

一御金五百兩

右ハ今日午半刻、

太守様 御衣冠ニテ 御用

召ニ付、御参

内虎之間へ御控候処、

小御所ニテ

勅書御内見被 仰付、御習礼被為濟、本之御控席へ御

復座候処、已前之

御座へ被為

召、

天顔拜

勅書 一通 総裁官様ヨリ、

御劍一振 西四辻大夫様ヨリ御渡御頂戴、御下被遊候

処、同御廊下ニテ御金五百兩

勅書一通、岩倉前中将様ヨリ御渡相濟候テ、已前之御

控席へ御復座候処、御取肴御二盆・御酒一樽 御頂戴

被 仰付候、御礼之儀御伺相成候処、参与衆迄御礼被

申上候テ宜敷段御達ニ付、則久我中納言様・西四辻大

夫様へ 御直ニ被仰上候、夫ヨリ戌半刻被遊

御帰殿候、

御品之儀ハ御側役へ申談、俄之儀故、私宰領

御本門罷通、御式合ニテ中小姓へ引渡候振合ヲ以、南

御門ヨリ御家老衆御玄関へ持上リ、御用部屋ヨリ差上

申候、

右之通、今日私御供相勘申候、此段申上候、以上、

辰正月十二日

〔立本〕
新納嘉藤二

〔関山金生〕
札様

〔島津忠義家記所収〕

七六九ノ三
正月十二日、在京藩老戦功褒賞ノ勅書・御劍ヲ賜ヒ、戦

亡兵ニ祭祀金ヲ賜ヒシコトヲ通セリ、

去ル十二日午半刻、

太守様御衣冠ニテ、依

召御參

内被遊候処、

天顔拝積年勤

王之志勲勞不少、逆賊遁去、

天感不斜、為恩賞

御劍御拝領候旨、御別紙

勅書一通総裁宮様ヨリ、

御劍一振西四辻大夫様ヨリ御渡

御頂戴、且殉国戦死之者へ賜御金五百兩厚葬礼、設一

社祭祀候様、是亦

御別紙

勅書一通、岩倉前中將様ヨリ御渡相濟候テ、尚亦於御

控所御取肴御二盆・御酒一樽御頂戴ニ付、御礼之儀御

伺之上、参与久我中納言様・西四辻大夫様へ御直ニ被

仰上候、

一 右付御別紙

勅書二通、受許監軍隊長へ於

御書院拜見被仰付、尤詰合中一統可奉承知、左候テ

太守様

中將様へ月次御礼罷出候面々、席々謁之格ヲ以、刑部

御長屋へ相越御祝儀申上、諸士之儀モ同断、諸組与力

ハ夫々支配頭御長屋へ相越、同断可申上、

近衛忠房夫人
貞君様並

大奥 其外様へ、兼テ御祝儀申上来候面々ハ、毎之通

申上候様致通達候、

一 右ニ付

中將様被遊御承知候上、以御使札参与衆へ御礼可被仰

上哉之旨、申出候付、御右筆頭へ被致吟味、其通之御

書被差越候ハ、御使者ヲ以被差出候様、取扱可仕候、

一 隣国為御知且中山王承知、佐土原為知等之儀ハ、御吟

味次第可被取計候、

右旁申越候条、

中將様被達

御聴、

大奥 其外様へ被申上、其許御祝儀之儀ハ、何分モ可

被取計候、先以不容易被為蒙

勅命、御劍被遊

御拜領恐悅御同意奉存候、以上、

但

佐土原之儀モ、別紙之通

勅命之趣為知申來候故、為御心得サシ越候、

辰正月十六日

關山 糺

島津圖書殿

桂 右衛門殿

小松帶刀殿

川上龍衛殿

町田内膳殿

別紙

島津淡路守〔忠寬〕

其藩事、多年報國ノ志不淺、殊ニ今度賊徒襲來ノ砌、

為防禦人數為致出張候段、

叡感不斜候、尚此上可勵忠勤旨、御沙汰候事、

七六九ノ四

藩地家老三月十五日ヲ以テ回申セリ、

本文致承知、

中将様達

御聽 大奧其外様へ申上、御祝儀之儀ハ、兼テ被成候
通被

仰上候様申上、綵出仕候テ、

太守様

中将様へ御祝儀申上、御一門方ヨリ諸士上ハ居殘候上、

勅書拜見被 仰付、且殉國戰死之者共親族へ拜見被

仰付、賜金配当相濟候、且亦隣國為御知中山王承知候

儀モ申渡相濟候、左候テ

中将様ヨリ御礼御書之儀ハ、御右筆頭モ為致吟味、別

紙奏上之通、今日便被差越候間、御使者ヲ以被申渡差

出候得共、可致取扱候、先以不容旨

御劍被遊

御頂戴、恐悅御同意被存候、

勅書御文書右行ハ格護方申渡、御留守居首尾書ハ控置、

此旨及御返答候、以上、

辰三月十五日

島津圖書

桂 右衛門

小松帶刀

川上龍衛

明治元年(1868)

關山 糺殿

町田内膳

〔島津忠義家記にて校訂〕

(按)同日諸藩主賞詞各差アリ、参看ニ載ス、

毛利敬親長藩主

淺野茂長芸藩主

池田慶徳因藩主

山内豊範土藩主

右ハ劍一口・金若干

藤堂高猷津藩主

右ハ金若干

徳川慶勝尾藩主

松平慶永前越藩主

伊達宗城前宇和島藩主

細川喜廷熊本藩世子

蜂須賀齊裕故徳島藩主

井伊直憲彦藩主

松浦詮平戸藩主

本多康穰膳所藩主

加藤泰秋大洲藩主

亀井茲監津和野藩主

毛利元功徳山藩世子

池田徳澄因州藩主

大村純熙大村藩主

島津忠寛佐土原藩主

小出英尚園部藩主

加藤明實水口藩主

池田徳定因州藩主

織田信親栢原藩主

市橋長義西大路藩主

堀親義飯田藩主

池田政禮岡山藩主

久留島通靖森藩主

京極高典多度藩主

【参照一】

旧邦秘録

藩記正月十二日

御召ニテハツ過

御参内、四ツ過 御帰殿、勝軍之御祝又ハ御感状 御

太刀御頂戴、

【参照二】

大久保利通日記節録正月十二日

一今日昼時分ヨリ参

朝、依 召 太守公御衣冠ニテ御参

朝、被麗之 為拜

天顔、於 御前御劍一振拝領、被賞戦功候御書面云々、
歡感不浅旨御承知被遊、誠ニ恐悦之至ニ候、

一戦死之者へハ、葬送ヲ厚スルノ用トシテ金五百両、且
設一社永神祭ヲ以テ忠魂ヲ祭セラレ候 思食ノ段、

同断御書面御拝領被遊候、

一土佐・藝州同様之事、

一備前・因州・藤堂及戦争候付、重役被召同断之事、

一越公・宇和島公・細川世子公応 召、上京尽力ノ廉

ヲ以テ、御褒賞之由、其外小藩之向モ、段々有之候

事、

【参照三】

相良新右衛門覚書

正月十二日 晴

一非番ニテ候、尤九ツ時

太守様御参 内被為在候処、別紙御褒書通、御劍頂戴有之候事、

七七〇 小濱・大垣両藩謝罪両道ノ先鋒ヲ許サル

一月十二日、小濱・大垣両藩謝罪、先鋒ヲ許サレタルコトヲ達セラル、

(記)

十一日本藩始メ藝州・長州・土州・因州・藤堂ノ六藩ニ、
大垣征討・小濱問罪ニ及ブベキ旨ヲ命セラレタリシモ、
両藩トモ謝罪ニ及ビ、功ヲ立テ罪ヲ贖ハンコトヲ請フ、
仍テ戸田氏共大垣ヲ東山道先鋒ト為シ、酒井忠氏ノ父忠
義ヲ北陸道先鋒ト為シ、征討六藩ニ達セラレタリ、
旧邦秘録

若州小濱

濃州大垣

右ハ是迄御不審之次第有之、被止入京候処、謝罪之道
追々相立、今度賊徒追討被 仰出、鎮撫使御発シ相成
候間、北陸・東山二道之先鋒両藩へ被仰付、成功ノ後
別段思召可被為在儀候間、其旨可相心得様

御沙汰候事、

七七一 徳川慶喜再ヒ上京スルノ意ヲ列藩ニ告ク

正月十二日、徳川慶喜江戸城ニ還リ、東帰ノ情由及ヒ後日ノ形勢ニ因リ、再ヒ上京スルノ意ヲ列藩ニ告ク、

(記)

徳川氏本日巳刻四時乃海路着船アリ、即時ニ諸藩ノ老臣ヲ、江戸城大広間ニ召シ、老中稲葉美濃守邦正・小笠原壹岐守行長ヲシテ、東帰ノ情由ヲ陳へ、又後日ノ形勢ニ因リ、再ヒ上京シテ、朝敵ニアラサル旨ヲ陳弁シ、討奸ノ意思アルコトヲ告ケシメタリ、

七七一ノ一
旧邦秘録

上様御事御軍艦江被為

召、今十二日西丸江被遊

着御候、尤此後之動靜ニ寄、速ニ

御上坂被遊候

思召ニ候、

(徳川慶勝)

先般尾張大納言・松平大蔵大輔ヲ以、可致上洛旨

(慶永、前橋井藩主)

御内諭ヲ蒙リ奉リ候付、去ル三日先供之者、四塚関門

迄相越候処、松平修理大夫家来共、無謂通行差拒、兼

テ伏兵等之手配イタシ置、突然彼ヨリ及砲発、兵端ヲ

開、粗暴之挙動ニ及候ハ、全修理大夫家来共一己之所

業ニ有之、剩矯 叡慮 朝敵之名ヲ負セ、他藩之者ヲ

煽動シ、人心疑惑ヲ抱キ、戦利アラス、此分ニテハ夥

多之人命ヲ損候ノミナラス、可奉寧

宸襟誠意モ不相貫紛紜之際、曲直判然不相立候テハ、

不本意之到深ク心痛致シ候、就テハ深キ見込モ有之、

兵隊引揚、軍艦ニテ一ト先東帰イタシ候、追々申聞候

儀可有之候間、銘々同心戮力、為国家可抽忠節事、

正月十八日

(島津忠義家記にて校訂)

七七一ノ二
同上

一上様御事、去ル六日御乗船、同八日御出帆、今朝四

ツ時被遊御還御候、右之御趣意ハ、尾張先大納言殿・

松平大蔵大輔下坂、上様被遊 御上洛、京都之方

御取締被遊候様被 仰出、其後御催促モ有之候ニ付、

御上洛之思召ニテ、去ル三日、御先手御人数、鳥羽

街道ヨリ御差登リ居ノ処、四ツ塚関門ニテ、長州・

薩州人数相固居、差通シ不申候ニ付、御先供之訳ヲ

以談判中、彼方ヨリ砲発ニ及候間、其佞ニモ難差置、不得止事戰爭ニ相成候得共、不意ヲ被討候故、遂ニ敗走繰引ニ引取候、然処

朝廷へ薩・長ヨリ幕府謀叛ヲ起シ候様、及 奏聞候様子ニテ、 朝敵之旨御沙汰之趣、大坂ニテ被成御承知、全 朝敵ニ被為成候訳ハ無之候得共、一旦被仰出候上ハ、彼是被仰立候テモ、御申訳之様ニ有之、戰爭ハ猶更不宜候間、御使者ヲ以、戦引揚候様トノ御下知ニ相成、一先還御之上、御策略モ可有之、篤ト御評議之上、猶又御上坂モ被遊、 朝敵ニ無之趣ヲ被仰上、奸賊共御掃被遊候思召ニ付、被遊還御、寔ニ恐入候事ニ付、此已後猶又奮発尽忠勤候様、可被致候事、

【参照一】

木下家記

正月十二日(明治元年)

(久通、白井藩主)

一 稲葉右京亮御内衆ヨリ、御同席触一家限り、早使ヲ以申来候、左之通、

今十二日四時、被為在

還御候ニ付、即刻家老菅人西丸江可被差出旨、稲

葉美濃守殿被仰聞候、依之此段申達候、以上、

正月十二日

木下大内記

稲葉右京亮殿

留守居

追啓、同席中江モ御通達可有之候、且在府之面一々ハ、不及通達候、以上、

但平服之事、

右写之通御達ニ付、早速御重役御登

城之事、

右之通、暮時分到米ニ付、即刻御重役代リ、宮原

淺右衛門西丸江登

城之処、於大広間稲葉美濃守様・小笠原壹岐守様御列座ニテ、壹岐守様御口達御渡被成候、左之通、

(前項ニ載ス
茲ニ省ク)

【参照二】

大村家記

一去ル十二日、重役之家来西丸へ可罷出旨、御触到来ニ付、即刻小齊治罷登候処、御在邑之重役一同、大広間着座、稲葉美濃守様・小笠原壹岐守様御出座、御口達被仰渡、御上意之趣、御同席触ニテ致到来候

二付、御右筆方へ差越申候、

【参照三】

勝安房日記抄

同十一日

開陽艦品海へ錨を投ず、使ありて払曉濱海軍所へ出張、

御東帰之事、

初て伏見之顛末を聞く、會津侯・桑名侯とともに御
供中にあり、其詳説を問はむとすれども、諸官唯青
色、互に目を以てし、敢て口を開らく者無し、板倉
閣老へ附て、其荒増を聞くことを得たり、従是して
日に空議と激論と唯日を空敷くする而已、敢て定論
を聞かず、

御供之役々 ○印は御供にて東扁
△印は戦争一方

○會津肥後守
〔松平容保〕

○松平越中守
〔定敬、桑名藩主〕

○板倉伊賀守
〔勝靜、老中、備中松山藩主〕

○酒井雅楽守
〔忠博、老中、姫路藩主〕

総将

○松平豊前守
〔大河内正質、老中格、大多喜藩主〕

参政

△永井主水正
〔尚志、若年寄〕

副将

△竹中丹後守
〔重固、若年寄並〕

△平山圖書頭
〔敬忠、若年寄並〕

塚原但馬守
〔昌義、若年寄並〕

陸軍奉行

大久保主膳正
〔忠恕、陸軍奉行並〕

戸田肥後守
〔勝雄、陸軍奉行並〕

歩兵奉行

高力主計頭
〔忠良、陸軍奉行並〕

○城和泉守
〔鶴次郎〕

大目付

○戸川伊豆守
〔安忍〕

○松平大隅守
〔信敬、大坂町奉行〕

○瀧川播磨守
〔真拳〕

目付

△○設楽備中守
〔能雄〕

△○榎本對馬守
〔道章〕

△安田鉦太郎
〔保田久成〕

△木城安太郎
〔海舟全集にて校訂〕

七七二 徳川慶喜朝敵ニ無之趣ヲ救解セシム

正月十九日、徳川慶喜諸藩老ヲ召シ、三日以後ノ事体及ヒ其心情ヲ陳シ、朝敵ニ無之趣ヲ救解セシム、

(記)

本日、徳川氏が留諸藩ノ老臣ヲ、江戸城(西)ニ召シ、自ラ面シテ、三日以後ノ事情ヲ陳シ、朝敵ノ汚名ヲ受ケサルノ意思ナルモ、事或ハ通セサルノ憂アルヲ以テ、諸藩ノ力ニ頼リ、弁疏救解センコトヲ望マレタリ、其演達ヲ載ス、

七七一

復古記(二十三)

正月十九日

今般

皇国之御為ヲ以テ、政權奉歸候次第ハ、何之懸念モ無之、誠忠可尽存念、一統モ尽力致具候儀ニ有之、

登京之節

奏聞之次第モ承知之通之儀ニ候、然ルニ京坂戦争モ行違之儀ニテ、追々承候得ハ、

朝敵扨トノ風聞モ有之由、兼テ之素願モ不相立、残

念ニ存候、併此上誠意相尽候存念ニ候、就テハ

朝敵等無之趣ハ申立度存候得共、貫徹致間敷ニ付、右之処一統ヨリ尽力致シ、京地へ申立具候様頼存候、

七七二

老中演説書

今般字内之形勢ヲ御量リ、政權ヲ御返シ被遊候訳ニテ有之、

皇国之御為ニ不相成ト

思召、御建白モ被遊候処、

朝廷ニテモ段々

思召被為在、其段ハ一統承知之通、且京坂之間御先手戦争ハ、全ク行違ヒヨリ相生候事ニテ、追々御承知モ被遊候処、

朝敵扨ト申風聞モ相聞候得ハ、兼テノ御誠忠ヲ御立可被遊御素願モ不相立、御残念ニ思召候、右之次第ヲハ、精誠被仰上候事ニハ候得共、猶又一統モ此段相心得候様、被申渡候事、

【参照一】

春嶽私記

二十九日江戸西丸へ、同席重役一同被為召、御直ニ上

意有之候、

【参照二】

水野忠敬家記

於江城重役呼出、京坂戦争之儀ハ、薩・長ヨリ及発砲候儀ニテ不得止処、却テ朝敵之蒙汚名候ニ至リ、残念至極、就テハ恭順謹慎之取計之存寄ニハ候得共、届兼候上ハ、猶取計之品モ可有之候間、右之心得ニテ勉勵尽忠勤候様、口達有之、

【参照三】

上杉茂憲戊辰事情

徳川氏面示ニ曰、三日 召ヲ奉スルノ挙前驅之過誤、
凶ラス戦闘ニ至リ、忽チ

朝敵ノ名ヲ蒙ルコト痛憾之至也、素ヨリ

朝廷ニ対シ奉リ、毛頭無異心ノ旨、百方陳疏ニ及フト

雖モ、勢ヒ爰ニ迫リ、

天閣九重貫徹ニ由ナシ、此上列藩ノ力ニ倚リ、汚名ノ
宛ヲ雪カンコトヲ企望スト、

【参照四】

仙臺藩記

五月二十四日徳川家ヨリ、重役之者登城致シ候様、老

中ヨリ申来、詰合執政坂英力出頭シ候処、慶喜自ら出

会、同人大政奉還已来、正月三日上洛之途中、伏見辺

ニ於テ先手之者共、理非ノ弁モナク、率然兵端ヲ開キ、

終ニ朝敵ノ名ヲ蒙リ、臣子ノ分ヲ失シ、恐愕至極、手

足ヲ措クニ所ナク、速ニ正月十二日ヲ以テ退京東下、

一向恭順謹慎、全ク奉対 朝廷毫髮逆意無之、畢竟指

揮不行届ヨリ、先手之者トモ、軽挙卒尔ノ挙動ニ至リ

候段、其身ハ伏罪、何レトモ奉仰 天裁候心得ニ候得

共、六師既ニ 御発向之由、上ハ天兵ヲ奉勞、下ハ万

民塗炭之苦ヲ受シムルニ忍ス、伏テ願ハクハ、六師

御発向控ヘ下サレ候ヤウ、周旋ニ預リタキ由、深ク依

頼有之、慶喜ヨリ慶邦ヘノ自書(伊達)原記ヲ失ス、恐クハ相渡候由、

其節承リ申候、其后英力ヲ以テ依頼之事、速ニ周旋シ

呉候様懇願ノ由ニテ、老中又ハ大目付中ヨリ、幾度ト

ナク責付ヲ受候ヘ共、先其俣ニアシライ置申候、就中

大久保(忠寛)一翁申候ハ、討會御奉命ニ付、貴藩ニテ願之上、

白河城ヲ屯所ニ御引受、軍事務局ヲ御取建之由ニ承候処、

同所ハ徳川家大政奉還以前、陸奥守殿御周旋ニ依テ、

阿部家一旦棚倉ヘ移シタルヲ、復領サセタルコト御心得

得之通ニテ、徳川・伊達両家ノ義、旧来他家ノ比ニ非

ル親ミヲ以テ万端懇談ヲ尽シ所置セシニ、一朝ニシテ如此ナルコトハ、人情アルヘキ筋ニコレナク、阿部氏モ既ニ令アル上ハ、復領スルニ疑ナシト思ヒ、既ニ荷物ノ運輸ニ迄取付タル由、其迷惑察シ玉ヘ、如何ニカシテ此事ハ控ヘラレ度由、屢依頼有リケレトモ、私ハ元ヨリ番詰ニテ出府シ居、是等ノ事迄ハ、關係不致由申據ヒ、肯ヒ不申候、

【参照五】

加賀藩上申、

今度京攝ノ模様ハ、一同承知ノ通ニテ、不容易時勢ニ至リ、何共恐入候次第、右ハ予テ

皇国ノ御為尽力罷在候得共、人心折合兼候辺ヨリ、此方誠意モ不徹、却テ奉悩

叙慮候次第ニ付、先般政權ヲモ奉帰候、然ルニ、今度上京之儀被

仰出、発坂ノ途中、不計モ行違ノ辺ヨリ兵端相開、不容易場合ニ臨ミ候付、一ト先東帰致シ、恭順謹慎罷在候処、方今

朝敵ノ名ヲ負セ候哉ニモ有之、誠ニ以恐入候次第、此上何国迄モ尊敬ヲ尽シ、奉対

朝廷異心無之趣、御詫申上候儀ニ決心致シ候ニ付テハ、諸藩ニ於テモ此趣ヲ汲取、奉対 朝廷弓矢ヲ彎候趣意ニテハ、決シテ無之段ヲ、厚周旋尽力候様、一偏ニ頼入候、此段銘々へ申入候様、
右之通於江戸申聞候旨、因許ヨリ運越候間、此段御届可申上旨、申付越候、以上、

二月（八日）

加賀宰相中将内

里見亥三郎

【参照六】

中村武雄手記

初メ我公已ニ江戸ニ着キ玉ヒ、邸内ニモ入り玉ハス、屋夜御登城被為在、會津侯ト共ニ、大坂ノ御趣意、今一度思召被為立候様、種々言ヲ尽サルト云トモ、前將軍更ニ用ヒ玉ハス、却テ寡人ヲシテ此ニ至ラシメシハ、肥後ト越中トノ業ナリ杯、仰セラル、程ノ事故、今ハ致シ方無之トテ、築地ノ邸ニ帰ラセ玉ヒ、是ヨリ閉居シテ出テ玉ハス、江戸ノ議論ニハ、桑名モ已ニ罪ニ服シ、徳川氏ニモ御恭順ノ上ハ、御謹慎ノ外有之間布トテ、謝罪状ヲ肥後藩ニ托シテ、御謹慎在セラル、

【参照七】

開成所會議概略

開成所回達書

別紙之通諸藩様へ御通達之儀、開成所ヨリ申立候ニ付、右宅通及御申合候、国家存亡極切迫之時勢ニ付、諸藩御有志之方々、御議論有之様トノ趣意ニ付、被仰合御出席有之様致度、此段及御申合候、以上、

正月十三日

赤坂

交際方

帝鑑間御席

御留守居中

別紙

国家重大事件ニ付、會議致度候間、尽忠有志之諸君ハ不拘貴賤、明十四日ヨリ小川町開成所へ、御入來可被成候、以上、

但毎日朝五半時ヨリ、八ツ時迄之内、銘々腰弁当之

事、

正月十三日

會議一同

一辰正月十四日、開成所會議席へ罷出候処、出席一同

床机ニテ並居候所へ、左ノ書付出候間、書取退引、

但板間ニテ稽古場之模様ナリ、

一条

此度會議之趣意ハ、戮力同心シテ、義ヲ唱へ兵ヲ集メ、

国家ヲ再興スルヲ主トス、外他議不可有之、

二条

會議ニ預ルモノハ、定日刻限急度出席之事、

三条

毎会会中ヨリ老人ヲ撰ヒ、演説方トナスヘシ、

四条

各人存寄ヲ申出ル時ハ、是ヲ書面ニイタシ、演説方ニ

渡スヘシ、

五条

演説方右書面ヲ受取、存分其意ヲ熟覽シ、不容易不審

之廉アラハ承リ正シ、明細ニ理解スヘシ、

六条

次ニ演説方書面ヲ高声ニ読上ケ、衆中ニ出スヘシ、

七条

衆中答説之者ハ、論難スヘシ、其節演説方ヨリ応対ス

ヘシ、返答之難キハ、説ヲ立テ候モノへ承リ正スヘシ、

始終説ヲ立タルモノト難者ト、直ニ応対スヘカラス、

左候テ演説方其間ニ居リテ、双方之意味ヲ貫徹シテ、

成丈一致ニ帰セシムヘシ、

八条

双方之意味行違ヒ一致シ難キ節ハ、衆説ニ従フヘシ、

但任撰ハ入札ヲ以テ定ムヘシ、

九条

衆説ニ帰スル説ハ、私心ヲ屈シテ衆ニ従フヘシ、自己

ノ説之行レサルヲ以テ、不平ヲ懷キ、戮力同心之本意

ヲ失フヘカラス、

十条

衆議一定之上ハ一紙ニ認メ、出席人数之姓名ヲ記シ、

政府ニ呈シテ裁断ヲ乞フヘシ、

十一条

政府ヨリ下問之廉アラハ、又右之手続ニテ答奉ルヘシ、

十二条

新聞アラハ必会中ニ吹聴スヘシ、会中はカ為ニ新聞帳

ヲ設ケ、悉ク記録シ、会中ハ人ノ観覧ニ便ニスヘシ、

軍機之事ハ封書ニテ、演説方ヘ差出シ、其俶大君ヘ呈

候事、

演説

此度会議相始候ハ、余之儀ニアラス、国家危急之場合

ニ付、同心唱義 皇国之御為、 徳川氏御再興之儀ヲ

計リ候ニ付、御銘々御見込之趣、何事ニヨラス御申出

被下度、会議之上言上仕、夫々御採用相成候様仕度也、

御見込今日被差出候共、御帰リ之上、御認御持参相

成候共、両様之内イツレニテモ、諸君ノ御説ニ附キ

会議可致候、

開成所頭取

倉橋但馬守

西尾錦之助

田中哲助

小田切莊三郎

目賀田帯刀

河田相摸守

同教授職等

津田真一郎

神田孝平

林正十郎

加藤弘蔵

柳河春三

渡邊一郎

小林 鼎輔
榊 令助

攻守

右見込ヲ可申立旨也、各攻或守ノ一字ヲ記シテ投票セリ、予ノ差出セシ書面ノ大意ハ、

攻ルノ力有テ、而後ニ守ル可シ、今日ノ勢、一二ノ大藩義挙シテ助クルアラハ、戦フモ可ナリ、然ラスンハ、日本全国ヲ敵ニ受クルノミナラス、外国ヲ敵ニ受クルモ知ル可カラス、宜ク注意セサル可カラス云々、

一然ルニ攻ノ入札多カリシニヤ、十六日右会合之面々、西城へ出仕、慶喜公へ謁見シ、再挙ヲ懇懇セント議ス、慶喜公敢テ見ス、空シク退城セリ、

七七三 藩庁島津茂久ノ議定ノ叙任告示

正月十三日、藩庁茂久議定ノ叙任ヲ告示シ、賀詞ヲ達ス、
(記)

慶應三年十二月九日、大政復古ヲ布告セラレ、大ニ公卿ノ黜陟アリ、此日茂久議定ニ任セラレタリ、依テ本日藩

内ニ布達セリ、
旧邦秘録

一大守様御儀、旧臘九日

朝廷依 召御参 内被遊候処、議定職被為蒙

宣下候段、御到来候、依之御一門方島津圖書殿・島

津左衛門一列、並諸大身分其外、月次御礼罷出候面

々諸士・諸組与力、明後十五日四時登城、於席々謁

御家老、御祝義可被申上候、

外ヶ条略ス、

辰正月十三日

帶刀 龍衛 内膳

七七四 島津茂久戦亡士ノ墓前ニ於テ勅書告祭式

ヲ行フ

正月十三日、茂久戦亡藩士ノ墓ニ臨ミ、勅書告祭式ヲ行フ、

(記)

正月十二日、朝廷三日以来戦亡藩士ニ、祭資トシテ金五

百兩ヲ賜ヒ、永ク靈祭ヲ行フコトヲ令セラル、此日茂久相國寺内林光院ノ墓所ニ臨ミ、親シク勅文ヲ祭告シテ懇ニ予慰ス、随從之士皆感泣セリ、

【参照一】

藩記

一翌十三日四ツ過 御改服ニテ、相國寺林光院戦死人數墓所へ 御入、前条之兩勅書賜金為御持、戦死人數へ之御感状御持參、御焼香被下候、

但

御焼香戦死人數墳墓へ御參、 御自身御焼香、 暫時御合掌、其節御供之面々一同及感泣、頂不被上候事、

【参照二】

大久保利通日記節録

正月十三日

一太守公、戦死ノ者墓所へ被為臨、昨日從

朝廷就御達、御紙面拜聞ノ為、焼香御祭被下候事、

七七五 岩下・西郷・大久保三人へ戦功褒賞

正月十三日、茂久岩下・西郷・大久保三人ノ功劳ヲ録シ、物ヲ与へテ之ヲ賞ス、

(記)

本日朝、茂久今回優渥ノ朝恩ヲ拜セシヲ以テ、岩下佐次右衛門・西郷吉之助・大久保一藏ノ勤功、尋常ナラサリシニ依ルコト、為シ、親ク其意ヲ伝へテ之ヲ褒メ、各々刀ヲ与へテ之ヲ賞セリ、

【参照】

大久保利通日記節録正月十三日

一今朝從

太守公被召候付、罷出候処、三所物獅子ノ細工地赤銅目貫金

御手自拝領被仰付、御意之趣、今般如此次第二相及、

昨日從

朝廷御褒詞被為蒙候儀、難有被思召候、畢竟此ニ至リ候モ、其方共尽力ヲ以テノ故ト思召候、尚御考モ被為在候得共、当座之褒賞トシテ、被下之御沙汰奉承知、絶言語難有次第ニテ候、

七七六 薩・長粮米下賜ヲ辞退ス

正月十四日、本藩及ヒ長州、俱ニ粮米下賜之命ヲ辞退ス、

(記)

正月九日、朝廷薩・長兩藩ノ戦功ヲ賞セラレ、元會津守護職知行地、山城国愛宕郡四ヶ村、葛野郡二ヶ村ノ積米ヲ下賜セラレタリシカ、兩藩相議シ、目今兵備整頓、海陸軍設備急要、經費ノ多端ナル際ナルヲ以テ、籍没之國財ハ、挙テ之ニ充テラレンコトヲ稟シ、之ヲ辞退返納セシコトヲ請ヒタリ、

今般薩・長連戦軍費夥敷段、

御洞察被為 在、此迄守護職為御手当、會津へ被下置候粮米若干石、御附立之前ヲ以、兩藩へ可被下旨、重畳難有次第第二付、互ニ拝納可仕之処、以往之御為筋ヲ熟考仕候得ハ、

朝權御収許相成候上ハ、御兵備十分ニ被為整度、就テ

ハ

禁兵御募聚、軍艦御購入等、殊ニ

御急務ニ御座候故、今日籍没之国力ハ、不殘御兵備之

御用ニ被為充度、依之粮米兩藩へ被下置候儀ハ、御斷

申上候、尤此後軍費闕乏之節、拝借申出候儀ハ可有之、

此段被

聞召届候様奉願候、以上、

長門宰相内

正月十四日

寺内暢三(通健)

薩摩少将内

内田仲之助(政國)

(島津忠義家記にて校訂)

七七七 戦功賞賜ノ勅書ヲ兵員ニ告示セシム

正月十四日、戦功賞賜ノ勅書ヲ拜戴セシニ仍リ、大坂出軍家老島津伊勢(広義)ニ伝ヘテ、出軍兵員ニ告示セシム、島津即チ配下ニ達シ、本營ニ就テ拝覧セシメ、又兵庫及ヒ橋本附近ノ諸兵員ヘモ達セシメタリ、

太守様御事、依 召一昨十二日御参内被遊候処、御別

紙写式通之通、被為遊

勅命候段申来候間、今日於本營役所、出軍ノ面々へ拜

見被仰付候、此旨兵隊へ不洩様、早々可致通達候、

但兵庫並橋本辺へ出兵之隊へ、御軍賦ヨリ申越候、

正月十四日

伊勢

留役

永山源兵衛

橋口甚四郎

右ハ御用之儀有之候間、急ニテ早々上坂被仰付候条、

可申渡候、

正月

辰正月十三日

右衛門

御本文之通、銘々名代へ申渡、向々へ取次、以証文申渡候、

取次

二階堂源大夫行先

七七八 本藩士十六藩士ト長崎ニ會議所ヲ置キ施

政ヲ管理ス

正月十六日、本藩士十六藩士ト會議所ヲ置キ、長崎ノ施政ヲ管理ス、

(記)

正月十二日、仏艦長崎ニ入港シ、艦將直ニ奉行官舎ニ至リ、上国ノ交ヲ長崎奉行河津伊豆守邦祐ニ告ク、河津之ヲ聞キ、頗ル措置ニ窮シ、僚属ト謀リ退去ニ決シ、十三日上国ノ變動アリ、万一横暴ノ徒アルモ計ルベカラス、非常ノ時期兵力足ラス、予防スベカラザルヲ以テ、救護ヲ頼ム旨ヲ、各国領事ニ告ケタリ、

七七八ノ一 河津伊豆守各国領事ニ贈ル書

以書翰申入候、然ハ我国中一ニ兇暴之諸侯、日本政府を襲撃に及候段ハ、定て承知之儀ニ可有之、随て賊徒等於此地、粗暴之挙動可致哉之風聞も有之、付てハ夫か為め、自然両国人民之所持品、危険ニ掛り候も難計、然に此地之儀ハ、從來商売之港にして、防禦も手薄之儀に付、自然非常之儀も有之候節ハ、救援之儀頼入度、此段及頼談候、速に回答有之度存候、謹言、

河津伊豆守

各国岡士宛各通

七七八ノ二 同日に後事を筑前・肥後両藩士に託せり、

松平美濃守

松平肥前守

番頭

聞役へ

当今不容易趣相聞候ニ付、一ト先江戸表へ、支配向召連引取候間、右留守中長崎表之義、当分両家御預り所ト相心得、地下取扱方ハ勿論、御成箇筋並外國商法・税銀取立方之義、都テ取計ヒ候様可被致候、尤地役之

者ハ其俛相残候間、是又申談候様可被致候、尤製鉄所
取扱方之義ハ、支配定役格本木昌造へ申付置候間、此
段モ可被心得候、

右ハ兼テ小笠原壹岐守殿、御差函之趣モ有之、当番年
之義ニ付差向、美濃守殿方ニテ、御取扱可有之候事、

辰正月

七七八ノ三

同十四日、河津再ヒ書ヲ各国領事ニ贈リ、奉行江
戸ニ退去スルニ仍リ、後事ヲ肥後・筑前両藩ニ託
スル旨ヲ通牒シ、夜ニ入り僚吏数人ヲ率ヒテ、佛

国蒸気船ニ搭シテ、長崎ヲ脱セリ、

以書翰申入候、然ハ当今国内之形勢ニ付、追々人心致
動揺候間、土地騷擾為無之、右様之節ハ、肥・筑両家
之内へ土地相預ケ、一ト先在勤之者引上候様可致旨、
兼て命令も有之候間、諸事右差函に随ひ致帰府、就て
ハ以来貴国人民談判之義ハ、当番年に付、筑前家に於
て差向条約之通取引、且是迄取扱候在仕支配向、通辞
等ハ、其俛に相残シ置候、此段申達候、謹言、

河津伊豆守

慶應四年辰正月十四日

花押

各国箇士宛各通

〔復古記にて校訂〕

七七八ノ四
上国ノ警報伝フルヤ、市・在伝聞奉行大ニ土兵ヲ募リ、薩

邸ヲ放火シ、土州人ヲ追捕シ、併セテ諸藩正義ノ徒ヲ捕
フト流聞シ、転々騷擾ヲ極メリ、此際又奉行ハ、附属吏
ヲ率ヒテ此地ヲ脱シテ、江戸ニ帰レリト伝へ、市民又紛
擾シ、往々家什ヲ運ヒ、四方ニ避居スルモノアリ、或港
内碇泊ノ英国軍艦、是ノ時ニ当リ、覬覦ノ念アリト、在
崎諸藩亦物論アリ、物情静ナラス、時ニ土州藩士佐々木
三四郎等相議シ、奉行所ニ至リ、河津伊豆守ニ面議シテ、
措置ヲ決セント、正月十四日夜半、十数人ノ同志ヲ率ヒ、
奉行所ニ至ルニ、河津及ヒ附属ノ吏員ハ、既ニ去テ在ラ
ス、土着ノ吏員ニ三人ヲ留メリ、佐々木等事態放却スベ
カラサルノ旨ヲ諭シ、在崎各藩士ト俱ニ、政務ヲ与カリ
聞クコトヲ告ケ、使ヲ奔セテ各藩士ニ報知ス、本藩士野
村宗七等先到ル、諸藩士続テ到ル、即チ奉行所ニ入ル、
筑前・肥後藩士到ル、就テ奉行所ヨリ後事ヲ託セシヤ否
ヲ問ヒ、其実ヲ知レリ、仍テ之ヲ各国領事ニ告ケシメタ
リ、

復古記二十二

同十五日、各国領事肥・筑二藩士ニ書ヲ贈リテ、公務
取扱之所在ヲ問ヘリ、

肥前
筑前
太守へ

政府之命令ニ依テ、長崎奉行退帆後、市中警衛向両所
へ相渡候儀、長崎滞在之条約済各国コンシユルへ、正
月十四日附長崎奉行ヨリ之書翰落手セリ、随テ何方ニ
テ公之事務取扱相成候哉、我等へ告知アラン事ヲ希フ、
於長崎千八百六十八年第二月八日

葡国岡士

セーローレイロ

英国岡士

マルキユスフロウル

李国岡士

リチャルトリンダー

亜国岡士

テーエルモール

佛国岡士

エルレーキ

白国岡士

セーアテリヤン

蘭国瑞西国兼岡士

エフペートンフリング

テネマルク国岡士

ハーシキフ

^{セ七八ノ五}
同日又各国領事ハ運上所会合、諸藩主名及ヒ會議ノ条件
ヲ、知ラシメンコトヲ求メタリ、

長崎

運上所司長

一 明日運上所ニテ、各国岡士集会可致儀、御廻文有之、
右御答申上候ハ、拙者共面会致候国主御姓名、并集
会之事柄、最前承知致度候、

千八百六十八年第二月八日

葡岡士

セーロウレイロ

米岡士

マルキユスフロウル

李岡士

リチャルトリンダー

白岡士

明治元年(1868)

セーアテリヤン

和蘭岡士

エフペーンブリング

佛岡士

リキ

丁抹岡士

ハーシキフ

七七八ノ六
翌十六日ニ至リ答書ヲ贈レリ、

復古記二十二

千八百六十八年第二月八日附之書翰落手披見セリ、右

ハ鎮台当地引払候ニ付、

朝廷ヨリ其任職之モノ被差越候迄ハ、在崎之各藩並土

地之役々申合、諸事は迄之通取計候儀及告知タメ、左

之人数面会致候儀ニ有之候、此段及回答候、

慶應四年正月十六日 長崎連上所

各国岡士宛

薩州藩

沖直次郎

肥後藩

宮村莊之丞

筑前藩

栗田貢

藝州藩

石津蔵六

肥州藩

重松善左衛門

土州藩

佐々木三四郎

對州藩

岩崎浪江

宇和島藩

井關齋右衛門

島原藩

石川治部左衛門

平戸藩

服部源五右衛門

唐津藩

杉江會輔

大村藩

稻垣治部右衛門

五島藩

奈留帶刀

十七八ノ七
同十六日肥・筑二藩士、朝命在ル迄在崎、各藩士土地ノ

諸役ト協議、西役所ニ於テ取扱フ旨ヲ告ケタリ、

復古記二十二

千八百六十八年第二月八日附之書翰落手セリ、長崎奉

行退帆後、公之事務、何方ニテ取扱候哉承知被致度旨

被申越、承知セリ、右ハ朝廷ヨリ其任職之モノ被差越

候迄、西役所ニ於テ在崎之各藩、並土地之役々申合、

諸事は迄之通、取計候儀ニ有之候、此段及回答候、

慶應四年正月十六日

肥前藩
筑前藩

各国岡士宛

十七八ノ八
同日諸藩士ハ會議所ニ會シテ、各藩士朝廷ノ為メ、誠意

ヲ致スノ誓書ヲ作り、之ニ連署シ、尚協力同心尽力シテ、

鎮撫ノ事ヲ掌リ、朝命ヲ待ツヘキコトヲ約セリ、

復古記二十二

諸藩士誓書

誓盟者長大之事件ニ就テ、万世不易之國論ヲ以テ、同
盟セルノ後ハ、旧事ヲ問ハス、隔意ヲ生セス、互ニ併
力補助シテ、此向キ如何様之紛擾相起ト雖モ、
天朝之御為メニ、各鉄石之心ヲ以テ盟誓シ、誠心ヲア
ラハスモノ也、

慶應四年戊辰正月 日 薩州

野村宗七

長州

楊井謙蔵

土州

佐々木三四郎

藝州

國枝與助

大村

稻垣治部右衛門

宇和島

井關齋右衛門

對州

岩崎浪江

加州

高橋 莊兵衛

柳川

山上 九左衛門

越前

木内 甚兵衛

筑後

今井 新左衛門

肥後

宮村 莊之丞

筑前

粟田 貢

肥前

大隈 八太郎

平戸

服部源五右衛門

五島

奈留 帶刀

島原

真田源五右衛門

七七八ノ九
事件

今度、長崎奉行当地退去之挙動、脱走同様之筋ニ有之、其前区々之浮説等申触シ、人心動揺之折節、右様之次第、外国交際之土地、片時モ難捨置訊ニ付、即夜ヨリ出崎之各藩追々ニ出會、土地之役人等申談、地下鎮撫ハ勿論、外蛮之侮蔑ヲ受ケス、

皇国之御武威ヲ不辱之主意ヲ以テ、一統會議シ、是迄之規則、条理アルハ其俟闕キ、不条理ナルハ臨機之所置ヲ以テ取計ヒ、

天朝之御命令被為下候迄之間、公平赫々タル処ヲ以テ、諸藩各粉骨尽力シ、土地鎮靜、各蛮ニ至迄モ承諾ニ及ヒ候、然ル処、京攝之間戦争之確証ヲ得、徳川氏

朝敵タルヲ知ル上ハ、鎮撫之事当地ニ限ラス、九国一円ニ相及ホシ、既ニ肥之天草、豊後之日田等ニ至ル迄、其事ニ及ヒ候、右會議ニ預之藩々如左、

慶應四年戊辰正月 日 薩州

長州

土州

藝州

大村

宇和島

對州

加州

柳河

越前

筑後

肥後

筑前

肥前

平戸

五島

島原

追テ、同盟之藩々ハ、此後ニ書加フヘシ、

^{七七八ノ一〇}諸藩士即チ相議シテ、士民ヲ安撫シ、告諭ヲ發セリ、

復古記二十二

十六日會議所布告書

当地奉行引弘候ニ付テハ、土地一体之事件、追テ御下

知有之候迄ハ、諸事各藩並土地之役人衆議之上、万事

西役所ニ於テ相決候間、浮説等不申触、致安心商業相

營可申候事、

辰正月十六日



^{七七八ノ一一}同日又各國岡士ニ書ヲ贈リテ、保護安堵ノ旨ヲ通セリ、

復古記二十二

今般、長崎奉行退崎後、公之事務、

朝廷ヨリ其任職之者、被差越候迄之事件ハ、在崎之諸

藩、並土地之役々申合、我國民共貴國人民ヘ対シ、暴

行ハ勿論、諸事不取締之儀無之様、手当致シ置候間、

聊無懸念交易等、是迄之通取行候様可被相触、且貴國

人民之儀ハ、尚又暴行ハ勿論、不取締之儀無之様有之

度、此段申進候、謹言、

薩州藩

慶應四年辰正月

松方助左衛門

肥後藩

宮村莊之丞

筑前藩

栗田 貢

藝州藩

石津 蔵 六

肥前藩

重松善右衛門

土着

薬師寺久左衛門

越前藩

木内甚兵衛

同

久松土岐太郎

土州藩

佐々木三四郎

貌利太尼亞岡士

マルキユスブロウルスエスクワイル

對州藩

岩崎浪江

各国岡士宛各通

宇和島藩

井關齋右衛門

七七八ノ二
同十七日、運上所ニテ、英国領事ト筑前粟田貢・肥前副

島原藩

石川治部左衛門

（種邑）
島次郎、及ヒ本藩士松方助左衛門・土州佐々木三四郎出
会応接セリ、左ニ応答ヲ載ス、

復古記二十二

平戸藩

服部源五右衛門

コンシユル

奉行之沙汰ニハ、筑前・肥前ニ預ケ置候趣承知罷在、

唐津藩

杉江會輔

諸国ヨリ御預リノ儀、承知致居不申、

大村藩

稻垣治部右衛門

其儀ハ諸藩談判ノ上、治定致答ノ処、無其儀奉行被引
払候ニ付、差当リ奉行代勤無之テハ不相叶候ニ付、諸
藩申談取計候、尤京都ヨリ御下知迄之処、

五島藩

奈留帶刀

何時京都ヨリ委任ノ御方被參候哉、

其儀ハ定テ難申（原註）凡二十日三十日之内ニハ被參候積

左候へハ、其御許方ニテ取締被致候哉、

其儀ハ諸藩一統申談取計致シ候、既ニ此程書翰ヲ以テ掛合候通り、

薩摩・筑前・土佐・肥前ニテ、御取計相成候哉、

左様ニテ無之、昨日之書翰中ノ名前之モノ、在留ノ十
四人ニテ取計候、

交易ハ是迄ノ通ニ候哉、

何レ京都ヨリ御沙汰迄ハ是迄ノ通、

只今迄御咄之趣、各国岡士へ御告知被成候方可然、

昨日此方ヨリ遣シ候書翰被差返候ハ、委ク書載相送
可申、

此節承接致候事件ハ、奉行猥ニ被引払候儀不相分、当
地之儀ハ、外力国トハ違ヒ、各国交易ノ地ニ付、不都
合有之候テハ不相濟候ニ付、我々西館へ罷越候処、最
早奉行被引払候後ニテ、地役人申談、是迄之通取計可
申候、尤当地取計之儀、当十五日早朝都へ申送り、速
ニ奉行代被參候様申遣シ候、交易其外取締之儀、諸藩
並地役人申談取計候、尤肥・筑預リノ儀ハ、奉行被申
残候迄ニテ、未タ兩國承知不致内被引払候ニ付、無抛
居合之諸藩并地役人申談取計候事、

今日罷出候ハ、只今ノ趣承リ度タメ罷越候、穩便ノ
御取計大慶ニ存候、

各国へ対シ、迷惑相掛間敷為ニ付、右之趣各国岡士へ
通達可被致事、

其許方ニテ、交易其外万事、是迄奉行被取計候通ニ
候得ハ、宜敷、

於英ハ日本内乱ニ不相拘候事、

英人ニ対シ事有之節ハ、諸藩見当ニ致候、其御許方
多人数ニテ、面倒相掛リハ不致候哉、

其儀ハ一人ニ相談相成候得ハ、一統申談候事、

書翰杯ハ一人ニ御当ニテ宜敷、其儀面倒ニ候得ハ、運

上所当テニ相成候テモ宜敷、尤姓名御入用ニ候ハ、
今日ノ四人当テニ相成候テモ宜敷、

運上所司長宛書翰差出可申旨ノ書翰、御遣シ被下度、
又運上所司長ヨリ書翰參リ候ハ、諸藩御申談ノ事

ト相心得候事、

事柄ニ寄り、一兩人ニ御逢願候儀モ可有之、
其儀ハ宜敷、

奉行被引払候ニ付テハ、各国交易并人命ニ相拘り候
儀、御請合之書翰申請度候、

其許ヨリ只今迄応接之趣、書翰ニテ差出可申候、

兎モ角、各国コンシユル当ニテ、書翰御差出可被下事、

人命之儀ハ、外国人不法相働候節ハ、夫々手当可致候事、

其儀ハ事柄次第ニテ、今日申立候次第ハ、是迄ノ通ノ儀ヲ、相尋候迄ニ御座候、

其許方ノ御取扱相成候儀ハ、御国主之命ニ候哉、左様、

帝ヨリ勅諭有之候迄ハ、都テ是迄ノ通ト申儀之御書翰相願候、

其許方ニテ、連上御取立ニ相成候哉、

只今迄申立候儀ハ、ミニストルヨリ命令有之候迄之

儀ニ御座候、

此方モ同様、

各国商人共、其許方へ連上相納候様、可申聞候事、

不時之儀有之節ハ、急速ニ岡士へ為御知可被下候事、

当地ニ兵士何程有之候哉、

凡六百人モ有之、其外諸国ヨリ多分ノ兵士、参リ居候

ニ付、安心可被致事、

其儀承リ安心致候、各国岡士へ其趣為相知可申候、

頃日ハ見廻リ無之様見請申候ニ付、商人共終夜番兵致居候、

其儀ハ、是迄ノ通見廻リ候様、違置候得共、全ク不行届之儀ト存候ニ付、早速是迄ノ通見廻リ候様、相違候

ニ付、商人番兵之儀ハ被差止可然候、

七七八ノ三
同十八日連上所ニテ、李漏生国・亜米利加国・白耳義国・

丁抹国・葡萄牙兒国各領事へ心接セリ、其心答ヲ載ス、

復古記二十一

字リンドー

各国コンシユル申談シ仕候儀申上候、

一々承り度候、

奉行出立之時ニ、肥・筑ニ取扱之儀申残有之、其他

之諸藩方へハ、引合之筋申残無之ト承リ、尤其他之

諸藩ト申テ差支モ無之、

奉行ヨリ申残之儀、肥・筑へ有之候得共、此方ノ主人

へ申越候儀、間ニ不合、引受候儀答モ不致内、奉行退

去致シ、依之諸藩申談、取扱イタシ候儀、名前ヲ御知

ラセ申候、何レ

帝ヨリノ御下知アル迄ノ事、

是迄大君ノ政府ト申処テ警衛カアリマス、然ル処此程ヨリ政府ノ代リ、其諸藩ノ人々ヲ承知イタシ度、成程、諸侯カ十三藩、夫レト長崎ノ地役、此程書付通り、

諸藩御列座ノ内テ、筑前ノ御方ハ承知、其外ノ御人ハ存不申故、御名前書御認被下、

夫ハ無程諸藩十三、其外長崎地役人名前書、且土地警衛一体ノ儀、書附ヲ以テ御知ラセ可申、

是迄先奉行在勤中ハ、都テ日本人ノ儀モ訴ヘ致シ居申候、此後、右同様ニ取計之儀致シ可申、

成程、何事モ是迄ノ通ニ致シ置候故、各国ノ人々ヘモ御迷惑ノ儀、無之様ニイタシ度故、各藩心配致シ居候、万事外国人迄モ安全ヲ祈リ候故、此上ハ御引受ノ儀、是迄之通訴ヘ候儀、諸向之事モ、都テ各様ヘ訴ヘ可申、

夫ハ尤ノ事、何事モ西御役所ヘ御届可被成候、

是迄、私共ヨリ届出候諸事出入ノ儀、是迄奉行所ヘ

届致シ置候儀ハ、改テ各様迄書附差出可申哉、

其儀ハ、此方ニテモ篤ト取調イタシ候上、

只今迄、各国コンシユルヘ種々訴ヘノ儀、奉行ヨリ有之候儀ハ、御承知ノ儀有之候哉、

其儀ハ取調候上、政府ヘ掛リ候儀ハ、政府ヘ御引合、当地ヘ掛リ候儀ハ、当地ヘ御引合被致、

譬ハ諸侯ノ船代金払方滞候節ハ、各方ニテ其船御差止出来候哉、

夫ハ政府ニテ承リ候、

訴ヘ候人ニ限ラス、道理ニ不叶儀ハ、誰テモ訴ヘ可申、其政府ハ此座ノ諸侯ヘ訴ヘ可申、

左様ニテ候、

是迄ハ、各国岡士名代ヲ、私一人ニテ申上候処、是ヨリハ、李国リンドーガ一分ノ存付テ申上候、

リンドー

長崎ニ李国王ヨリノ命ニテ参リ居、此節国乱ニ付、

大君政府ハ被廢候故、鎮台相極候迄ハ、諸君ヘ御引合申上候、何レ国王ヘ申遣シ、其命令相待、命令次第ニテハ、今日拙者ヨリ御談申候事情モ、相変候哉

モ難計候、

夫ハ宜敷、此方モ国王之命ヲ受テ取計フナリ、

只今御咄之通、命令有之迄ハ、諸藩ニテ御取計可被

成故、其処ニイタシ置可申、

此後ハ別テ取計ノ儀、公平ニ取扱イタシ可申、

白アテリヤン

諸事太平ノ儀相好候故、日本人外国人ノ儀モ、公平

ノ論ヲ相好可申、

其儀ハ御案シ無之様、御安心候哉、(被成カ)

米コンシユル

諸コンシユル申通、自分モミニストルヨリ申越候迄

ハ、是迄ノ通ニ致シ置候、

リンドー

蘭コンシユルハ只今迄参リ不申故、私共ヨリ右之次

第申通シ候、異存ハ無之ト被存候得共、若不同意ニ

候ハ、早々御知ラセ可申、書翰差出不申候ハ、

異存無之ト御承知可被下候、

宜敷御頼申候、

各藩諸侯ノ命ニ依テ、取扱イタスト申儀、此書附ニ

御書載無之故、其儀御認入レヲ願マス、

此節ノ儀ニ付、出崎イタシ候儀ニハ無之間、主命トハ

難認、乍併兼テ蒙命出崎罷在候故、何レモ肩書有之候、

自分ノ処ハ、肥前藩・筑前藩同様、其外諸藩ノ御方

モ相心得申候、

七八ノ四
同日又本藩士、薩州・肥後・筑前・肥前・土州藩士、通

弁平井義十郎、調役並高木清右衛門・福田大之丞、定役

山口源之進、佛国領事へ応接セリ、其応答ヲ載ス、

復古記 二十一

彼

奉行出帆ノ節、肥・筑之両家へ御頼ニ相成候由、御

引請ニ相成候哉、

此儀肥・筑之両家へ達ハ有之候得共、奉行差急キ乗船

相成、国許へ掛合置候得共、遠路之儀ニ付、未タ主命

無之、何レトモ主人ニオイテモ、

天朝へ伺不申テハ、預リ候儀モ有之間敷、今暫ハ延引

可致、

当節、長崎政府ハ何方ト心得可申欵、

奉行ハ無之候トモ、政府ハ有之候儀ニ付、在崎之諸藩

土地ノ役々申合、其処置取計、何レ共

天朝ヨリ命令有之候迄、外国交際ノ地ニ付、差支無之

様取計候事ニ候、

帝都ニアルトイフ事、只今承リテ知ル事也、各各疑クハ

藩ニテ、長崎警衛有之候ハ、申分ハ無之、外藩ト御申合有之儀ニ候ハ、我商民トモヘモ申聞、兵庫へ罷越可申、尤両家ニテ御引請御取計有之候ハ、

自分ニ於テ申分ハ無之、公使へ申通スヘシ、只今国主へ何置有之、差図無之候テハ、左右睨ト申カダシ、奉行明キ中ニ付、諸藩打寄取計候義ニ有之、日本ハ都ニ

帝アリ、夫ヨリ大君へ預ケアル職ナリ、何事モ帝ヨリノ命令ニ随フヘシ、政府ハ大君ニ限ル事ニアラス、

朝廷ヨリ差図無之内ハ、何レニモ取計候事ナラス、公使へ伺候事ハ勝手タルヘシ、

条約ヲ結タルハ、大君ヨリノ条約ヲ結ヒ、其人ヨリノ達ヲ自分ハ相守リ居ルナリ、自分ニテハ肥・筑ノ両家へ御引合仕候、肥・筑ヨリ外諸藩へ御談相成候儀ハ、勝手タルヘシ、

肥・筑ノ太守へ相伺、差図有之上ハ、即日ヨリ引合可申、イマタ差図無之ニ付、拙者ヨリ睨ト返答致シカダシ、

公使ヨリモ命令アレハ、外諸侯ト引合ナリカタシ、

何方ヨリ之カタメニ兵ヲ起シ候哉モ難計、依之他人へハ引合難致、且我等大君アルヲ知テ、

朝廷アルヲシラス、

兵ヲ起スハ何ノ名義ニテ候哉、抑一昨年頃カ、

朝廷ヨリノ条約ニ相成居候事ハ、承知ニ候ハ、必

朝廷アル事ヲシルヘシ、

奉行各方へ長崎御預ケニ相成候事ハ、御承知ニ相成

候哉、

成程、奉行ヨリハ預ケ度趣、達ハ有之候得共、国元へ掛合、国主之命無之内、乗船脱走イタシタリ、依之睨ト事柄引継致サス、

御両家ニテ長崎御引受之儀ハ、自分ニテハ大慶ニ存セリ、其他藩トハ引合カタク存候、

国元主人ヨリ差図無之内ハ、睨ト引受候儀申カタク、肥・筑両家ノ儀ハ、長崎土地ノ警衛向受持候儀ハ有之候得共、政府ヲ預ル権兼テ無之、都ヨリ差図有之迄ハ、在崎ノ各藩申合取計候也、

肥・筑国元ヨリ申来候間ハ、何方ヲ政府ト心得可申哉、

西役所ヲ政府ト知ルヘシ、

其政府ニテ事ヲ計フモノハ、誰ニ候欤、此処ニアル土佐・薩摩・肥・筑其余ノ諸藩士、土地ノ役々ナリ、

両家ノ有事ハ承知ニ候得共、其余ノ有事ハ不知、其旨ヲ公使ヘ告クヘシ、其間ハ税銀ハ自分手許ヘ留置、臆ト政府相極リ候上、其政府ヘ納ムヘシ、公使ヨリ命モ有之候事故、斯ク談シ候事也、兵起ル時モ何方ヘ兵ヲ起シ候哉、不相分候故、斯ク談スルナリ、兵ヲ起シ候ト申儀ハ、如何ナル名義ソ、扱税銀不納候ナラハ、商法モ止ムヘシ、

此俣ニテ商法止候法ハ無之筈、税ハ岡士ニ預リ置候得ハ、不納ト申儀ニ無之、只今大君職ヲ辞シ候事未タ不知、政府相極リ候上、税納スヘシ、大君之政府ト申儀ニ無之、大君ハ猶ミニストルノ如キ者ニテ、時々進退アルヘシ、長崎政府ハ則朝廷属ノ政府ニテ候得ハ、一日モ税納セサル理ナシ、只今被參候人ハ、何方之藩ニ候哉、

土州藩ナリ、
土州藩ニ候ハ、話止ムヘシ、
土藩士云、

今日ハ佛岡士ニ用事ハ無之、外岡士ニ逢候為メ、出席イタシ候、

自分ニテハ子細モ無之故、滯座スヘシ、左候ハ、滯座スヘシ、

大君政府之權無之事、未タ承知不致、奉行ヨリ引継ト申方ヘ引合候事ト存候、若此後暴徒有之節ハ、何方ニ申出候哉、肥・筑両家ヘ引合候事ト存候間、斯ク申事ナリ、万一此処ニ殺害等ノ事件アル時ハ、何方ヘ可届哉、
西役所ヘ可届出、

誰カ一人或ハ兩人引請候ナラハ、其人ヘ宛テ届ヘシ、未タ主人ノ命無之故、諸藩ニテ取計候、誰ト差極候事成カタシ、依之衆議ヲ以テ取計、告候名前宛テ可申出、都テ公使ノ命ヲ請候通ニイフナリ、姓名布告スルナリ、彼文意ニ不承知モ候ハ、商法可止、

各国々ノ人ヘ向テ事ヲ取計フコト致シカタシ、肥・筑両家ニテ、事ヲ引請候ハ、可然哉、
主人ノ命無之テハ、取計成カタシ、
是迄条約結ヒアル処、奉行ヨリモ両家ヘ預ルト承リ

候処、即今両家ニテ引受ル事成カタシト承リ候故、

其段公使へ申遣シ度、今日四字(時)比出帆之船有之候間、

夫ヨリ告度存スルナリ、

土藩士云、

今日応接之事柄ハ、日本ノ事件ニ付、一通リ事情相述
度存候力如何、

承ルヘシ、

根元各国岡士へ申聞候次第ハ、奉行退去ノ事承リ、当
港之儀ハ外国交際ノ土地ニテ、諸事引受取扱候者無之
テハ、外国へ対シ、如何ナル不都合ノ事件、各国人民
迷惑ノ事等、相生シ候テハ不相成ト存シ、一時モ早ク
保護致シ度存候故、奉行退去、直ニ西役所へ罷越承リ
候処、一体ノ儀、両家へ托シ有之趣ニ付、肥・筑へ問
合候処、奉行ヨリ一応談ハ有之候得共、未タ其段国元
へ掛合モ無之内、奉行ハ速ニ退去、此困難差置候ニ付、
在崎之諸藩、土地之役々申合、土地之人民安堵イタシ
候様、夫々取締致シ置、其儀都へ申立、命令ヲ受ケ取
計候積リ、夫迄ハ一同申合、公平ノ処置ヲ以テ取計、
交易筋其外トモ、是迄奉行仕置ノ通、不相変取行度存
スル所ナリ、夫迄ハ土地ノ役々ト申合、外国向ノ儀ハ、

別テ差支無之様、取計度存スル所、肥・筑而已ニ逢度

トノ趣ニ候得共、如斯諸藩ニ於テモ心配罷在候義、既

ニ昨日英国岡士へモ申談候処、尤ノ事ト了解被致候儀
ニ有之、其旨得ト承知有之度、存スル所ナリ、

都テ公使ヨリ之命令ニ随テ取計候故、自分心得ヲ以
テ、所置致ス權無之、

税銀ヲ不納事ハ如何、公使ヨリノ命令ニモ有之間敷、

税銀不納候ハ、商法可留、

商法ヲ差留候ト申事ハ大事件ニ候、時宜ニ寄り、戦
争ニモ及可申、

税銀不納商法取行候公法有之歟、如斯平穩ヲ計ヒ、奉
行在勤中ノ通り、不相変取計候処ニ、税銀ハ不納、商
法ヲ取行候儀ハ、外国ニ於テ其法有之哉、公使ヨリ命
令アル迄ハ、不相変筈之処、税銀ハ不納ト申事件不心
得、

万事説之一決不致故、公使へ相伺候事ナリ、商法ヲ

留ル事ハ、大事件ニ候、

税納之事件ハ如何、

今晚出帆、

税銀之儀ハ如何、

今晚参り候処ハ如何上条及本条答、
詳説脱アラシ

税納ハ如何致シ候哉、

今晚出帆イタシ候故、是迄ノ通税銀ハ可相納、

夫ナラハ商法差留候儀無之、

今晚出帆イタシ候ハ、税納可致、左無之節ハ、又

談判スヘシ、

税不納商法之公法有之致承り度、税納レハ子細無之、

万国之公法ハ、ヨウロッパ之法ト、日本トノ違ヒア

ルナリ、何レ共今晚出帆之上、公使ヘ伺フヘシ、

左無之節ハ、又処置モ有ルヘシ、

税ハ納ル歟、

夫ハ今晚出帆之処置ニアルヘシ、

税ハ如何、

今晚出帆スル故、税納スヘシ、

夫ナラヨロシ、

扱色々議論ニ至リ、甚氣之毒ニ存スル、併シ弁論ス

ル所ナリ、

聊隔意ハ無之、

洋人モ日本人モ分別イタシ、乱ハ不好处ニ候、平穩

ニ有タシ、

御深情ハ忝シ、其タメ斯克心配スル所ナリ、厚意忝シ、

内乱ハ不好、諸事平穩ヲ望メリ、何事モ公使ニ告テ

取計フヘシ、

此方モ国王之命ヲ請テ取計フヘシ、

何レ何事モ命令通りニスヘシ、今晚出帆スヘシ、過

刻ハ種々議論ケ間敷申募り候ハ、全ク我支配頭タル

ミニストルヨリノ命ニヨリ、申立候事ニテ、拙者一

己ニ於テハ、決テ別意無之候、

於此方モ隔意ハ無之、只々職掌ヲ尽シ候而已ニ有之候、

七七八ノ一五

同二十日、英国領事ハ、諸藩士ノ仮政務ヲ了諾スルノ旨

ヲ回答セリ、

復古記

在長崎貌利太尼亞官事庁

千八百六十八年二月十三日皇國正月
二十日

貴人

一当月十一日我正月
十八日附貴翰ヲ以テ、鎮台被引払候ニ付テ

ハ、何レ

朝廷ヨリ御委任之有司被命候迄ハ、当地之事務為取扱、

当分各位方ニテ、政府御預リ相成候儀、布告之次第、

令披閱領承候、

一外國人性命並所持物等ハ、足下方ニテ御守衛被下、

且万事条約面ニ遵奉イタシ候様トノ尊示ニ付、拙者

ニ於テモ、當時在坂女王殿下ミニストルノ下知ヲ受

候迄ハ、各位政權御預リノ儀、承知イタシ候、此段

乍憚及回答候、

女王殿下コンシユル

足下之恭謙從者 マルキユスフロウルス

長崎政府御預

大名方士官衆

【参照一】

復古記

鶴津一掃記

將軍ノ上国ニ一敗セル、其報崎陽ニ到ル、区々ニシテ市民之レカ為ニ紛擾ス、或ハ云、鎮台河津伊豆守大ニ土兵ヲ募リ、薩邸ヲ放火シ、土州人ヲ追捕シ、併セテ諸藩正義ノ徒ヲ捕フト、巷説紛々之ヲ久シテ、俄ニ伝フ、河津伊豆守及ヒ附屬ノ吏、此地ヲ脱シテ東歸スト、市街増々騷擾、家什ヲ山野ニ運ヒ、窃ニ避居ヲ計ル、且ツ聞ク、港内ニ碇泊セル英国ノ艦士等、是ノ時ニ當

ツテ、覬覦ノ念ヲ放マ、ニセント欲スト、在崎ノ諸藩密カニ物議アリ、而シテ進取ヲ欲セス、是ニ於テ我佐々木三四郎等、一二同志ノ士相議シテ曰ク、今天下紛々、上国ノ戰爭、官軍ノ捷報イマタ其確タルヲ聞カス、此ノ紛擾ノ際ニ當ツテ、内外交際ノ要港ヲ棄去リ、外夷ヲシテ、覬覦ノ念ヲ逞フセシメハ、神州ノ地、座シテ香港・上海ノ覆轍ヲ見ルヘシ、我徒苟モ出崎ノ任ヲ辱フシ、徒ラニ傍觀スヘキニ非ス、宜ク先ツ西邸ニ到リ、河津伊豆守ニ対シ、内外枢機ノ重職ニ任シ、何ニ因ツテ脱去スルヤ、且ツ後事ヲ誰レニ託セルヤ、精細ニ面論スヘシト、正月十四日夜十二(時)字ノ頃、吉井源馬・渡邊剛八・橋本甚之助等ト、意ヲ決シテ西邸ニ到ル、野崎傳太・深尾泰吉・依田小平太・菅野覺兵衛・野村要輔・堀内慶助・佐々木榮・關雄之助等、続テ到ル、到ルトキハ伊豆及ヒ附屬ノ吏既ニ去リ、纔ニ土着ノ吏人岡田實明等、兩三輩ヲ看ル、伊豆在リヤト問フ、皆答テ曰ク、既ニ去ル、後事ハ肥・筑兩藩ニ託ス、而シテ兩藩ノ士吏、猶未タ到ラスト、因テ彼輩ニ謂テ曰ク、今天下紛々、醜夷驟隙ヲ伺ヒ、実ニ皇州危急存亡ノ秋也、然ルヲ豆州故ナクシテ、斯ル内外交際ノ要地ヲ棄

去ル、我具ニ之ヲ面責セント欲ス、彼レ既ニ去ル、悔レトモ及ハス、然リト雖モ、此ノ要藩守陰モ放在ス(在左)ヘケンヤ、足下我レトミナ、王地ノ人ナリ、我徒宜ク此席ニ列シ、各藩出崎ノ士ヲ会シ、今ヨリ内外政務ヲ与カリ聞クヘシ、願ハクハ足下モ亦タ努力セヨ、皆曰ク、唯々敢テ尊意ヲ奉セント、因ツテ使ヲ列藩出崎ノ官ニ報知ス、薩・藝先到ル、諸藩統イテ到ル、此際隊士及ヒ深尾・依田等ト、相トモニ官門ノ外ニ在リ、土着ノ兵遊撃隊ト唱フル者、誰何ス、仍テ答テ曰ク、今宵河津伊豆守、故ナクシテ東ニ走ル、我官長佐々木三四郎等、往テ其非ヲ責ム、事体ニヨリテハ、相互ニ彈丸ヲ接スヘシト、言終ツテ直チニ入り、玄関ヲ護ス、之ヲ久フシテ、遊撃隊長等乞フテ曰、今夜鎮台脱行、中外大ヒニ騷擾、我徒素ヨリ土着ノ兵、今ニ至ツテ措置ヲ知ラス、幸ニ聞ク、貴藩今宵ヨリシテ、政務ヲ与カリ聞キ、且ツ内外ヲ鎮スト、多幸ニ過キス、請フ、今ヨリ我輩ヲシテ、守衛ノ人員ニ充タシメハ、敢テ努力セント、因テ此兵ヲシテ、原ノ如ク市街ヲ巡撫セシメ、且ツ分ツテ玄関ヲ衛ラシム、肥・筑出崎ノ官到ル、仍テ伊豆ヨリ後事ヲ托セラル、ヤ否ヲ問フ、肥答、一昨

鎮台我藩ニ後事ヲ託セントス、我答テ曰ク、至重ノ事件、現今出崎ノ吏輩、決然承諾スル能ハス、乞フ、藩令ヲ得ルノ後敢テ命ヲ奉セン、且ツ崎陽ノ地タル肥・筑年ヲ更ヘテ、交々之ヲ護衛ス、今ヤ筑其ノ期ニ当レリ、或ハ筑ヘ其命アツテ可ナラント、筑答、前条云々、出崎ノ吏速カニ命ヲ奉スル能ハス、鎮台重テ曰ク、今歳筑前家護衛其期ニ当レリ、乞フ、辞スル勿レト、強ヒテ之ヲ命ス、僅カニ一二ノ後事ヲ受領ス、而シテ俄然脱シ去ル、去ルニ臨ンテ、亦寸楮ノ報アルナシ、豈悉ク之ヲ託セラル、ノ理アラナヤト、此ニ於テ兩藩ノ吏ニ語ルコト、先キニ土着ノ吏ニ語ルカ如クス、二人又大ニ之ヲ然リトス、因テ依田・深尾・菅野ノ三士ヲシテ、急ニ之ヲ朝廷ニ奏シ、新ニ鎮台ノ任選アラシトヲ乞ヒ、尋テ急ニ之ヲ外国岡土ニ布告ス、初伊豆守ノ脱スルヤ、官庫ノ藏金一万余千余ヲ齎ラシ去ル、土着ノ吏白木久風・野村金吉(マキ)・高松精一等、乞フテ船中ニ至リ原註久風一人伊豆守ノ船ニ乗移リ、應接ス、遂ニ金ヲ収メテ帰ル、先是伊豆守応待シテ、英艦一艘ヲ幕府ニ購ヒ、其代価年賦ニ米穀ヲ通与シ、期年マテニ償却センコトヲ約シ、乗試ノ為メ、崎陽ノ船手士官白木久風・野村金吉・成瀬鷹之

輔等乗組ミ、江戸海へ航廻ノ準備央、正月十一日伏見・淀等ノ戦報市街ニ伝説ス、鎮台ノ諸吏、勝敗ノ確報ヲ得サルヲ以テ、泰然トシテ騒ケル形容ナシ、十二日仏艦入港、水師提督、直ニ河津伊豆守カ官舎西邸ニ来テ、合戦ノ顛末ヲ報ス、鎮尹以下驚愕僉色ヲ失フ、提督退散後、各集議或ハ速ニ帰府シテ、主從進退ヲ共ニセント云ヒ、或ハ委任ノ地ヲ私ニ去ルハ、義ニ於テ恥ル所、假令死ストモ此地ハ去ルヘカラスト云ヒ、其論一ナラス、豆州黙然言ヲ発セス、思案ノ体ナリシカ、遂ニ衆ニ対シ、各位ノ議論何レモ理アリ、今俄ニ退去モ勇ナク、又義ナキニ似タリ、然リトテ老幼婦女ヲ止メ置クモ、變ニ臨ミ進退安カラサルヘシ、因テ先老幼婦女ヲカエシ、而シテ後、時機ヲ計ルニ如クヘカラスト云フ、衆僉其言ニ同シ、遽ニ家族帰府ヲ布達ス、吏邸ノ騒動火場ノ如シ、十三日準備悉ク調ヒ、十四日未明ヨリ、荷物調度ヲ大馬頭ニ運送ス、前ニ購得タル英国船ニ乗ルナラメト思ヒノ外、別ニ外国船ヲ雇ヒ、其船ニ乗組ノ結構ナルヲ見テ、地吏ヲ始メ、市井ノ衆庶ノ説ニ、購得ノ船ハ、鎮尹以下帰府ノ用ニ備フルヲ以テ、家族ハ雇船ニテ送ルナルヘシトイヘリ、十三日ノ夜遽ニ布

令アリ、鎮尹官舎海岸ニ臨ミ、非常ニ便ナラス、明日立山ノ官邸ニ移徙ス、運搬ノ人夫ヲ出スヘシト、コノ令ニヨリ、十四日早朝、西邸ニ人夫群集、記録ヲ始メ、庁舎附屬ノ諸品諸具ヲ、西ヨリ東ヘ運ヒ、屬吏家族帰府ノ雑物ハ、東ヨリ西ニ送り、其馳違フ混雜、今ニモ變アル如ク、諸人薄氷ヲ踏ム心地ス、蓋シ伊豆守ノ胸算、実ハ十二日京攝ノ確報ヲ得、十三日肥・筑両藩ノ聞役ヲ呼ヒ、予メ土地ノ処分ヲ託セシナレトモ、肥藩ハ筑藩ニ譲リ、速ニ承諾セス、各其藩主ノ存意ニヨラシム事ヲ主張シ、至急ニ決スヘキ体ナシ、然ルニ當時諸藩ノ有志、及草莽ノ浮浪勤王ヲ称スル者、市郷ニ潛匿シ、鎮台邸ヲ襲フノ説囂々、異變ノ萌ナキニモアラネハ、遂ニ意ヲ帰府ニ決シ、或ハ騷擾ヲ生センコトヲ思慮シテ、立山転居ノ布達ヲハナシタリシ也、

【参照二】

寺師宗道日記正月二十日

(前略) 昨日方長崎より、ミニホール過分ニ相屈候由、是は分捕筒ニテ候由、奉行所ニ有之候を取揚候由、或拾五挺入箱式千箱有之候由、陸軍所は山をなし候由、且於長崎は、土州又は長州よりも手を附候処、土地之

役目始頭より薩江致帰順居候て、奉行所江有之候金五拾万兩、藏共々差出相成(風説)、又七千両幕府江積入有之候も、土人共より取揚、此方へ相渡候由、冲直次郎応接にて、右等之品も此方手ニ入り候由なり、
(寺師宗通日記(東京大学所蔵)にて校訂)

【参照三】

舊邦秘録

正月十八日

一長崎へハ土州ノ兵襲来リ、奉行ハ恐懼セシ哉、死亡イタシ、跡ニ米五千石・金七千両ハ、市中ニ可被下候間、配分イタシ候様書置有之、土州ノ勢奉行所へ乗込候処、長崎へ兼テ遊撃隊トイフ手当有之、此モノ共、土州ヨリ奉行所へ乗込候ヲ、一円合点不致、既ニ騒動ニモ可及勢ヒニテ候ヨシ、此方ヨリ申入イタシ候テ、可静トノ事ニ付、冲直次郎差越、差引イタシ候処、奉行モ殊之外喜ヒ、彼是スル内ニ、足輕ノ川畑清助トヤライフモノ、多人數ノ中ヲセリ分ケ差越候処、土州ノ兵ヨリ遊撃隊之内ナラントソシ、鉄砲ニテ射殺候由、薩人ナル事ヲ承リ、大ニ驚キ、頻リニ相断、終ニ切腹イタシ相断候由、
見便ニ差越候由、左候テ右之七千両相改候処、全ク無之

候付、奉行ハ英船へ乗込候付、夫ヲ詰カケ応接ニテ、右七千両ハ請取候由、鹿島氏正月十八日ニ嘶ナリ、

【参照四】

長崎モ市中焼失イタシ候由、御屋敷ハ残り候由、昨日迫田・本田ノ便ヨリモ為相知候、其後又々致着候半、イマタ慥成事云々無之候得共、専ラ風説ニテ候、此様都会ノ地焼立候テハ、イツレ日本ノヨワミナラン、是モ浪人共カ仕業ナラント見ユレトモ、イツレ諸所ノモノニテ可有之、勿論勤王家ノ輩ナラハ、言語同断(風説)

【参照五】

舊邦秘録

野村宗七外二名書状正月十九日付、市来六右衛門外一名宛

一十七日晚御固人数都テ、御邸へ到着罷成候付、市中江早々此節出兵之儀ハ、全市中非常ヲ戒之為ニ有之候間、聊動揺致間敷旨、相触候処、元ヨリ薩兵出勢定テ可有之ト、相待居候折柄、市中ハ勿論、夷人共ニ至リ、大ニ出兵ヲ相喜ヒシ人氣ニテ、御国ノ御威名大ニ相輝キ候由御座候、尤兵士狼ニ外出等不致、律儀ニイタシ居候様ニト申儀共ハ差引、並監軍ヨリ堅ク号令相成候間、市中安堵イタシ、一層御国ニ衆

望相帰候様ニ御座候、就テハ、今通り、都テ人数不召置候共、二小队位ハ、先ツ暫時被召置候様有御座度、諸郷並入來杯、郷兵之方扱ヒ安カルヘシト、笑談共仕候事ニ御座候、

一 山役所跡ニハ各藩評議ニテ、大村人数相守候筈ニ相決居、先日重役大村太左衛門頭取ニテ、入込申候、一 西役所跡ニテ、各藩十三ヶ団計ニテ、毎日夷人交際、市中取締等之評議有之、既ニ英・佛其外コンシユルモ、先是迄之通、税銀其外之儀共、追テ京都ヨリノ御沙汰有之迄ハ、各藩ニテ取扱候旨応接之処、コンシユルニハ、少々税銀等之儀ニ付、異論モ有之由ニ候得共、承伏致候由、乍然猶又兵庫ミニストルヘ、猶又右之趣可掛合ト為申由ニ御座候、右ニ付テ沖・松方等、毎日骨折尽力之事共ニ御座候、

一 産物会所ハ相応ニ金子モ有之、以前ヨリ御熟知通、地役人森千蔵其他、山田屋ヘ倚頼筋之儀モ、不絶有之居候処、此節ハ是非共、御国ヨリ御引受不被下候テハ、迎モ連続不致候間、強テ引受呉候様ニトノ儀ニ候、覺兵衛・八左衛門杯ヘ極内倚頼之儀有之、右ハ内輪之取扱ニテ、山田屋ハ長崎者之名目ニ有之、

矢張是迄之通、相對ノ処ニテ、トフカ致様ハ有間敷哉申居候、猶又追々時宜次第ニ申上越候様可仕候、御合御工夫可被下候、

一 各藩議定ニ付テハ、ヨク市中安堵イタシ候様、書付ヲ以テ申渡等モ有之候得共、追々取締申上様可仕候、一 沖直次郎儀ハ、各藩ヨク談合之儀モ有之、兵庫滞在ミニストルヘ、右当所コンシユル少々異論ヲ申立候儀ニ付、兵庫ヘ差越、依模様京都迄出候方可然申談、今日出立之賦御座候、

一 汾陽氏・森氏ニハ手早ク出跡軟モ不被量候間、若シ未滞崎ナラハ、形行御通報可被下候、

一 今日笠野小銃取入罷帰候付、右之形行可申上越筈ニテ、認掛リ候処、上国ヨリ左右有之、誠ニ不容易報知ニテ、御同慶不過之奉存候、

右之通取急度、例之乱文御推覧可被下候、以上、

五月十九日 中江九左衛門

喜入嘉次郎

野村宗七

市來六左衛門様

山内賢助様

明治元年(1868)

追テ、土佐々木三四郎・海援隊惣督吉井玄蕃、並
藝石津蔵六、肥前添島次郎等議定所ニテ、骨折之
事ニテ御座候、

【参照五】

杉孫七郎書状抄

一長崎詰御徒目付森清助十六日晚、在府長崎奉行筑藩
等へ相託置、仏蒸気船ヲ借テ、江戸表ニ逃帰レリト、
此御方モ金千両ヲ出シテ、跡ヲ追呉ナト云々、右森
又十七日ニ帰崎シテ、長崎之歩兵三百計隨身シタリ
云々、

〔表紙〕

忠義公史料 明治元年正月四

〔扉に、表紙の文字の外に市来四郎編の記載あり〕

目録

- 一 主上元服ヲ加セラル正月十五日
- 参照 大久保利通日記
- 一 大赦ヲ行ハル正月十五日
- 記 御沙汰書
- 参照 大久保利通日記節録
- 一 大勢ヲ察シ世変ニ随ヒ新ニ外国ト和親ヲ結ブ正月十五日
- 記 布告書外国トノ和親条約締結

同外人市中往来時ノ心得

参照 大久保利通日記

一 東久世通禧各国公使ト兵庫ニ会シ、大政復古ノ国書ヲ

付シ神戸争鬪ノ事ヲ判理ス正月十五日

記 応接書取並ニ内外列席人名

参照 島津伊勢日記抄

永之助ヨリボードイン部屋付へ通知書

外国新聞紙抄

岩下方平外二名書翰

一 藩老新納刑部仏人ペーサン同国公使応接ノ顛末ヲ報ス

正月十五日

記 本書並ニ別紙（白山仏国公使応接ノ大略）

参照 太守公御上京前白山建言之趣意書

島津伊勢日記抄

一 薩・長両藩ニ兵庫外国人居留地警備ヲ命セラル正月十五日

記 達書

一 藩吏備前藩士英人ト神戸争鬪ノ事ヲ通報ス正月十五日

記 本書

参照 英公使パークス傳節録

西郷・大久保宛岩下方平書翰

明治元年(1868)

家老宛木場傳内・伊地知貞馨書翰

藩記

大久保利通日記節録

藩地家老ヨリノ回報

島津伊勢日記

参照 大久保利通日記

松永清左衛門書狀節録

大久保利通書翰節録

池田家記

一西郷・大久保当今ノ情況ヲ藩地吏僚ニ報ス正月十
六日

輦下日載抄

記 大久保利通書牘

英国公使パークス傳抄

西郷吉之助書牘

外国新報抄

参照 大久保利通日記節録

一朝廷救米トシテ解封ヲ命セラル正月十
五日

一各公卿ノ謹慎ヲ解キ朝參ヲ許サル正月十
六日

記 本書並ニ別紙(各村々へ分米ノ割高)

記 本書六件

一藩吏九州旧幕領地処分稟申正月十
五日

一維新ノ趣旨ヲ諭シ皇族・公卿・諸官人ヲ激励セラル正月十
六日

記 本書

記 本書並ニ別紙

桂右衛門書面

藩地へ達書

附録 英公使徳川氏老中ト条約履行ノ当務者ヲ応答ス正月十
五日

藩地へ達書

記 英公使宛小笠原長行ノ答書

一忠義実名・花押ヲ改メラレタルコトヲ通報ス正月十
六日

一親王ヲ三公ノ上ニ班ス正月十
六日

一戦亡兵靈祀下賜金及ヒ其人名ヲ藩地ニ報ス正月十
六日

記 本書

記 本書並ニ藩内通達書

一忠義參朝大礼御加ヲ賀ス正月十
六日

記 本書

記 献上品目

戦亡傷兵人名

同上参与役所廻達

一忠義病ヲ以テ參朝ヲ辞ス正月十
七日

記 本書

一 忠義海陸軍總督ヲ命セラル正月十七日

記 辞令並職制及留守居届書

一 三職分課廻達書

記 職制並諸職任命ノ氏名

諸務分督ヲ命セラレタル氏名

一 岩下・西郷・大久保正月十七日

記 辞令

徵士氏名

参照 大久保利通日記

一 大久保一蔵有栖川宮ニ当務ノ要件ヲ陳上ス正月十七日

記 本書

参照 大久保利通日記

一 伏見散況ヲ藩内士民ニ告達ス正月十七日

記 本書

参照 寺師宗道日記

某日記

附録 会同盟約及諸国巡察使差遣ノ達書

太政官代下馬之事

七七九 主上元服ヲ加セラル

正月十五日、主上元服ヲ加セラル、

(記)

主上御元服 御加冠〔邦家〕伏見宮、御理髮正〔正親町権大納言嘉徳〕三條前大納

言嵯峨實愛殿トス、

【参照】

大久保利通日記

正月十五日

今日

主上御元服 御加冠伏見宮、御理髮正親町三條卿無

御滞被為濟由、

一四時ヨリ出殿、初夜退散、

七八〇 大赦ヲ行ハル

正月十五日、大赦ヲ行ハル、

(記)

今般

朝政御一新之御場合、今十五日 御元服之御大礼被為行、御仁恤之 聖慮ヲ以テ、天下無罪之域ニ被為遊度

候間、

是迄有罪不可容者ト雖、

朝敵ヲ除之外一切大赦被 仰出候、於国々モ不漏様施

行可有之候、尤向後弥以賞罰嚴明ニ被遊候ニ付、厚

御趣意ヲ体認致シ、行届候様可仕旨

御沙汰候事、

正月十五日

【参照】

大久保利通日記節録

正月十七日

御元服就 御大礼、非常之大赦御達之事、

七八一 新ニ外国トノ和親ヲ結フヲ布告セララル

明治元年正月十五日、大勢ヲ察シ、世変ニ随ヒ、新ニ外

国ト和親ヲ結ブヲ布告セラル、

七八一ノ一

外国之儀ハ

先帝多年之

宸憂ニ被為在候処、幕府從來之失錯ニヨリ、因循今日

ニ至リ候折柄、世態大ニ一変シ、大勢誠ニ不被為得

止、此度 朝議之上断然和親条約被為取結候、就テハ

上下一致疑惑ヲ不生、大ニ兵備ヲ充実シ、国威ヲ海外

万国ニ光輝セシメ、祖宗

先帝之神靈ニ对答可被遊

叙慮ニ候間、天下列藩士民ニ至ル迄、此旨ヲ奉戴シ心

力ヲ尽シ勉勵可有之候事、

但

此迄於幕府取結候条約之中、弊害有之候件々、利

害得失公議之上御改革可被為在候、尚外国交際之

儀ハ、字内ノ公法ヲ以取扱可有之候間、此段相心

得可申事、

正月

七八一ノ二

今度從

天朝此迄之通、条約御取結可相成趣、外国公使へ御布

告ニ相成候ニ付、外国人市中往來之節、無礼不法無之

様、可相心得候事、

正月

右於大坂仰渡、

【参照】

大久保利通日記

正月九日

今早朝岩倉卿^{眞鏡}へ参殿、御紙面御認相成候、九ツ時ヨリ参朝、三條公外国掛、東久世卿同断ノ儀尚亦言上候、今日評議不相決候、暮過ヨリ退散出殿、

(按) 本文ノ評議トハ、外国事件ニ関スル事ナランカ、日記ニハ、評議決セスシテ退散スト見ユルモ、事実ハ本日議定嘉彰親王ヲ以テ、外国事務總裁ヲ兼ネシメラレ、三條議定、東久世参与、岩下・後藤ニ事務取調掛ヲ兼ネシメラレタルナリ、

同日記節録

正月十一日

昼時分参

朝、外国布令就遅引、三條公・岩倉公へ云々言上之處、早速岩下氏今日発足之都合御運相成、後藤ハ明後朝発之賦、三條公ハ先御下坂無之、東久世公御下坂故、外国掛ニテ御取扱有之筈、

正月十七日

外国御布令ニ付、国内御布告被仰付候事、

七八二 東久世通禧各国公使ニ会シ大政復古ノ国書ヲ付シ神戸争闘ヲ判理ス

正月十五日、参与外国事務取調掛東久世前少将通禧及其他外国掛、各国公使ト兵庫ニ会シ、大政復古ヲ報スルノ国書ヲ付シ、又神戸駅争闘ノ事ヲ判理ス、

七八二ノ一
(記)

本日、参与外国事務取調掛東久世前少将ト俱ニ、兵庫運上所ニ至リ、仏国公使レラン・ロツシユ、英国公使スル・ハल्ली・エス・パークス、伊国公使コンド・ド・ラ・トゥール、宇国代理公使エム・フォン・ブラント、和蘭公務代理総領事ド・テ・クラス・ファン・ホルスプロツク、米国弁理公使アル・ビー・フラン・フアルケンボルクニ会シ、大政復古ヲ報スルノ国書ヲ付ス、

七八二ノ二
尚各公使ト大政復古ノ趣旨ヲ応答セリ、其記ヲ載ス、

慶應四戊辰正月十五日、於兵庫勅使東久世前少将殿、在留六ヶ国ノ公使ト御応接之書取、

勅使曰、今日 天皇ヨリ各国へ布告之為ニ参リタリ、

右御演舌有リテ、御布告ヲ各国公使等へ渡サル、

佛公使曰、拙者日本ニ在留スルコト尤多年ナルヲ以テ、

各国之公使ニ代リ、応接センコトヲ願フ、乃曰、自今

天皇御国政ヲ執リ、御全国治平ニ及バ、各国共ニ所

祝ナリ、

勅使曰、 天皇自ラ国政ヲ裁スルニ於テ、固ヨリ全国信

服スルコト論ナキナリ、

各国公使曰、 天皇自ラ政權ヲ執ルヲ以、御政令既ニ全

国ニ及ヒシヤ、亦有司ニ命シ外国事務ヲ司ラシム、何

人カ其任ヲ得タルヤ、

勅使曰、仁和寺宮外国事務總裁ヲ蒙リ、其余京師ニ於テ

(寫影親王)

モ其任ヲ蒙ルモノアリ、且政令ノ事ハ、近日徳川慶喜

反逆候次第アリテ、未タ政令ヲ全国ニ布クニ至ラサレ

トモ、不日ニ追討平定セン、

此間ニ外国事務掛・公卿・諸侯ノ姓名ヲ達ス、

各国公使曰、 御布告ノ文ニ、徳川氏政權ヲ返ス云々ト

云、然ルニ今 勅使ノ言ニ曰、徳川慶喜反逆云々、然

ルニ今日猶内乱中ナルヤ、

勅使曰、慶喜江戸ニ歸リ罪ヲ待ツト云フ、然ルニ未タ其

服従之状ヲ見ス、

各国公使曰、徳川慶喜江戸ニ歸リ、罪ヲ待ツト云、然ル

ニ猶征討セラル、ヤ、

勅使曰、今現ニ使節ヲ江戸ニ遣ス、然ルニ未ダ其返答ヲ

得ス、

各国公使曰、今日指当リ此地ニ一事件アリ、其訳ハ、先

日備前侯(池田茂政)ノ家臣途中云々ノコトアリ、故ニ不得止各国

兵士ヲ出シ、警衛シテ安全ヲ図ル、此ハ總体ノ規則ニ

モナケレドモ、止ヲ得サルノコトナレバ、此処置ハ如

何ナルヤ、

勅使曰、以後日本政府ヨリ此地ヲ警衛スヘシ、

各国公使曰、政府ヨリ御警衛アレハ、如何様事件起リテ

モ、政府引受ラル、ヤ、

勅使曰、固ヨリ然リ、又曰、今日布告ノ 勅書ハ、直ニ

各ノ本国帝王人臣ニ布告セラル、ヤ、

各国公使曰、只今御尋ノ一条ハ、追テ貴答可致ナレド、

前ニ云フ備前ノ事ハ、猥リニ外国人乱妨云々以後、

天皇御親征ノ事ナレバ、必ス政府ニ於テ御処置ニナル

ヤ、

勅使曰、固ヨリ然リ、

各国公使曰、備前乱妨ノ事ニ及候ハ、談スルニモ怒リ堪

ヘザル次第也、況ヤ各国公使ニ対シ、砲発ノ事情等、

全ク文明ノ国ニ於テ有ルベカラザルコト也、

勅使曰、此処置ハ各国ノ公論ニ任シ、且 天皇ノ親裁モ受クベシ、

各国公使曰、備前乱妨之所業ハ、下賤ノ者ノ作業ニモ非

ス、乃チ一大諸侯之大臣、自ラスルコトナレバ、今ハ

外国守衛之兵ヲ解ク、以後日本政府ノ守衛ヲ得レハ、

決シテ右様ノ乱妨有ル間敷哉、

勅使曰、今日当所警衛之事、薩・長両国ニ命ス、以後右

様ノ義決シテ有ベカラス、

此間ニ薩・長ヘ命セラレタル御書付ヲ、各国公使ヘ見セラル、

各国公使曰、然ラバ自後如何様ノコト出来スルトモ、

天皇ノ政府ニ於テ御引受ナルヤ、

勅使曰、然リ、

各国公使曰、此六人ハ六国ノ公使ナレバ、貴國ト和親交

易セシ事幸甚ナレドモ、自後若シ御違約等ノコトアレ

バ、大ニ貴國ノ大事ニ及バン、

勅使曰、固ヨリ然共今日談判スル処ハ、特ニ兵庫港ノミ

ニ就テ云フノミ、横濱其余ノ諸港ハ、未タ政令ノ行レ難キモアランヤ、併シ是等モ、不日ニ 天皇之政府ニ帰スル様アルベシ、

各国公使曰、固ヨリ当今、 天皇御政令ノ行ハル、ノ土地ニ就テ云フ也、又曰ク、今日薩・長侯ニ当地ノ警衛ヲ

命セラレタル事ヲ、市中・村中ニ触ラレタシ、且備前

乱妨ノ事ハ、各国ノ公論ヲ受ケ、 天皇ノ親答アルベ

キノ仰セナレバ、只今直ニ口舌ヲ以テ申演カタシ、近

日ノ中熟考ノ上、書取ヲ以テ申上ベシ、

勅使曰、諾、又曰、以後薩・長両藩ヲ以テ、当地ヲ警衛

スレバ、外国人ノ安全ハ勿論ノコトナレバ、願クハ当地

地在留ノ外国人ヨリモ、日本人ニ対シ乱妨ナキ様、各

ヨリ達セラレタシ、

各国公使皆曰、早速相達スヘシ、

勅使曰、近日日本諸侯之蒸氣船六艘ヲ、外国ヘ押取ラレタルコトハ、イカヨウノ処置ナル哉、

各国公使曰、先日備前乱妨ノ砌ハ、未ダ政府ノ御布告モ

ナキ間ナレバ、先右ノ船ヲ引留置タリ、併今日ヨリ万

事政府ニ御引受トナレバ、早速夫々ヘ返却スベシ、又

曰、東久世卿ニ両三日間ハ、当地ニ在留致サル事ヲ願

フ、其訳ハ各人ヲシテ、安心セシメン為也、

勅使曰、諾、猶此地全權ノ者交代スル迄ハ滞在スベシ、

各国公使曰、先日ヨリ各国ノ公使・商人大坂へ滞在スル

処、彼地變ニヨリテ此地ニ来ル、然ルニ当所ニハ在留

ノ家モ無之故ニ、速ニ帰坂セン事ヲ願フ、猶再ヒ御案

内ヲ可待也、

勅使曰、彼地モ未混雜相止マサル中ノ事ナレバ、追テ此

方ヨリ案内スベシ、

各国公使曰、然ラバ御案内迄待ベシ、然レドモ帰坂ノ上

ハ当地同様ノ御守衛等アルベキヤ、

勅使曰、諾然リ、

各国公使曰、先刻御談判之政令、未行ハレサル開港ノ諸

港トハ、何等ノ土地ナルヤ、

勅使曰、横濱・長崎・箱館ノ三港ナリ、尤長崎ハ、速ニ

処置スベケレトモ、横濱ハ何時ヨリ支配スル事ヲ言難

シ、

各国公使曰、長崎ハ近日ヨリ御所置ニナルナレバ、彼地

ニ住スル外国人へ怪我等無之様ニ、其長官ニ命セラレ

タシ、
勅使曰、諾、

各国公使曰、今日之御応接ニヨリテ、各国公使モ大ニ安

心シ幸甚也、

勅使曰、彼布告之 勅書ハ、直チニ本國ニ送ラル、ヤ、

各国公使曰、諾、速ニ達スベシ、

勅使曰、今日応接スル処ハ先前条ノ如シ、猶貴方ヨリ談

判ノ事アラバ承ルベシ、

各国公使曰、今日ハ先別条申上事ナシ、

勅使曰、今日各国公使ニ面会致シ、甚満足ニ存ス、猶委

細速ニ 天皇へ奏聞スベシ、

七八ノ三

明治元年戊辰正月

佛公使

[Jean Bachez]
モンシユア・レオン・ロツシユ

英公使

[Sir Henry S. Parkes K. C. B.]
サア・ハリ・エス・パークス・ケシヒ

伊太里公使

[Comte de la Tour]
モンシユアル・ロムト・デウ・ラ・トウール

米里堅公使

[R. B. Van Valkenburg]
アル・ビー・フォン・ハルケンブロッツク

字漏生公使

[Max August Saggio Von Brandt]
モンシユア・フォン・ブランド

和蘭公使

[Dirk de Graaf Van Polbroek]
モンシユア・デ・ラ・クラ・ファン・ポルス

ブロッツク

尾州家老 佐枝新十郎

越前同 酒井與三左衛門

肥前同 渡邊善大夫

長州同 國貞直人

土佐同 深尾 鼎

因州同 荒尾 駿河

肥後藩（マ） 木村得太郎

藝州同 三宅萬大夫

薩

右九藩

因州 伊王野次郎左衛門

越前 永田儀平

土佐 森 紀内

長州 品川彌次郎（目次）

藝州 田口太郎

肥前 山田嘉大夫

尾州 青木齊宮

因州 勝部静男

尾張太納言

越前宰相

長州同

土佐少將

【参照一】

島津伊勢日記抄正月十六日

十六日岩下佐次右衛門兵庫ヨリ書状到来、趣意ハ、此節大政返上 朝廷へ御政事奉帰候御布令、都合能相濟、並備前兵隊ト英人混雜ニ及ビ、英人ヲ備前人数三人計致殺傷候一条ハ、追テ書面ヲ以テ可申出トノ事ノ由、先一安心之趣報知候略下

【参照二】

永之助ヨリ左之通ポートイン部屋付へ相届候、別紙之通相認居中半ニ、宮様只今イギリスミニストル、其外諸国ミニストルへ御越相成、備前様一件事済、皆々異人ワルダア引取ニ相成居候間、誠ニく只今ノ事ニテ、大キニ静謐ニ相成様子ニテ、先ハ目出度く幾久敷泰平ノ段、御安心可被下候、別紙取急キ前後ニ成候間、宜御ハナシ可被下候、何レ帰崎ノ上フ々御物語可申上候得共、先ハ穩便目出度、別紙宮様ト相印置ハ、東久世少將ト申御方ノ由、先比長崎表ニテ御尊父様通詞被致候間、右少將様ヨリモ、ポートイン殿能御存之由、定テ其段之儀ハ御承知候半

ト奉遠察候、尤私ニハ存不申候得共、其段ボートイン殿ヨリ御物語ニ御座候間、為御知可申上候、右御方様今日薩州・長州御供ニテ、諸国ミニストルハ御出ニ相成事、速ニ御取計ニ相成由ニ御座候、以後京師ヨリ御支配相成、薩州・長州ヨリ委細兵庫並神戸御支配ニ相成候由御座候、此段荒々為御知可申上候、

一月十五日

永之助

【参照三】

外国新聞紙抄

勅使昨日外国ミニストル方へ御入、今午後御達、是迄采光通タイクーン預リ居候政事、

ミカドニ返リシコト御達、本月四日(千八百六十七年正月)備前人暴発ニ因テ、居留地警衛ノタメ、軍艦ヨリ上陸セシ兵ヲ引カバ、

ミカド旧ニ因テ外国人ト懇親ノ義、沙汰アルカ如ク見ヘルナリ、

此度ハ如此暴人ヲ制スルコト、タイクーンニ勝レルト思ハレル、

今日本首長ノダイミヨウ権門ノ人、合国一致ノ基トナル政府ヲ立ントス、然ハ備前人ノ如キ暴客アリテハ、

国民及ヒ外国人安カラス、右新聞著述中 勅使左之令ヲ出ス、

外国交際ハ最大切ナル故、万般親睦ニモ罷成度

叙慮ニ付、当所通行之者、外国人ニ対シ不法無之様可致候、

東久世少将

千八百六十八年二月八日

【参照四】

岩下佐次右衛門外二名書翰一月十五日付 市来六左衛門宛

兵庫ヨリ岩下佐次右衛門殿・汾陽氏采光通・寺島陶藏殿ヨ

リ市来六左衛門殿へ書状

去ル三日ヨリ八日迄ノ間ニ東兵悉放逐イタシ候事、

去ル十五日兵庫ニ於テ六ヶ国外国公使条約、是迄ノ通

朝廷ニテ御取結相成候様、被仰出候事、

長崎へモ近日鎮台御送り遣ノ筈候得共、何レ御地鎮台

速ニ御手附被成候事ト被察候事、

右今日飛脚船出候ニ付向々御知ラセ申上候、

正月十五日

リ、如何トナレハ、其所置日本一般ノ国民ト交ル所置ニアラズ、大君ノ政府ト而已可交所置ニシテ、万国ノ公法ニ難照、故ニ日本ト佛國トノ公睦ト云ハス、仍之京都ニ在ル帝ト信ヲ結ヒ、互ニ全国ノ親睦ヲ開カネハナラシ、

公使云、然ラハ白山ハ帝ト信ヲ通シ、日本・佛國各其全力ノ公睦ヲ開キ得ルヤ否、

白山云、夫ハ我可出来アル、

公使云、然ラバ若、大名議論而已多クシテ、其業ナラザル時ハ、各国公使中申談シ、始ヨリ交得ル大君ヲ押立、諸大名ヲ斃シテ、以テ日本ノ国体ヲ可立シ、

白山云、我京師ニ行テ、帝ニ建言シ、其上事ナラザル時ハ、公使ノ随意タル可シ、而シテ其時ハ、日本ノ国政ヲ周旋ス可キコト、思止ムベシト云々、

公使云、然レハ、是迄大君ノ為ニ佛國ニ掛合タル書状ヲ可見トテ、悉ク白山ニ見セタリト云々、而テ亦公使ヨリ白山ニ、京ニ行テ日本国事ヲ可建言免書ヲ与ヘタル也、

右ノ内、白山ノ周旋ナラス、大名議論而已ヲシテ国内不治時ハ、各国公使申談シ、大君ヲ助テ大名ヲ斃

シ、日本国体ヲ可立トノ云々、再三クリカヘシ云ヘリト云々、

(按) 當時佛國公使 (Godeau) ロセス幕吏ニ親善ナリ、故ニ三日以降ノ事変アリシ以來、専ラ幕府ヲ庇蔭シテ、本藩及ヒ在京列藩ノ行動ヲ非認スルノ傾アリ、然ルニ佛國人ペーサンハ先ニ佛國博覽會開設ニ當リ、本藩士新納刑部・岩下佐次右衛門等、彼國ニ赴キ相知ル所トナリ、屢々相通シテ好意アリシナリ、曾テ忠義ニ向ヒ、当世ノ要務ヲ建言シタルコトアリ、今寺師宗道日記中所載ノ抄ヲ左ニ載ス、

【参照一】

太守公御上京前白山建言之趣意書

- 一 万事何事ヲ成スニモ、日本ノ國權政務ヲ成スベシ、
- 二 各藩與廢ヲ共ニシ、得失ヲ等フセネハナラン、
- 三 列藩交リヲ深クシ、位ヲ厚フスベシ、
- 四 第一三ヶ条ニ基キ、公論ヲ尽シ、歐羅巴各国ト交リヲナスベシ、

右白山大趣意也、左ニ 朝命ヲ以テ、外国ニ布告スベキ大略ヲ述ブ、

第一ヶ条 我レハ日本國帝王也、大名ハ亦其領國ノ國

主也トイヘドモ、我命令ヲ不用トイフ事ナシ、然ルニ徳川氏自日本国主ト唱へ、外国ニ交リ、我国体ヲ大ニアヤマラセリ、其証ヲ左ニ挙ク、

一 將軍職ヲ差免、

ニ 尔来日本ノ政務ヲ我レ自統スル故ニ、我国ニ報知スベキ事務ハ、都テ我ヲ名サスベシ、伝奏・議奏ヨリシテ是ヲ達ス、

三 我ハ日帝也、大名ハ各其領内ノ太守也、故ニ日本ノ国ノ政務ヲ論スルニ、各藩ノ大名京師ヘ集リ、議事院ニ会集シテ政ヲ議シ、其決議ヲ我ニ問ヒ、然シテ後布告スルナリ、

四 長崎・横濱其他開港地之儀、是迄徳川氏ノ名号ヲ以テ相開候得共、尔来是ヲ我名ニ改メ、開クヘシ、右ノ通我日本政務変革イタシ候上、是迄ヨリモ尚外国トノ親睦ヲ重ンスベシ、

日本政務印

右国帝ノ御直作ヲ伝奏・議奏ヨリ筆記ス、

伝奏

何某甲

議奏

何某甲

右ノ外、当分京師ニ有之候諸侯ノ連名、

何某甲

何某甲

何某甲

右ノ通乍恐申上候間、不益ニ御議論無之、御採用有御座度、左候テ事ヲ談センガ為ニ、英・佛・日本三ヶ国ノ文章ヲ以テ、外国ミニストルヘ布告スベキ事ト奉存候、

白山謹テ書ス、

【参照二】

島津伊勢日記抄一月十日

〔友厚〕

十日、五代才助今朝兵庫ヨリ參承候趣、此節之一条佛ノ白山ヨリ承候趣有之、上坂之趣旨意ハ幕府大政返上之儀ハ、イツレ急速各国ヘ御布告不相成候テハ、只今ニテハ政府ハ日本ヘ無之様ニ候間、何事モ交際之道不相立、片時モ早ク御布令之処奉願トノ趣也、才助ヨリモ同断頻ニ承候間、明日方勅使被相立賦候間、猶又今日三時限りヲ以テ京都ヘ向越、同人ヘ相達候略下

七八四 薩・長兵庫外国人居留地警備ヲ命セラル

正月十五日、本藩及ヒ長州藩ニ、兵庫外国人居留地警備ヲ命セラル、

(記)

正月十一日備前藩兵砲発ノコトアリ、物情静ナラス、本日東久世前少将外国公使ニ会谈アリ、是ニ於テ兵庫警備ノ阿波藩兵ヲ免シ、本藩及ヒ長州藩ニ警備ヲ命セラレ、外国人居留地通行人ヲ嚴ニ戒飭セラレタリ、

薩州

此節外国御交際之儀、格別御大切之場合ニ付、專信義ヲ本ト被遊候

御趣意ニ就テハ、外国人居住地通行之節、彼へ対シ無礼不法之振舞無之様、嚴重ニ取締可致事、

正月十五日

東久世前少将

同時同文ヲ以テ長州藩ニ達シ、阿波藩へハ口達ヲ以テ、兵庫表警衛之儀被免、人数之儀ハ大坂表ヨリ御達次第、進退可致候事ト達セラレタリ、

七八五 藩吏備前藩士神戸争闘ノ措置ヲ報告ス

正月十五日、備前藩士神戸争闘ノ措置ヲ藩地ニ報ズ、

(記)

岡山藩、攝津西宮警戒ノ命アリ、正月十一日家老日置帶^(忌)刀ノ從兵、神戸駅ヲ過ルニ当リ、英国人人数人從兵ノ列ヲ犯ス、從兵発砲三人ヲ傷ク、英国公使パークス急デ自国軍艦ノ水兵ヲ卸シ、又米国及ビ佛国軍艦ニ謀シテ、俱ニ兵ヲ上陸セシメ、備前兵ヲ襲フテ、其屯所ヲ奪フ、備前兵遁去レリ、外国兵ハ又駅ノ両口ヲ扼シ、佩刀者ノ經過ヲ絶チ、凡諸藩洋式船^{字和島其他五六藩船}港内ニ在ル者ハ、悉ク之ヲ勾留シテ出口ヲ許サズ、此事大坂ニ報ジ来レリ、時ニ本藩士島津伊勢^(広兼)・岩下佐次右衛門^(方平)・吉井幸輔^(友亮)・寺島陶蔵^(宗則)・五代才助^(貞豐)・伊地知壯之丞等胥議スルニ、今日ノ事態外變ヲ開クガ如キ虞アルハ、国家ノ重事ナルヲ以テ、此際ハ宜シテ万国公法ノ通義ニ照ラシ、備前藩ヲシテ過ヲ謝セシメ、殺人ヲ出シ、償金ヲ払ハシメン、同藩頑冥、眊サス之ニ応ゼザレバ、朝裁ヲ仰キ、其罪ヲ声ラスベシトノ議ニ決シ、即日寺島・吉井兩人ヲ兵庫ニ赴カシメテ、周旋スル所アラシメ、英国訳官サトウニ面シテ謀ル所アリ、

事容易ニ解ケス、英国公使ハ日置ノ従人ヲ捕ヘ、事実ヲ
訊ヒ、痛責ノ書面ヲ付シテ、之ヲ放チ告ケシメ、事態不
穩ナリ、尚之ヲ京都ニ報シ、併セテ藩地ニ報セリ、

【参照一】

英公使パークス傳節録

日本松平備前守家臣池田伊勢・日置帶刀兩人神戸通行
之節、右兩人供之者ヨリ、無故鉄砲器ヲ以テ外国人ヲ
襲フ、如何ナル故ニ討哉、早速申訳罷出可申、若シ各
国外国ニモ満足スル様申訳於不相立ハ、弥外国ニ対シ、
干戈ヲ動スニ至ルト見定メ、尚外国ヨリ所置ニ及ビ候
ヘバ、唯備前藩ニ不限、総テ日本国中之大笑ト可相成
事、

【参照二】

西郷・大久保宛岩下方平書翰

御応接之次第ハ、昨日大坂迄申遣置候間、御承知被下
候半、都て御都合克參安心仕候、今日軍艦御見物にて
候、明日ハ備前藩御所置之一件と、大坂江参度との談判
致度、且運上所等之御談合申上度、二字（特）より御出被下
度との事ニ御座候、他ハ為差事も有之間鋪候得共、被
備前一条ハ甚憤居候体故、定て嚴敷可申立と相考申候、

何様申立候ても、否ハ不被申時機故、断然之御所置無
之てハ、不相叶事ニ候間、御尽力可被下候、今夕後藤
も致着、備前之論も承候処、甚不取留次第、此上違背
いたし候ハ、急度被仰付度事ニ候、

一当地取締等無之候ニ付、則東久世卿江申上、市中町々
へも彼是申渡等致置候、暫之間ハ外国掛より兼務不致
候てハ、人民安堵ニ致兼可申候、追々奉行ニても被命
度事ニ付、神戸運上所掛も無之ては不相成故、中路権
後子延年
ト改ムを被仰付候てハ、いか、可有之哉、筆算も達
者之者ならてハ、不相成欤と存申候、早々御吟味可被
下候、当地も多人數入用有之、五六輩にてハ相濟丈ニ
無御座候、後藤も明日ハ出立上京致と申事にて候得は、
大坂も人數無之てハ不相成候間、御見合早々被仰付候
様、御尽力可被下候、

一備前之所置ハ

朝廷より暴発之仕方ヲ御謝被遊、発炮令を下候者ヲ斬
罪ニ処すへしとの事ニ御座候、尤異人の目前にて、為
へしとの事ニ付、只今書面を以申来候、

一長崎ハ大村侯へ此涯專任被仰付、万一先奉行等暴挙之
節ハ、肥後等より援兵差出候様被仰付度候、尤大村侯

ハ上京相成候間、先京地平和ニ付、長崎表御急務之故を以、早々罷下候様被命、

天盃ニても被下候御都合相成候ハ、可宜軟と存申候、おのつから後日、公卿方より長崎へ御出張ニも可相成候得共、即今其御運ひも六ヶ敷候半と存申候、

一神戸は薩・長ノ兵ニて相固、兵庫ハ阿州へ警衛被仰付度吟味仕候、

先右旁申上度、如此御座候、以上、

正月十六日

岩下佐次右衛門

西郷吉之助様

大久保一藏様

〔大久保利謙氏所蔵本にて校訂〕

【参照三】

木場傳内・伊地知貞馨ヨリ家老へ書翰

備前之儀ハ、此節戦争前ヨリ西之宮警固

朝廷ヨリ被仰付置候付、右場所江兵隊繰出ニモ御座候

哉、去ル十二日備前家老兵隊引列レ、兵庫神戸村通行

之処、何等之訳ト不相分、英人ヲ三人及刃傷候付、英

人共憤怒、船ヨリ兵隊ヲ繰出シ戦争ニ及、備兵敗走、

山手へ逃登リ行衛相知不申、夫ヨリ異人共兵庫街道取

切、往来不通、尤異人ヨリ宇和島其外四五藩之蒸艦、

兵庫へ碇泊イタシ居候ヲ取押、此上ハ日本国ヲ敵ト存候趣ニテ、大變到来之由、同夜備藩ヨリ吉井幸輔へ為

知来、折柄佐次右衛門殿・伊勢殿ニモ御下坂相成居、白山・五代才助・寺島陶藏等モ罷居申候付、御評決之上幸輔ニハ寺島同伴、当日兵庫へ異人為鎮撫方被差越、

十三日夜中、東久世卿・佐次右衛門殿兵庫へ御下向相成、其後相分不申候、尤御所置振之儀、佐次右衛門殿

其外御内評之趣ハ、万国公法砲発刃傷何レニテモ、最初手ヲ出シ候方非分ニ相成事候間、備前ヨリ暴発ニ相

究候ハ、下手解死人並償金差出候様可取計、若備前承知

不致候ハ、

朝廷へ申上、追討之上伏罪為致、異人へ

皇国公平之処置ヲ布告イタシ候様有之候ハ、却テ異

人ニモ感服イタシ、

皇国之御為モヨロシカルベクトノ御内評ニ御座候、何

分當時柄之儀モ有之、異人容易ニ聞入候事ニ無之由、

異情ニ通シ候方々申事ニ御座候、備前ハ近来訳モ分ラ

ス攘夷説相立候モノ有之由御座候間、此節之戦争承及

イラダチ候事ニテモ可有御座ヤ、異人ヨリ無礼共、備

前藩ヨリ乱妨共諸説紛々相分リ不申候、委細之儀ハ、

兵庫ヨリ御問越可有御座奉存候得共、承及候形行卜御届申上候、以上、

正月十五日

伊地知壯之丞

木場常生傳内

御家老中様

【参照四】

大久保利通日記節録

正月十二日

備前戸倉修理之介ヨリ相談承ル、左ノ大意

昨十一日カ、備前之儀兼テ西之宮警衛被仰付、家老日置帯刀出張トシテ兵庫通行之節、夷人行列ニ立障リ、再三制止候へ共不聞入押入、不得止及切害候由、然処彼数百人銃隊ヲ以テ押シ来、砲発イタシ候云々トノ趣相達、甚及心配、内談トノ事候得共、樋成報知ニ無之トノコトナレバ、兎角確証ノ報知有之候上、尚御談シ可申上段及返事候事、退散後出殿、

正月十三日

備前兵庫ニ於テ夷人切害一条、従大坂モ申来リ、備前方ヨリ十人位逃去候夷人へ砲発イタシ、夫ヨリ夷人大ニ激シ、銃隊ヲ以砲戦ニ及候由、尤夷人ハ英国ノ由、

(大久保利通日記(東京大学所蔵)にて校訂)

【参照五】

島津伊勢日記正月十六日

岩下佐次右衛門兵庫ヨリ書状到来、趣意ハ此節大政返上 朝廷へ御政事奉帰候御布令、都合能相濟、並備前兵隊ト英人混雑ニ及ヒ、英人ヲ備前人数三人計致殺傷候一条ハ、追テ書面ヲ以テ可申出トノ事ノ由、先一安心之趣報知候、尤右ニ付白山事仏國人ベハ、此内ヨリ内々尽力之次第モ有之候ニ付、右之趣咄聞置トノ事故、拙者旅宿へ白山可参吳申遣候処、田中静州同伴ニテ参候ニ付、右之趣申聞候処、ソレハ能都合ニ相運ビ、致安心候トノ事ナリ、京都へモ岩下氏書状相添、西郷吉之助・大久保一蔵宛ニテ問合越シ、達御聴候様申越候事、

【参照六】

松永清左衛門書状節録

兵庫ニテハ備前藩英人殺害、是以異変之第一、未相鎮内外一同ニ相乱レテハ、困入タル事ニ候、今晚即便仕立有之候ニ付先ハ左右迄、類中へ別段不行届、昼夜御屋敷へ赤目ヲ張り候体ニ御座候間、其段可申置候、尚吉左右可申遣候、謹言、

正月十五日

松永清左衛門

宿許へ

【参照七】

池田家記

丁卯十二月攝州西ノ宮警衛被仰付候ニ付、右警衛家老
 日置帶刀へ申付、帶刀儀戊辰正月四日、同勢召連岡山
 出立、十一日攝州神戸町通行之砌、先手共既ニ外国人
 居留地へ差掛リ候折柄、外国人兩人、横合ヨリ猥リニ
 同勢之中へ割込候ニ付、種々相制候得共、聞入不申候
 処ヨリ、無抛及刺撃、遂ニ発砲ニ至リ、彼ヨリモ兵隊
 繰出、一時持合候共、素々不慮之事ヨリ差起候儀ニ付、
 帶刀儀ハ山手へ引揚物分レニ相成申候、

【参照八】

輦下日載抄

片野十郎兵庫表ヨリ浪華帰着、過ル十一月兵庫罷越候
 節、於途中外国人四五名出来リ、飛轎ヲ要シ、左右ヨ
 リヒスヲ押付、何人ニ哉ト相尋候故、長州ト相答候処、
 長州ナレバヨシト申、直様引連サトウ英國通ノ所へ参候
 処、薩州吉井輔モ参居候付、種々談判致候得共、何分
 備前暴動甚以不相濟、元來行軍へ失礼致候ニセヨ、佛

蘭西マトロスノ事ニ付、其者ヲ如何様致候トモ、異論
 無之候得共、其跡ニテ各国留館へ銃撃致候段、何共不
 相心得、今般日本政府改革ノ趣ニ付テハ、決テ破約ノ
 国論ニ相成候故ト推察致候トノ事、右ニ付兵庫東西へ
 各国ヨリ守兵ヲ置キ、砂囊ヲ以テ砲台ヲ築キ、猶藩
 在港ノ軍艦五六艘モ悉ク器械取拵ケ、取巻置候勢ニテ、
 猶又彼等申分ニハ、国論変換ニ付テハ、是迄長州トハ
 懇親致居候得共、今日ヨリハ全ク敵ト相心得トテ、林
 孚寫一等モ大ニ疎外候模様ニテ、何分唯近付勢ニ有之、
 其日ハ片野モ一応引取候由、必竟彼等ノ申分ハ各国政
 府改革ノ事有之候得ハ、一時ヲ不待闕国布令、万事処
 分致候事ニ候処、徳川氏政權返上以後、既ニ数十日ニ
 モ相成、外国へ為何儀モ無之央、此度ノ暴動ハ国論変
 換可知トノ事ニテ、此度薩・長二藩守衛ト申候テ参候
 トモ、薩・長ヨリ守衛ヲ受候道理無之、何モ日本政府
 ヲリノ御仕向ナラハト申、一向引受不申ニ付、皆々手
 ヲ措候、其後東久世様 勅使トシテ御下向相成候故、
 各国人モ大ニ氷釈、各国ヨリ兵隊ヲ出シ御迎へ、応接
 所へ引受御応接ニ相成、天皇ヨリ云々ト被仰候処、
 公使等悉ク帽ヲ脱シ、立テ礼ヲ致シ、前ニ録シ有之通

リ御応接相済、各国公使等余程脱帽致シ、楽ヲ奏シテ御歸リヲ送り候後、サトウ等咄ニ、兼テ徳川役人共ヨリ聞及候ニハ、公卿ト申ス者ハ大抵愚ナリト、然ルニ今日ノ応接ハ、日本へ来リシ已来始テ如此断然タルヲ觀シナリトテ、甚悦ヒ居候由、十郎談話ニ有之候事、

【参照九】

英國公使パークス傳抄

備前藩ノ争事

將軍大坂ヲ退去後、大坂ハ無政ノ状ニ陥レリ、故ニ外國使臣及住民ハ神戸ニ退キ、新ニ兵庫居留地ヲ開ケリ、此位置ハパークス公使ノ撰定セシ処ニテ、現時ハ之ヲ非難セシモノモアリシガ、幾ナク他ニ比ナシトノ実証ヲ認ムルニハ及ヘリ、

翌日備前藩ノ一隊、兵器ヲ携ヘテ神戸市ニ着船ス、上陸街上下ニ居レノ警蹕ノ声ヲ為シテ通行ス、邦人ハ皆命ニ服セシモ、外人ハ之ニ応セサリシカバ、兵隊ハ直チニ発銃シテ、之ヲ追ヘリ、此時偶々パークス公使居留地ヲ檢分シツ、アリシガ、此報ヲ聞キ、迅刻ニ公使館守衛兵舎ニ駆付ケテ命ヲ伝ヘ、第九中隊ノ一枝隊ニ、佛・米ノ海兵若干人ヲ差添ヘテ之ヲ派遣シ、直ニ備前

兵ヲ追ヒ、其場所ヲ占領シタリ、幾ナクシテ備兵ノ隊長ハ、内外官吏ノ面前ニテ、監督ノ不行届ヲ謝シテ屠腹シタリ、外官ノ一人ハ公使館書記官ミツドフオールド氏ド氏ニ、ビ、フリーマンミンナリシ略下

【参照十】

外國新報抄

於兵庫備前ト異人混雜書

一千八百六十八年第二月四日火曜日、同勢百五十人ニテ、九ツ半ノ頃乗物官道ヲ通ル、之ヲ尋ルニ、肥前大村侯長崎ヨリ登坂之由、行列甚靜謐也、次ニ来ル者ハ大ニ是ト異也、午後直ニ日本人百五十人計、鎗・ライフルヲ以テ固メ、且小野戰砲ヲ曳テ、兵庫ヨリ神戸ニ入ル、此中一人奇麗ナル者、高官ノ者ト見ヘタリ、騎馬之士ハ、備前ノ家臣ノ家来池田伊勢也、又一人ハ日置帶刀也、本陣凡六百兵庫ニ在リ、又人数若干里余後ニ在リ、先陣神戸ノ官道ヲ通ル比、コルリンスト云フ外國人立テ穩ニ之ヲ見テ在ル時、下ニ居レノ声ヲ聞キ、土人皆地ニ膝ツク、役人コルリンスノ立タルヲ見テ、一人来リテ令ヲ繰返シ、銃口ヲ以テ彼ヲ牆ニ圧ス、然レドモコルリンス逃去タリ、役人又シルハルリ(Sir Harry Parkes)

クスノ騎兵二人、日本僕一人従フテ、徒ニテ銃ヲ携ヘズ在リ、役人カノ僕ヲ引止メ、二人ノ外国人ハ兵卒ナルコト、彼ハ僕人ナルコトヲ聞、銃ヲ僕ノ腹ニ突当テ引金ヲ引タレドモ、幸ニ火移ラズ、僕逃レ去タリ、佛水手二人、ヘイトリーリニサルノ家ヨリミンガルドノ店ニ行キタリシニ、行列ノ通り終ルヲ待ツコトヲ欲セズ、行列ヲ横ギリテ通りタリ、家臣ノ家来馬ヲ飛下リ、手ヲ以テ下知ス、土人皆膝ツキ、鎗ヲ携フル者、鞘ヲハツシ、佛水夫ノ一人ニ逼リ、殆ンド之ヲ刺ントス、一人ノ水夫手ヲ以テ鎗ヲ握リ、疵ツキナガラ友ヲ救フテ遁ル、日本人銃ヲ發放シ、差別ナク外国人ヲ見テ放発ス、然レドモ、幸ニシテ外国人死スルモノ二人ニ過ギス、佛水夫一人傷ヲ被ムリ、合衆国方ネイダ船ノ水夫年十八肩ニ銃丸中リ、昨日迄ハ之ヲ抜クコト能ハス、此放発中シルハल्लीパークス護卒一人従ヘテ在リシニ、銃丸数度近ヅキタリ、パークスコンシユル館ニ行テ事件ヲ告ケ、外国人騒グ、役人列ヲ離レテ放発ス、一人ノ銃丸覘ヒ高ク、外国旗ヲ撃カト思フバカリ、又或外国人白刃ノ鎗ヲ見テ怪シク思ヒ、走リテ其朋友ニ告クル、此ニ於テ風聞諸方ニ広マル、

英コンシユル館ヨリ合図アリ、リウテナントブラツドシヨウ、リウテナントブリウス第九ノ部兵ヲ卒シテ、居留地ニ駈来リ、二隊ニ分レ、ブリウスハ官道ヲ下リ、ブラツドシヨウハ大坂街道ヲ進ム、一里バカリ進ンデ日本兵ニ追及ブ、日本兵返シ戦ヒ、暫シテ小部分ニ分レ、山ノ方ヘ逃去リタリ、英軍ノ左ニ亞・佛海軍アリ、シルハल्लीパークス騎兵ヲ以テ日本兵ヲ追ヒ、小野戦砲二門ヲ奪フ、此地英ハ上陸、^{〔時カ〕}亞兵ト共ニ日本兵ヲ追フ、日本兵余程狼狽セシト見ヘ、荷物打捨アリ、陣笠・鞋マデ遺シタリ、外国兵数時間徘徊シタレドモ、敵ニ出会セスカーベ^{〔船名〕}ニ返ル、カーベノ一方ニ在リシ備前本陣、翌朝二時頃裏路ヨリ近キ山ニ遁レタリ、今日松平備前守家臣池田伊勢・日置帯刀、カーベ通行之節、其従者サシタル事件ナク、鎗・鉄砲ヲ以テ外国人ヲ殺傷セリ、由テ早々来リテ次第申聞カンコトヲ欲ス、若此罪償ハズンバ、各国ノ敵タルベシ、此儀只備前一国ニ係ルニ非ス、日本ノ迷惑トナルベシ、右千八百六十八年第三月四日、兵庫ニオヒテ各国ミニストルヨリ出ス、

七八六 朝廷攝津・河内封印米庫ノ解禁ヲ命ス

正月十五日、朝廷攝津・河内封印米庫ノ解禁ヲ命セラル、

(記)

(攝津高槻城主) 永井日向守諱 旧幕府攝津・河内領地郷藏ニ貯ヘシ米穀、

先キニ官軍大坂ニ入りシ際、本藩及ヒ長州藩ノ分捕トナ

リ、封印ヲ施セシカ、戦時兵燹ニ罹リタル淀・八幡・橋

本等、市・在ノ救米トシテ解禁ヲ達セラレタリ、

薩州

長州

別紙永井日向守領地之内、郷藏両藩ヨリ封印付ニ相成
候趣、右郷藏ニ有之候内、米千五百石淀・八幡・橋本
辺へ御救米御用ニ相成候間、封印相解可引渡候事、

正月

覚

- 一米百三拾石 摂州嶋上郡廣瀬村
- 一米七拾四石 東大寺村
- 一米百二拾七石 宮田村
- 一米七拾七石 奈佐原村
- 一米二拾七石 宿名村

一米六百石

富田村

一米百二拾石

河州茨田郡走谷村

一米拾二石

枚方村

一米拾七石

泥町村

一米八拾石

三矢村

一米四拾石

岡村

一米二百六拾八石

出口村

一米四百九拾三石

中振村

一米二百八拾五石

伊加賀村

一米四拾七石

摂州嶋下郡澤良宜濱村

一米六拾二石

穂積出村

一米五拾二石

新在家村

一米二百二拾八石

一律屋村

一米百五拾九石

嶋村

一米二拾四石

鶴野新田

一米三拾九石

乙辻村

一米百拾九石

小坪井村

一米五拾八石

太中村

内 米三千百三拾八石

米千五百石 此度御用米可相成分

殘米千六百三拾八石

右之通御座候、以上、

永井日向守家来

鈴木治三郎

七七八 九州旧幕領処分ノ措置ヲ藩地ニ報ス

正月十五日、九州旧幕領処分ノ措置ヲ藩地ニ報ス、

(記)

大坂在邸ノ藩吏胥議スルニ、上国戦後ノ措置着々支障ナク、大ニ朝威ヲ觀スルモ、九州地方旧幕府ノ所領管轄ニ至テハ、未タ人心ノ帰嚮モ定マラス、建武足利氏ノ類例アルヲ以テ、豊後日田・長崎・天草・穗北(宮崎県)所在ニ警備兵ヲ派遣シ、不慮ヲ鎮メ、武器金穀ヲ收ムルノ措置アラシムベシト決シ、之ヲ藩地ニ報セリ、

七八七ノ一

徳川・會津叛逆間モナク大敗走、難波城遁逃、右両国

朝廷之 命下ル、(影親王)征討將軍宮御下坂、姫路・高松・大

垣・松山之四藩賊徒へ致党与候訳ヲ以、追討被

仰出候儀ハ、京都表ヨリ御届相成候通之事ニテ、当分

ニ至五畿内其外、追々反正帰降之勢ニ成立候、当所ハ御国・長州ヨリ諸方へ掛ケ手廻シ、徳川又ハ五藩武器・

金銀・米錢等ハ取調、薩州・長州分捕、或薩長改ト蔵

々其外品々へ致張紙候事ニ御座候、古今勢ハ大ニ相異

候得共、足利尊氏大敗走、九州へ駈下リ、再ヒ致東上

候類例モ有之、九州へモ徳川領過分有之事故、油断ハ

不相成事ニ候間、第一豊後之日田、次ニ長崎・天草・

穂北辺へ、二小队ツ、二頭立候者一兩人ツ、被差添、

早々被差出、反正之可否承り届、若シ不服ニ候ハ、

即時ニ鎮撫之御処置有之、武器・兵糧・金銀・米錢ハ

封印之上、薩州分捕夫者改ト申札相打候様御座候ハ、

如何御座候哉、尤当所之振合通ニテ、金銀・錢・武器

並兵糧・儲米ハ

御国分捕ニ相成、年貢金等ハ改札相打候迄ニテ、取締

之道被召付何様可有御座哉、此等儀ハ自ラ御評決相成

居候事ト奉存候得共、二百里外懸隔之事故、情実難相

通儀モ可有之候間、爰許評議之趣急飛脚ヲ以テ可伺上

趣旨、伊勢殿ヨリ承知仕候、尤当所ハ都テ長州ヨリ先

ヲ被致、大ニ手後レ相成候ニ付、

御国分捕ト些少之事ニテ、長州ハ何十万金云々分捕ニ

テ、手廻之程中々難及御座候、御油断御座候テハ、長藩ヨリ手ヲ伸シ可申候間、若哉マタ御手相付居不申候ハ、片時モ早ク御仕掛相成度御儀ト奉存候、此段早々奉伺候、以上、

辰正月十五日夜

木場 傳内

伊地知壯之丞

種久武
右衛門様
小松清康
帶刀様
川上久齋
龍衛様
町田久慈
内膳様

七八七二
同月二十七日、家老桂右衛門既ニ警備ノ措置ニ及ベル旨ヲ回報セリ、

徳川征討付、其地之形勢旁評議之形行、去ル十五日付ヲ以テ申越ノ趣相達、尤之至ニ候、於爰許モ最早評決之上、長崎ハ勿論、日田・天草等ヘモ夫々致手当、折角無手拔様、公平之致取扱事ニ候、今日豊瑞丸出帆差掛之儀故、此段大頭迄早々及返答候、已上、

辰正月二十七日

桂 右衛門

伊地知壯之丞殿
木場 傳内 殿

七八八 附録英公使老中ト条約履行ノ当務者ヲ応

答ス

正月十五日、英国公使徳川氏老中ト条約履行ノ当務者ヲ応答ス、

(記)

英国公使館書記官書ヲ徳川氏ニ贈リ、条約履行ノ当務者ヲ質問シ、併セテ兵庫・大坂ニ於ケル条約違背ノ処分ヲ質問ス、老中小笠原壹岐守三日以降ノ情況ヲ陳ベ、永世之盟ハ、一旦之成敗ヲ以テ忽ニセザル旨ヲ答フ、其書ヲ載ス、

以手紙致啓上候、然ハ一昨十三日貴国公使館書記官シ
[Gentry, 1800]
ドニー・ロコック氏、閣下之名ヲ以テ会晤致候処、云々被申聞候趣有之、其上同氏ヨリ書翰ヲ以テ如斯後、女帝陛下之ミニストルハ、条約遵奉之事ニ付、誰ト引合ニ可及哉、且兵庫・大坂ニ於テ条約違背之事アラバ、誰ヘ訴ヘ出デ、誰ヲ以テ其責ニ任ズベキヤ等、疑問之

条々承知致シ、則チ閣下へ御答ニ及ビ候、一体条約ノ趣意ヲ以テ外国諸般ノ事務ハ、我客歳十二月申、於大坂城 大君殿下ヨリ閣下へ御演述被為遊候通ニテ、相替候儀無之処、〔島津茂久〕松平修理大夫家来共、国内変革之際ニ乗シ、京師ニアリテ上下ヲ鉗制シ、専縦自恣ノ挙多ク、天理ニ悖リ、民心ニ戾レル事不少ヲ以テ、其罪状ヲ数へ、

御門ニ奏シ、在京奸悪ノ徒ヲ除キ、名義ヲ正シ、曲直ヲ明ニシ、天下之公論ヲ採テ生民ノ自主ヲ佐ケ、国内不易ノ基礎ヲ建立セント計リシ次第ハ、已ニ御承知之事故縷述不致候、扱右之訳ヲ以テ、

大君殿下上洛ノ為メ、其先供ヲ前發セシメシ途中、松平修理大夫家来共差拒ミ、発砲セシヨリ交戦トナリシ処、我兵ハ事不意ニ起リ、地勢之利ヲ失ヒシ故、竟ニ勝利アラスシテ退却シ、暫ク大坂ヲ引払テ紀州ニ入り、何レニモ奸兇ノ徒ヲ斥ケ、其地ヲ鎮撫致シ候迄ハ、同所ノ義ハ貿易通商出来兼候間、閣下ニモ其段御承知、可然御処置有之度、兵庫ノ儀ハ各国御同僚ニテ、御引請御座候事故、公正之御処置ニ御任セ申候、抑々条約ヲ変シ候儀ハ、不容易重件ニテ、一旦之成敗ヲ以テ、忽

永世之盟ヲ渝へ、曲直之理ヲ論セスシテ、速ニ不朽之信ヲ破リ候儀無之段ハ、是迄之親睦ニ対シ、毫モ疑ヲ容レサル処ニ候得ハ、閣下ニモ御懇親之意ニテ、正大之御処置可有御座儀ト存候、此段可然御推察有之度、右御答可得御意如斯御座候、以上、

正月十五日

小笠原壹岐守

シエル・ハルリー・エス・パークス・ケ・シ・ビ

閣下

七八九 親王ヲ三公ノ上ニ班ス

正月十六日、親王ヲ三公ノ上ニ班ス、

(記)

旧例親王ノ座次ハ、三公ノ次席タリシモ、名文ノ顛倒ナリトノ議起リ、又官制更新、三公ニ代テ総裁ヲ置キ、有〔織仁親王〕栖川宮総裁ニ立タレタルヲ以テ、遂ニ旧制ヲ改メラレタリ、

自今親王 宣下相濟候方ハ、座次可為三公之上候事、

但尚追テ可被改儀モ有之候得共、方今先如之、

一親王・大臣任職之輩、八景間可為參入事、

一親王・大臣、麝香間可為參入事、

一是迄非大臣ニシテ麝香間參入之人々、自今以後内々

番所小藩勤仕可有之事、

一牛車 宣下相濟輩、於宜秋門壇上下乘、 宣下無之

人ハ、於檜垣外下乘勿論之事、

一雖親王・丞相、自今陪膳可為非藏人事、

一礼節之事、

諸家一同同様、可因其人之官位事、

七九〇 島津忠義參朝大礼ヲ賀ス

正月十六日、忠義參朝 大礼御加冠ヲ賀シ、物ヲ獻ス、

(記)

正月十五日、御元服ノ大礼ヲ行セラル、(十六日)本日百官參賀ス、

忠義衣冠、未刻八時乃チ參朝、岩倉侍從藩庁通牒ニ議定岩倉侍從トアリ、岩倉副總裁ノ謂カ

ニ就キ賀儀ヲ上言セリ、又大宮御所ニ參賀シ、御取次岡

本左兵衛尉ニ就キ、賀儀ヲ上言セリ、又紫宸殿・清涼殿

ノ御飾物拝見ヲ許サレ、申半刻七半時乃チ帰邸セリ、

又參賀献上品ハ、前ニ参与役所ヨリ其定式ヲ達セラル、

七九〇ノ一
就

御元服

禁中へ

太刀 一腰

馬 一匹代

公卿ハ 銀三枚

殿上人ハ 銀二枚

右来十六日參賀献上可有之候事、

但

准后御方ハ献上物ニ不及、參賀ハ可有之事、

参与

正月十四日

(徳川慶勝)尾張大納言殿

(松平慶丞)越前宰相殿

(島津茂公)薩摩少將殿

(浅野茂敷)安藝少將殿

(山内豊範)土佐少將殿

(鎌久)細川右京大夫殿

役所

追テ廻達之後、御返却可有之候也、

七九〇ノ二
同日忠義參賀献上品ハ定例ニ倣ヒ、奉獻セリ、

御太刀 一腰

御馬代銀二十枚 一匹

以上 薩摩少将忠義

七九〇ノ三
正月二十九日、藩老参賀ノ次第ヲ藩地ニ報ス、

主上就

御元服、

禁中へ去ル十六日参

賀、御太刀・馬代献上可有之旨、御達可有之旨御達有

之、当朝別紙御目録之通御献上ニテ、

太守様御事、同日未刻比、御衣冠ニテ

御参

内、議定岩倉侍従様へ御謁御祝儀被仰上、

准后御殿へモ

御上リ、公卿上ノ間ニテ御取次岡本左兵衛尉殿へ御謁、

是又同断被仰上候、右付

中将様於御国許御承知之上、御祝儀且献上物之儀承緒

候処、御重役御使ヲ以テ、参与衆へ被仰上、御献上物

ハ

太守様御同様之旨、承得候段申出候ニ付、相糺候処、

弘化四年

御即位之節、其許ヨリ入來院平馬御使者差立候筋ニ相

見得、此節之儀、爰許詰合番頭之内へ御使者勤被仰付

度、奉伺候処、其通被

仰出候付、御右筆頭へ被相達御書等被差越候ハ、同

積之上被差出候様取扱可仕候、都テ之書附相添、此段

申越候条、

中将様可被達

御聴候、以上、

辰正月廿九日

關山(金生) 糺

島津圖書殿

桂 右衛門殿

川上龍衛殿

町田内膳殿

七九〇ノ四

三月十五日ニ至リ、藩地家老ヨリ回報アリタリ、

(本) 本文

中将様達

御聴、御右筆頭へ相達、別紙御書御案文之通、差越候

間、同積之上、御使者勤へ申渡、被差出候得共、何分被取計候テ可有之候、別紙扣置、此旨及御返答候、以上、

三月十五日

島津圖書

桂 右衛門

川上 龍衛

町田 内膳

關山 糺殿

(按) 本文トハ、前項關山糺ノ通牒ヲ謂フ、別紙御案文

トハ中将久ノ賀表文ナランカ、今之ヲ迭ス、

【参照】

大久保利通日記正月十六日

一昨日御大札ニ付今日君侯方御参賀、 太守公御参

朝 紫宸殿 清涼殿 御飾物御拜見被為在候、

一巳刻比参

朝、下参与中同断、 御飾物拜見被仰付候、

正月十六日、西郷・大久保兩人当今ノ情況ヲ藩地吏僚ニ報ス、

(記)

西郷吉之助・大久保一蔵、本日日出立ノ飛脚ニ託シ、当今ノ情勢ヲ詳ニセル書翰ヲ、藩地蓑田傳兵衛^{御用}ニ致シテ、当務ヲ報セリ、

七九ノ一

中将様益御機嫌克被為遊御座、恐悦奉存候、於爰許

太守様御機嫌克被為遊御座、御同慶奉存候、去ル九日

高崎^{正國}左京被差下候后、格別相変候儀無御座候、賊徒華

城落去ニ付ては、外国御布令急務之事件故、三條卿・

東久世卿・宇和島侯外国掛被仰付候、東久世卿御滞坂

中故、宇和島侯・佐次右衛門殿・後藤下坂相成、未談

判之次第ハ相分不申候、

一去ル十二日依 召

太守様 御参

内被為 在候処、今般就御軍功格別之 御褒賞被為蒙、

且被為拜

天顔、於

御前 御劍一振 御拝領被遊、戰死之者ハ御金五百兩

被下、尚設一社祭祀可被仰付

七九一 西郷・大久保京地ノ情況ヲ報告ス

思食候段、不容易被為蒙

仰、御冥加至極御同慶奉存候、外長・藝・因・藤堂・

土州等戦争ニ及候藩ハ、無差別同様之

御沙汰ニ御座候、尾・越・宇和島侯等、其外 官軍ニ

属候人数差出候処ハ、夫々ニ被賞申候、

一 今日ニ相成候処、

官軍之勢ひ盛大相振、賊徒ニ与ミし居候大垣・宮津・

松山等之藩、

王事ニ勤勞せん事を愁訴いたし、夫等之者ハ先鋒等被

命、実行を挙させ、御許容可被為 在

朝議ニ御座候、土藩初之処も大ニ模様ヲ変し、豫州松

山一手ニ追討被 仰付度、頻ニ内願ニ依、松山・高松

追伐被 仰付候時宜ニ御座候、藝州も備中松山同断ニ

被 仰付候、後藤ニは外国掛にて、此内下坂之儀ハ頻

ニ御断申出候得共、此度ハ進んで下坂いたし、実ニ勢

ひハ意外之者ニ御座候、右等之ケ条ヲ以事実御洞察可

被下候、御当地江州・大坂之町人等段々

朝廷江献金奉願候者も不少候、

御国江も町人等日々之陣中御見舞引も切らず、御貸上

ケ或ハ献金等仕度願出候も有之、

御威光誠ニ無申計難有次第御座候、

一是迄會津領江州辺高二万石余、薩・長両藩為軍費被下

と之

御沙汰、御承知相成候得共、

朝廷御用途御不足之砌、御返上之方可然長州談合、返

上之御願被差出候、大坂鎮台も御国江可被 仰付御内

評ニ被相下候得共、是以同断御断被 仰立候、即今之

処にて勢ニ乗候様之儀、第一 御徳望ニ関係いたす事

候処、右様 御趣意相頭候得ハ、為

皇国一筋ニ御尽力被為遊候

御忠誠、弥可相貫儀と大慶仕候、

一仙臺も近々上京と申事候処、重役上京、會津征伐一手

ニ被 仰付度願出申候、関以西ハ大概不日ニ一定可致

と見込候得共、関以東甚六か鋪事候処、仙臺より右様

願出、官軍ニ属シ候得ハ別て大幸之次第、巢穴ヲ碎

候儀も安カルヘク候、何分一体御治定之上、征東之儀

ニも及可申候、

一去ル十一日、備前比置帯刀西之宮為警衛、兵庫通行之

節、英人一人行列ニ踏入候て、再三制止候得共不聞入

さりし由にて、終ニ同人家来鎗ヲ以突、剩へ逃去候十

人位之夷人を及砲発候故、夷人も大ニ激怒し、二三百人銃隊上陸及砲戦候由、甚無法ノ所為ト六か鋪申立候模様ニ御座候、未外國御布令ニも不相成内、大事之前之小事ヲ引出シ、於

朝廷も別て御心配之御事ニ御座候、(下立)岩下氏杯嘸心配と相考申候、しかし是ハ万国之公法ヲ以て接ニ相成外無之、是か為ニ

朝廷之和親条約を破ルト申様之事ハ、懸念無御座候、未談判之次第等大坂より報知無之候、

一尾州候ハ、依願一昨十四日御帰国相成申候、是ハ内輪奸党段々相起、此節ハ、

王命を借断然御掃攘、全国一体ヲ以爲

朝廷御尽力可被成、最早大義滅親之断決ニて、万一東

軍押上候節ハ、国之あらん限りハ防禦可仕と之御事候由、

一紀州色々説有之候得共、兼て高野山屯集之鷲尾卿、初之官軍江弥応援、残徒之賊を討候由、是も近々上京之由、肥前も当候上京相成由ニ御座候、

一昨十五日

主上 御元服、伏見宮

御加冠、正三卿(正統訂案徳)

御理髪首尾克被為濟候付、今日議定衆御參賀被為在、

太守様ニも 御參

朝、

紫宸殿 清涼殿御飾物等御拜見被為在、申半刻

御退散被遊候、

右ハ今日飛脚被差立、荒々形行申上候、尚近日誰そ

可被差立候付、委曲可申上候、以上、

正月十六日

大久保一藏(利通)

蓑田傳兵衛様(長胤)

(國立國會圖書館憲政資料室所蔵本にて校訂)

七九二ノ二
同日西郷ノ書牘アリ、大久保ノ書牘ト照応アルニ因リ、

之ヲ載ス、

尚々、主上ニも昨日御元服被為在、恐悦此事ニ御座

候、将又京・伏見・大坂町々より毎日酒肴を捧、勝

軍ヲ奉祝候義過分之事ニて、是程文幕・會被悪居候

事哉と、今更驚計ニ御座候、十文字之御旗ヲ見計候

へハ、老若男女拜を成し手を合、薩摩大明神様と唱

候事ニて、難有くくと申声而已ニ御座候、民心

悦服いたし候義、実ニ王師とハ此様之事を申もの歎

と奉存候、幸一戦争後ハ、米之直段も下落いたし、人民尚悦を成し申候、天幸此事ニ御座候、

中将様益御機嫌能被遊御座、恐悦之御義奉存候、陳ハ大坂落去以來、追々軍威盛ニ相成、土・藝等も皆腹も居り、大ニ相変し、只今ニテハ勤 王之士と相見得申候、容堂公ニハ岩倉卿より大議論を被成、夫より降伏之姿ニ御座候、第一臆心之者ハ成敗之上ニ惑を生し、成敗定候得は決着出来候義ハ常人之事とハ乍申、余リニ鉄面皮之事多ク御座候、御笑察可被下候、官軍之勢ひ日々盛大ニ罷成、大垣・小濱等ハ賊軍ニ与し居候得共、是以歎願いたし東夷征伐之先鋒を被命、実行相頭候処を以、前罪を被免候筋ニ相定申候、宮津杯ハ君侯兩人首級を差出候なり共可致候付、不及滅国様との義迄も申出候由、俗論と申ものハ実ニおそろしきものニテ、不可忍をものヲ忍候事御座候へハ、如何様共転変仕候訳ニテ、胆を消候次第御座候、伊豫之松山も征伐被仰出候得共、是以頻ニ歎願之由ニ被相聞申候、松山・高松ハ土州より願出追討を被命候、桑名ハ細川・彦根外ニ両三藩征討を被命、近々発足之賦ニ御座候、只今ニテハ追々西国は相定候模様ニ御座候、會津ハ上杉・佐

竹・南部江被命、追討之賦ニ御座候、上杉・佐竹等ハ内々相願候向ニ御座候、仙臺も近々京着と申事、東国も官軍ニ属し候趣ニ相見得申候、当分東国之諸侯ハ勿論、民心を離し候策第一之訳ニ御座候間、早々説客を被差出候義ニ御座候、東国ハ勿論、諸国之内是迄徳川氏之領分、旗下之士之知行所共

王民と相成候へハ、今年之租税ハ半減、昨年未納之物も同様被仰出、積年之苛政を被寛候事ニ御座候、此一義ニても東国之民ハ、直様相離れ可申義と奉存候、彼賊を孤立さするの策ハ、早ク相用ひ不申候てハ不相濟、夫迎も酒井等之者ハ、必賊と生死を共ニ可致義とハ奉存候得共、討安キ事ニハ成行可申事と奉存候、関東江逃帰候てより人心如何ニ御座候哉、探索も追々差出置候得共、いまた一左右も無之、定て内乱相生候半欵と被相察申候、是迄之人氣ニテハ、沸騰も生し可申欵と奉存候、東兵ハ薩・長之兵少募を慢、器械之不足を見て暴発之事ニ至り候向ニ御座候得共、却て数千之屍を重、大敗ヲ取候事ニ御座候へハ、もふハ恃もの更ニ無之、余程落胆いたし候ものニ御座候、只恃ミニ相成ものハ海軍而已ニ御座候故、速ニ

朝廷之軍艦四艘を御調之賦ニテ、談判被仰出候事ニ御

座候、左候へハ式艘ツ、薩・長江御願相成筋ニ御決定

相成居申候、乍然いまた御布告ニも不相成内、備前勢

兵庫ニおひて英人と及炮戦、備前ハ散々打成され、英

人大ニ立腹いたし大難事到来之義ニ御座候、堂上より

東久世卿・宇和島侯、後藤・岩下君早々下坂ニ相成、

御布告之上万国之公法を以御所置相成賦ニ御座候、誠

ニ失策を仕出し、苦心之義ニ御座候、白山此節ハ一ト

通ならず王室之為ニ尽力いたし、佛之ミニストル杯も

説ふせ、実ニ大幸之至御座候、各国公使も京都迄御呼

登之都合ニ相運居候間、此度社

朝廷之外国人と相成候義と相考居申候、一昨日ハ

太守様ニも不容易

御褒詞被為在、一同奉恐悦候、

右等之事ハ御家老衆より委細御問越相成候付、文略仕

候、御互ニ大慶此事と奉存候、尚軍威相振、一層之勢

を増し申候、御遙察可被下候、此旨荒々奉得御意候、

恐々謹白、

正月十六日

蓑田傳兵衛様

〔島津忠承氏所藏本にて校訂〕

【参照】

大久保利通日記節録

正月十六日

（前略） 今日飛脚被差立書状差出、

七九二 朝譴ノ公卿ノ参朝ヲ有ス

正月十六日、朝譴各公卿ヲ宥免シ、其朝参ヲ有サル、

（記）

慶應三年十二月九日、王政復古ヲ宣諭セラレ、

特旨ヲ以テ、摂政・関白・征夷大將軍・議奏・国事掛・

守護職・所司代、及ヒ内覧・勅問・撰錄・門流ヲ廢セラ

レ、摂政二條前左大臣敬齊以下数人ヲ免シテ、其朝参ヲ停

メ、或ハ其職ヲ罷メ、或ハ謹慎ヲ命セラレタリ、本日ニ

至リ、二條前左大臣・国事掛朝野親王加陽宮親王ノ外、皆大政一

新、御元服大札行セラル、ヲ以テ宥免、参朝ヲ許サレタ

リ、

七九二ノ一

九條 左大臣孝道

大炊御門右大臣信家

一條前右大臣(良)
廣幡内大臣(礼)
日野大納言(資)
葉室大納言(順)

一時被止參
朝、可被及

御沙汰筋モ有之候処、大政御一新、

且

御元服大礼被為行候、旁自今出仕可有之旨、被 仰出

候事、

但

日野・葉室等辞官並本番所小番御免之儀、申達候
事、

七九二〇二

近衛前左大臣(忠)
近衛新前左大臣(房忠)
鷹司前右大臣(輔)
德大寺前右大臣(純)
六條中納言(容)

頃年来逆賊慶喜並奸吏會・桑等之申請ニ隨、失

朝威件々不少、屹卜御糺明モ可被
仰付候得共、此度大政御一新、且
御元服大礼被為行候旁、格別之以
思召被宥恕、參
朝被 免候事、

内

六條中納言辞官、本番所小番御免列申達候事、

七九二〇三

飛鳥井大納言(雅)
廣橋大納言(胤)
野宮中納言(定)
久世前宰相中將(通)
頃年来逆賊慶喜並奸吏等企望ニ任セ、万端行横道蔑
朝憲、營私利候件々不容易次第、嚴重可被
仰付之処、大政御一新之折柄今般
御元服大礼被為行候旁、格別厚
御憐愍ヲ以、自今參
朝被 免候事、
但

辞官並本番所小番

御免列之儀、申達候事、

七九二ノ四

柳原大納言(愛光)

頃年来賊慶喜並奸吏之処分ニ随ヒ、

朝議ヲ誤リ候件々ハ勿論、或ハ正義ヲ唱、曖昧タル心

底、全宮私利候所業、其罪不輕、屹度嚴重ニ可被

仰付之処、大政御一新、今度 御元服大札被行候折柄、

格別厚御憐愍ヲ以、自今参 朝被免候事、

但

辞官本番所御免列之儀申達候事、

七九二ノ五

豊岡大藏卿(資)

始終趨走于権門以私心破公議、且利慾之心不少、彼是

御不審之筋モ有之、旁屹度御糺明可有之候処、大政御

一新、且今度

御元服大札被為行候折柄、格別厚

御憐愍ヲ以、自今参 朝被 免候事、

但

辞官本番所参勤事、

七九二ノ六

伏原三位(宣)

裏辻中將(愛公)

員外之身トシテ漫リニ要路ニ交通シ、大臣ヲ愚弄シ、

私利ヲ恣ニ為ノ条、其罪不輕、屹度可被処極刑之処、

大政御一新、且今度 御元服大札被為行候折柄、格別厚

御憐愍ヲ以、自今参

朝被 免候事、

但

伏原三位本番所参勤、裏辻中將辞官之事、

別紙写之通、参与衆ヨリ之御廻章安藝守様(州)衆ヨリ

相達申候付、本書ハ越前様衆へ相廻申候間、写相添此

段申上候、以上、

辰正月二十二日

新納嘉藤二(立夫)

園山(金生)
糺様

【参照】

大久保利通日記

正月十七日

旧臘九日、被止参 朝候公卿方、二條家、尹宮ヲ除之

外凡テ被免候事、

七九三 皇族・公卿・諸官人ニ維新ノ趣旨ヲ諭シ

激励ス

正月十六日、維新ノ趣旨ヲ諭シ、皇族・公卿・諸官人ヲ
激励セラル、

(記)

本日、宮・堂上及ヒ諸官人ニ諭令ヲ降シ、今般賊徒^(一) 伐
皇威隆盛ナルニ及ンデハ、宮・堂上、及下非藏人・諸官
人ニ至ル迄、感激興起スベキノ時期ナルヲ問ハス、因循
ニ沈ミ、利禄ニ耽ルコトヲ責メ、憤發文武ヲ研習シテ、
朝家ノ用ニ立ツコトヲ志シ、奢侈ヲ戒メ、官民ノ差別ヲ
遺シ、倨傲不遜ノ挙動ナカラシメ、漫ニ朝威ヲ藉リテ、
貧^(貧極カ)ノ行アリシ者モ、寛典ニ処シ、追究セラル、コトナ
キニ仍リ、尔今慎心スベキコトヲ令シ、尚其行為ヲ悛メ
サル者ハ、貴賤ヲ問ハス、嚴科ニ処スベシト、令セラレ
タリ、

七九三ノ一
今般賊徒追伐被

仰出、

皇威漸盛ニ被為成候就テハ、

上親王・公卿ヨリ下非藏人・諸官人ニ至ル迄、感激奮
發

朝廷之御為擲身命、忠勤可仕之処、傍觀座視尺寸之功
モ無之輩、剩自己之利禄ヲ貪リ、私ニ大禄ヲモ可賜哉
抔ト、尊仕居候者モ有之哉ニ相聞、以之外ノ事ニ候、
諸家世襲之禄ニ至リテハ、時宜ニヨリ被為減少候トモ、
加増被

仰付候儀ハ無之候、但シ此上奉公ノ廉ニヨリ、功勞有之
候向ハ、其身限り加禄ヲモ可賜儀ニ候、官位ニ至リ候
テハ、同様世襲之旧弊ハ御改革被遊、人材ニ志シ御補
任可被在義^(為脱カ)ニ候間、一同其心得ニテ、文武之事業精々
勉勵可仕候、從前在

朝之人々、武ハ唯武家之業ニテ、於

朝廷御用ヒ不被為在事ト存シ、一切致廢棄候而已ナラ
ス、文芸ニ至リ候テモ、固陋拙劣草莽布衣之士ニハ万
々不相及、徒ニ軟媚之風ヲ喜ビ、上品抔ト称シ、花奢
風流ヲ專ト致シ候ニヨリ、滿
朝婦人ノ如ク、遂ニ紀綱衰弛

皇道陵夷ニ至リ候段、実以可愧可歎之至リニ候、向後
讀書・擊劍ヲ始メ、文武之大道ニ至リ、且夕講究可仕、

精熟之上ハ応其材、夫々御登庸可被為在

思食ニ候間、無懈怠可心懸候、尤此御時節ニ至リ官武之差別無之儀ニ候間、武家輩ニ対シ倨傲不遜、万一確執ヲ生シ候テハ、不容易儀ニ候間、呉々可相心得、家来・下部等ニ至ル迄、

朝廷之御威光ヲ仮リ、勤

王ヲ口実トシテ世人ヲ欺キ、金穀ヲ貪リ候者モ可有之哉ニ付、急度可申付候、且今度赦令被行、有罪之者モ夫々寛大之御所置被為在候得共、尚此上怠惰悖戻之徒ハ、不撰貴賤嚴罰可被

仰付儀ニ候間、此旨兼テ可相心得様

御沙汰候事、

右之通官・公卿・非藏人口向諸官人限り被

仰渡候事、

参与

尾張大納言殿

越前宰相殿

土佐前少将殿

薩摩少将殿

安藝少将殿

宇和島少将殿

細川右京大夫殿

別紙写之通参与衆ヨリ御廻章、安藝守様(州)衆ヨリ相達申候付、本書ハ越前様衆へ相廻申候間、写相添へ此段申上候、以上、

辰正月二十二日

新納嘉藤二

糺様

七九三ノ二

正月二十九日、藩老前項二令ヲ藩地家老ニ報ス、九條左大臣様外ニ拾八人、一時被止参

朝可被及

御沙汰筋モ有之候処、大政御一新且

御元服大礼被為行候旁、自今出仕且今般賊徒追伐被

仰出、

皇威漸盛ニ被為成候ニ付テハ、上親王・公卿ヨリ下非藏人・諸官人至迄、文武之事業精々勉勵可仕候様ト之儀、別紙二通之通被 仰付、達貴聞、御留守居首尾書相添、此段申越候条、
中將様可被達

明治元年(1868)

御聴候、以上、

辰正月二十九日

關山 糺

島津圖書殿

桂 右衛門殿

川上龍衛殿

七九四 島津忠義実名・花押改メ藩地ニ報ス

正月十六日、忠義旧名及ヒ花押ヲ改メ、藩地ニ報ス、

(記)

忠義、旧名茂久ト称セシハ、將軍家茂ノ時家ヲ継ギ、家例ニ仍リ諱ノ一字ヲ授ケラレ、茂久ト称フ、是ニ徳川氏征討ノ令ヲ布カル、

朝廷ニ対シ徳川家ノ諱ヲ唱フルヲ憚リ、家系ノ通字忠ナルヲ以テ、忠義ト改メタリ、

七九四ノ一
太守様御実名・御花押、別紙之通被

召替候旨、被

仰出候ニ付、一統奉承知候様、左候テ忠之字並同唱迄モ可致遠慮旨、向々へ致通達候、此段申越候条、

中将様被達 御聴、

大奥其外様へ被申上、其許申渡之儀ハ、何分モ可被取

計候、以上、

辰正月十六日

關山 糺

島津圖書殿
(久治)

桂 右衛門殿
(久武)

小松帶刀殿
(希慶)

川上龍衛殿
(久齡)

町田内膳殿
(久憲)

忠義



右之通

御実名・御花押被

召替候旨、被

仰出候、

正月

御取次

吉之助
(郷西)

糺江(山奥)

七九四ノ一
二月^日藩地ニ於テ改名ヲ達シ、藩内ノ同文唱呼ヲ停メタ
リ、

太守様 御実名、忠義ト被召替候旨、被仰出候段御到來候、依之一統奉承知、右御実名之字、且又唱同様之名乗トモ、早速可相改候、此旨向々へ可致通達候、

二月

龍衛(上川)

七九五 戦亡兵ノ靈祀下賜金及ヒ人名ヲ報ス

正月十六日、戦亡兵靈祀下賜金ノ旨ヲ藩地ニ通シ、併セテ其人名ヲ報ス、

(記)

正月十二日、戦亡兵靈祀トシテ金ヲ賜フ、本日人ヲ藩地ニ下シ之ヲ達セシメ、厚ク遺族ヲ賞セシメ、併セテ戦亡人名ヲ通牒シタリ、

七九五ノ一
殉国戦死之者へ賜御金五百兩、葬礼設一社、可被命祭

祀

思食候旨、被為蒙

勅命候段ハ別紙通ニテ、賜金才領御小姓与久土目慎太郎へ被仰付、今日急ニテ飛脚同立ニテ差立被遣候、右戦死人数名書別紙差越候付、右勅書親類等へ拜見被仰付、左候テ別段葬式料頂戴被仰付候儀共ハ、於其許御吟味有之度、尤設一社聚忠魂、永可被命祭祀候様、厚キ御趣意之事情付、格別御手厚ク御取扱有之度候、尤戦死人数鬢髮之儀、爰許本宮役所ヨリ、陸軍所へ向ケ差遣候付、ヲノヅカラ申出ニテ可有之候間、親類へ引渡候儀共ハ、何分モ可被取計候、此段申越候、以上、

但

賜金之儀ハ爰許本宮役所ヨリ、其許陸軍所へ相届候様、才領へ申渡置候、為御心得申越候、

辰正月十六日

關山 糺

島津圖書殿

桂 右衛門殿

小松帶刀殿

川上龍衛殿

明治元年(1868)

町田内膳殿

(按)

別紙 勅書ハ前項ニアリ、

右正月三日伏見ニテ

七九五ノ二

戦亡兵人名

人馬方

堀 彌之助

戦兵

白尾孫兵衛

一番隊

右同

深手八日死

宅間惣左衛門(遺忠)

小頭見習

伊集院金次郎(正進)

右正月四日伏見高瀬川ニテ

同

戦兵

山田孫一郎

入 佐 助(兼友) 八

右正月三日伏見奉行所ニテ

右同

式番隊

福田喜左衛門(政舊)

小頭

右正月五日鳥羽ニテ

西 藤次郎(長孝)

四番隊

戦兵

柳田藤左衛門(安則)

平岡彦九郎(之綱)

五番隊

兵糧方

戦兵

加治木清之丞(兼之)

岩山左平太(直義)

右正月三日伏見ニテ

右正月四日鳥羽ニテ

三番隊

監軍

右正月五日淀ニテ

六番隊

椎原小彌太〔國重〕

拾貳番隊

隊長

伊集院與一〔兼豊〕

戦兵

肥後嘉二〔盛徳〕

小頭

平川助左衛門〔常行〕

右正月三日夜鳥羽ニテ

右同

野村清兵衛〔盛英〕

右正月五日淀堤ニテ

一番遊撃隊

溝口雄四郎〔俊稔〕

右正月四日鳥羽ニテ

隊長

市來勘兵衛〔殺武、異本改正〕

右正月四日鳥羽ニテ

二番遊撃隊

關十郎左衛門〔長信〕

深手六日死

右正月五日淀ニテ

八番隊

前谷宗知〔惟則〕

右正月六日八幡ニテ

三番遊撃隊

田中直次郎〔守時〕

鎌田尚圓〔政厚〕

右正月四日鳥羽ニテ

橋口彦四郎〔兼盛〕

九番隊

赤井清心〔直正〕

正月五日手負六日死

右正月五日淀川堤ニテ

一番大砲隊

大河平壯之助〔隆近〕

右正月六日

一番大砲隊

堅山卯一郎〔利意〕

明治元年(1868)

右正月三日伏見奉行所攻之節

大山源右衛門(行次)

讚良清藏

下人

太郎

右正月五日淀橋詰ニテ

二番大砲隊

川西與十左衛門(幸夷)

右正月四日鳥羽ニテ

伊藤強右衛門(祐啓)

分隊長中島彌次郎(広庭)

大場軍輔(英鳳)

四本左平次

右正月五日鳥羽街道ニテ

臼砲隊

玉薬方

家村彦五郎(住彦)

右正月五日淀ニテ

諸郷

一番隊

右正月三日竹田街道ニテ

高岡

中原八郎

諸郷

二番隊

加世田

右正月四日鳥羽ニテ

諸郷

五番隊

都城

肥田雄太郎(景直)

右正月五日淀ニテ

右同

濱田才之丞(義秀)

右同

江口孝右衛門

右正月六日淀橋本ニテ

諸郷

六番隊

知覽

村尾十次郎(符直)

後死ス

戦兵

八田幸輔

右正月五日淀橋堤ニテ深手、同十三日死

(六月三日上野東叡山の負傷がもとで死す)

貴島勇右衛門(兼孝、雄右衛門子)

鹿籠

有川嘉吉郎(貞直)

後死ス

西郷信吾(信)
塩田雄藏(国幸)

右正月五日淀ニテ

御兵具方隊

足輕

篠崎勘七(知明)

小頭

相良八郎兵衛(貞直)
松崎莊八(貞直)

右正月三日鳥羽ニテ

右同

藤崎甚四郎(敬直)

(八月十三日金津で戦死)

長崎直五郎

右正月四日鳥羽ニテ

右同

戦兵

町田仲次郎

手負正月十一日死ス

右同

竹下平左衛門

正月六日八幡ニテ手負
十日死ス

上村戸右衛門(清香)

右戦死

一番隊

小頭見習

加世田彌右衛門
山之内半左衛門
日高壯之丞
高城十左衛門

明治元年(1868)

蒲生彦四郎

四番隊

青山源七郎

吉田彦五郎

小山嘉太郎

後死ス

山之内雄助(弘通)

伊集院彦左衛門

大脇源次郎

尾上為八郎

中村新五左衛門

三番隊

小頭

市來喜之助

五番隊

丸田仲之丞

隈元清五郎

六番隊

宮之原孫左衛門

兒玉八次

六番隊

染川彦左衛門

小倉愛之丞

山口新太郎

相良壯五郎

長野仲之丞

永吉徳次

有馬清一

梅北龍太郎

濱田部左衛門

永田龍五郎

端山彦左衛門

四本助十郎

宇宿彦左衛門

宅間榮之丞(道近)

後死ス

平田喜右衛門(正次)

平川丈助(常尚)

貴島卯太郎

分隊長

吉田喜藏

七月二十九日奥州二本松で戦死ス

徳尾源七郎(為徳)

日高郷左衛門

九番隊

後死又

鮫島雄四郎

阿多孫次郎(實輝)

税所清之介

有馬春齊

十二番隊

宮内雄蔵

田中源蔵

平田彦五郎

尾上門次郎

一番遊撃隊

餅原平次郎

若松彦八

川上宗次郎

奥良之丞

堀添清左衛門(篤行)

久保武之介

監軍

有村甲蔵

二番遊撃隊

佐藤賢助

山澤鐵之丞

東郷次郎作

兒玉平次郎

河野喜次郎

安藤直五郎

川崎休右衛門

三番遊撃隊

和田乘左衛門

指宿一二

豎山半次郎

山口良之丞

大山一二

四本喜之助

廻平八

一番大砲隊

飯牟禮喜之助

汾陽尚次郎

伊地知彌兵衛

廣瀬喜兵衛

明治元年(1868)

集成館

人足

松元直之丞
坂本彦兵衛
川上孫七
柴山矢八

二番大砲隊

益満新七郎
喜兵衛

白砲隊

川田武兵衛
川田作左衛門
鎌田甚之丞
神宮司仙之介
畠山孫左衛門
川上萬助

監軍

竹之内宗之丞
平野甚助
井上助右衛門

諸郷

一番隊

後死又

高岡

入田新左衛門
(親哲)

高岡

毛利強兵衛付足輕
上野十太郎

後死又

諸郷

二番隊

監軍

松岡祐右衛門
梶原彌五郎
古藤新之助

加世田

黒川伊右衛門
指宿静蔵

伊作

山之内平右衛門

右手負

諸郷

六番隊

知覧

右同

御兵具方隊

足輕

新穂嘉藤太

安田平内

肥田藤吉

大峰勘十郎

妹尾助五郎

高橋庄之丞

岸良壮兵衛

高城吉兵衛

高城休之進

江平仲兵衛

伊佐敷彌一郎

桐野藤五郎

前田正之丞

右ハ去ル三日ヨリ同六日迄、手負・戦死人数相知居候丈、

先日中御届申上置候付、其後細々取シラベ候処、右之通

御座候間、此段申上候、以上、

正月十六日

本營役所

七九六 島津忠義病ニヨリ参朝ヲ辞ス

正月十七日、忠義病ヲ以テ参朝ヲ辞ス、

(記)

本日、忠義参朝ノ召命アリシモ、病ノ為メ之ヲ辞セリ、
之職制改定アルニ因レリ、

私事、今十七日参 朝可仕蒙

勅命候得共、不快ニ有之、御断申上候、此段宜敷御執

奏奉願候、以上、

正月十七日

薩摩少将

七九七 島津忠義海陸軍務総督ニ任セラル

正月十七日、忠義海陸軍総督ニ任ス、

(記)

本日職制ヲ定メ、神祇・内国・外国・海陸軍・會計・刑法・制度ノ七科ヲ太政官ニ置キ、議定之ヲ分督シ、参与之ヲ分掌セリ、忠義海陸軍務總督ニ任ス、同日ニ仁和寺宮・岩倉議定同シク命ヲ承ケラレタリ、
七九七ノ一

薩摩少將

海陸軍務總督被

仰付候事、

七九七ノ二
留守居ヨリ届書ヲ載ス、

一 御書附 二 通

内一通

太守様海陸軍務總督被仰付候儀

一通

海陸軍務總督仁和寺宮様等ノ儀

右ハ今日

太守様御用被在、御參 内被仰出候得共、御不快ニテ御断被仰上候処、御名代罷出候様被成御達候付、私罷出候処、龜之御杉戸内ニテ、御同人様ヨリ被成御渡、御請書差上候様被成御達候付、可申上旨申上置候、

一 御書附一通

但

岩下佐次右衛門・西郷吉之助・大久保市蔵可為徵士被仰付候儀、

長谷美濃権介様(信成参与)

右龜之御杉戸外ニテ、右御同人様ヨリ被成御渡候付、可申上旨申上置候、

右之通今日私相勸申候間、御別紙三通相添、此段申上候、以上、

辰正月十七日

新納嘉藤二

糺様

追テ

中将様於御国許、御承知被遊候上、以飛札参与衆迄、御礼被仰上候様奉存候、此段モ申上候、以上、

七九八 三職分課廻達書

同日頒布セラレタル三職分課ヲ載ス、

(記)

七九八ノ一
三職分課

總裁官

万機ヲ總裁シ、一切之事務ヲ決ス、

議定官・公卿・諸侯

事務各課ヲ分督シ、議事ヲ定決ス、

内国事務總督

京畿庶務及諸国水陸運輸・駅路・関市・都城・港口・

鎮台・市尹之事ヲ督ス、

外国事務總督

外国交際・条約・貿易・拓地・育民ノ事ヲ督ス、

海陸軍務總督

海軍・陸軍・練兵・守衛・緩急軍務ノ事ヲ督ス、

会計事務總督

戸口・賦役・金穀・用度・貢獻・營繕・秩祿・倉庫

ノ事ヲ督ス、

刑法事務總督

監察・弾劾・捕亡・断獄・諸刑律ノ事ヲ督ス、

制度事務總督

官職・制度・名分・儀制・撰叙・考課・諸規則ノ事

ヲ督ス、

神祇事務總督

参与公卿・徴士

事務ヲ参議シ、各課ヲ分務ス、

内国事務係

外国事務係

海陸軍務係

会計事務係

刑法事務係

制度寮掛

神祇官

徴士無定員

諸藩士及都鄙有才之者撰挙拔擢、参与職ニ任ス、又分

課ニ依テ其課ノ掛トナル者、其事ヲ専務ス、下ノ議事

所ニ在リ、則議事官タリ、

撰挙之法、公議ヲ執リ拔擢セラル、則徴士ニ命ス、在

職四年ニシテ退ク、広ク賢才ニ讓ルヲ要トス、若其人

当器尚退クベカラザル者ハ、又四年ヲ延ベ、在職八年

トス、衆議ニ執ルベシ、

貢士大藩三員・中藩二員・小藩一員

諸藩士其主之撰ニ任セ、下之議事所へ差出す者ヲ貢士

トス、則議事ニ与リ、輿論公議ヲ執ルヲ旨トス、貢士
定員アツテ年限ナシ、其主ノ進退スル処ニ任ス、又其
人ノ才能ニ因テ、徴士ニ撰挙スベシ、

七九八ノ一

三職分課回達書

総裁

有栖川帥宮(熾仁親王)

副総裁

兼外国事務総督

三條前中納言(実美)

兼海陸軍務會計事務等総督

岩倉前中將(具徳)

神祇事務総督

有栖川中務卿宮(親仁)

中山前中納言(忠能)

白川三位(資訓)

同掛

六人部雅楽(愛足)

樹下石見守(茂国)

谷森内舍人(種松)

内国事務総督

同掛

正親町三條前大納言(実愛)

徳大寺中納言(則実)

越前大蔵大輔(松慶)

土佐前少將(山内)

辻将曹(熾維)

大久保一蔵(通利)

田宮如雲(師徳)

廣澤兵助(真臣)

神山左多衛(郎應)

中根雪江(質師)

外国事務総督

山階宮(晃親)

三條前中納言(実美)

東久世前少將(禧通)

宇和島少将(伊達)

同掛

後藤象二郎(元燁)

岩下佐次右衛門(方平)

海陸軍務総督

明治元年(1868)

仁和寺宮嘉彰
親王

岩倉前中将具

薩摩少將忠
義

同掛

同十九日罷ム

廣澤兵助

西郷吉之助盛隆

會計事務總督

中御門中納言之經

兼岩倉前中將

安藝少將茂
勲

西四辻大夫業公

同掛

兼制度係

三岡八郎正公

小原仁兵衛忠
寬

長谷三位信
篤

細川右京大夫喜
廷

同掛

十時攝津維
惠

津田山三郎信
弘

制度寮總督

萬里小路右大弁宰相博
房

同掛

福岡藤二孝
悌

田中國之助

兼三岡八郎

右之通被 仰出候間、為御心得申入候、御廻覽可返

給候也、

正月十九日

参与

尾張大納言殿

越前宰相殿

土佐少將殿

薩摩少將殿

安藝少將殿

宇和島少將殿

細川右京大夫殿

^{七九八ノ三}同時ニ諸藩主及ヒ諸藩士ニシテ、諸務分督ヲ命セラレタ

ル人名ヲ載ス、

神祇事務總督兼知 中山前大納言

同掛
中務卿宮
白川三位
六人部是愛
樹下石見守
谷森内舍人

内国事務總督兼知
正親町三條前大納言

德大寺中納言

松平大藏大輔

山内前少將

辻將曹

大久保一藏

田宮如雲

外国事務總督兼知

三條前中納言

山階宮

宇和島少將

東久世前中將

後藤象次郎

同掛
海陸軍務總督兼知

岩倉前中將
仁和寺宮

同掛
薩摩少將
廣澤兵助

會計事務總督兼知

西郷吉之助

岩倉前中將

中御門中納言

安藝少將

西四辻大夫

三岡八郎

小原仁兵衛

長谷三位

細川右京大夫

十時攝津

津田山三郎

制度事務總督兼知

萬里小路右大弁宰相

同掛

三岡八郎

福岡藤二

【参照】

大久保利通日記

正月十七日

明治元年(1868)

今日太守公海陸軍事務総督被為蒙仰候、

七九九 岩下・西郷・大久保徴士ヲ命セラル

正月十七日、岩下・西郷・大久保三人徴士ヲ命セラル、

(記)

七九九ノ一
本日巳刻前四時乃チ召命アリ、大久保一蔵參朝ス、長谷参与
成命ヲ宣シテ、内国事務掛ト為シ、西郷吉之助ヲ海陸軍
掛ト為シタリ、尋テ徳大寺議定則命ヲ宣シテ、岩下佐次
右衛門・西郷吉之助・大久保一蔵ヲ徴士ト為セリ、大久
保謹テ命ヲ領シ、尚忠義ニ聞シテ拜答スベシト上言シテ
退朝、又即時藩邸ニ赴キ、侍臣ニ就キ奉命ノ旨ヲ陳シテ、
許否ヲ請フ、忠義之ヲ聴シ奉命スベシト伝ヘタリ、西郷
ハ未ダ奉答セズ、岩下ハ兵庫ニ在リテ、命ヲ伝フルニ至
ラザリシナリ、

岩下佐次右衛門

西郷吉之助

大久保一蔵

右今度可為徴士被

仰付候事、

七九九ノ二
同日諸藩ニシテ、徴士ヲ命セラレタル人名ヲ載ス、

別紙三通前項同達之通被仰出候、仍申達候事、

正月十七日

荒川(良知)甚作
丹羽(啓)淳太郎
田中(不一)國之助
田宮(篤樹)如雲
林(元輔)左衛門
後藤(孝悌)象二郎
福岡(郡應)藤二
神山(多衛)佐多衛
中根(師實)雪江
酒井(忠通)十之丞
毛(忠)受鹿之助
三岡(由利公正)八郎
岩下(方平)佐次右衛門
西郷(隆盛)吉之助
大久保(利通)一蔵
辻(維樹)將曹

【参照】

大久保利通日記

正月十七日

今辰刻長谷殿ヨリ就 御用、
禁中御仮建へ罷出候様奉承知、四ツ時分ヨリ参
朝、左ノ通、

大久保一藏

櫻井與四郎(元憲)
久保田平司(秀雄)
溝口孤雲(貞直)
津田山三郎(信弘)
土肥典膳(修平)
土倉修理之介(正彦)
牧野權六郎(成慈)
山田一郎(政則)
廣澤兵助(真臣)
井上聞多(尊)
十時掃津(雅志)
小原仁兵衛(忠寛)
中沼了三(之舞)

一内国事務掛被 仰付候事、

同

今度可為徴士被 仰付候事、

右徳大寺殿ヨリ御達ニ付、主人へ申聞御受可申上段言
上、 太守様へ達 御聞候処、御受申上候様御沙汰候
事、

一海陸軍務掛

西郷

長廣澤

右之外段々掛被 仰付候事、

一退散直ニ出殿、徴士且内国事務掛之儀奉伺候処、

御受仕候様 御沙汰之由、求馬殿ヨリ承知イタシ候
事、(鳥津)

一太守公海陸軍事務掛之儀御辞退御断被 仰立候御決

定、

一西郷徴士・参与モ御断之筋決定之事、

此時ニ臨小子苟モ御受之訳無之候得共、尚所存有之
御受決定イタシ候事、

八〇〇 大久保利通有栖川熾仁親王ニ当務ノ要件

ヲ陳上ス

正月十七日、大久保一蔵有栖川総裁宮ニ当務ノ要件ヲ陳上ス、

(記)

本日有栖川総裁宮熾仁親王本藩士参与三人ヲ召ス、岩下佐次右衛門兵庫ニ行テ在ラス、西郷吉之助辞シテ行カズ、大久保一蔵召ニ応シテ参殿ス、宮親シク三日以来ノ勤功ヲ賞セラレ、後日ノ忠勤ヲ望マレ、併テ意見ヲ問ヒ、当務ノ要件ヲ諮詢セラル、大久保深く感銘シ、今日ニ至ルノ情勢ヲ祝シ、向來ノ措置最モ重大ナルヲ以テ、始終戦苦ヲ遺忘セス奮勉セラレ、一時ノ成功ニ安ンジ、因循苟且大機ヲ失セサランコトヲ陳上シ、当務ノ要件トシテ主上八幡行幸在セラレ、直ニ鳳輦ヲ大坂ニ移サレ、蹕ヲ同地ニ駐メラレ、朝廷ノ旧弊ヲ一新シ、外国交際ノ道ヲ処置シ、海陸軍ノ兵備ヲ整頓セザレバ、朝廷ノ基本確立、百度盛挙ニ至ルコト能ハサルノ趣旨ヲ応フ、宮一々嘉納アリテ、懇待ヲ極メラレタリ、大久保深く其恩遇ニ感ジタリ、

【参照】

大久保利通日記

正月十七日(統)

一 今日総裁宮ヨリ参与三人ノ内、就御用参殿候様被仰付、

小子参殿候処、左之通、

三日以来為 皇国尽力、今日之時体ト相変、於

朝廷モ夷ニ 御満足被 思食、於此方大慶ニ存候、尚

乍此上偏ニ御依頼被遊候間、尽精力相務候様、且追々

参

殿無伏臆存慮言上候様、左候テ乍此上見込御尋問ニ付、

一云、尚篤ト勘考談合々上可申上候得共、当座一己之愚考

可奉言上候、今日迄立至リ候次第、夷ニ大慶奉存候処、

此上之処今一層之御大事ニ候間、戦ヲ御忘レ不為在、

断然之御尽力被遊候様、自古一時之功ヲ遂ケ、因循苟

且大機ヲ失候例不少候付、克々御勘考被遊候様云々、

一右ニ付テハ断然 御英決之一事件可被為在奉存候ハ、

主上行幸被促八幡御参詣、自夫浪華

御巡覽、其俣

行在所ト被相定、

朝廷之 旧弊御一新、外国御所置ハ勿論、海陸軍兵備

等之事 御所置被為在度、然ル上ナラデハ

朝廷之御基本相立、百目挙り候儀万々無覺束段云々、
反復申上候処、尤二思召候間、尚 御勸考可被遊卜之
御事ニテ、不容易
御懇命奉拝承候、

ハ〇一 藩庁伏見戦況ヲ藩内士民ニ告達ス

正月十七日、藩庁伏見戦況ヲ藩内士民ニ告達ス、

(記)

本日伏見戦況ヲ管内ニ告達セリ、是ヨリ先戦争ノ所説紛
然、子弟ノ出兵シタル家族ノ如キハ、老幼男女相率ヒテ、
神社仏閣ニ祈誓スルノ情態ナリキ、又本日巳刻城楼ノ警
鐘ヲ鳴ラシテ、非常ヲ伝フ、城下ノ士民喧呼奔馳、転々
人心ヲ煽起ス、士人ハ皆武装シテ指定ノ所在ニ集屯ス、
銃兵ハ操練場ニ行軍発砲操練シ、砲兵ハ海岸砲台ニ集リ、
一門三発ヲ放チテ、士氣ヲ鼓舞セリ、

去ル二日ヨリ翌曉三日ニ至リ、徳川勢戎服大砲等携、
追々伏見表へ出張之趣相聞候得ニ付、別紙式通之通被
仰出、早速伏見又ハ鳥羽街道筋へ兵隊人数繰出相成、
鳥羽街道出張、徳川勢へ右趣意ヲ以及応接候処、彼方

ニモ蒙朝命上京ト申偽、理不尽ニ押通候ニ付、砲発戦
争イタシ候、同四日迄入替々々押寄及合戦候処、悉ク
徳川兵致敗走、且伏見之儀モ同様及合戦、是又勝利ニ
テ、追々賊兵引退候ニ付致追討、淀城迄押詰候処、手
向之兵吾人モ無之、応接之上終ニ城内明渡相成候段、
申来候、尤其後戦争等之次第、追テ報知モ可有之候得
共、先早々一統為心得申渡候、此旨早々向々へ申渡、
諸郷・私領へモ可申渡置候、

島津圖書

小松帶刀

桂 右衛門

川上龍衛

町田内膳

【参照一】

寺師宗道日記明治元年正月十七日晴

四ツ時分^字早鐘鳴リ立、大ニ騒立候ニ付、早速致手当、
市來氏江立寄候て、草牟田隆盛院迎之様馳走候中途ニ
て、不時調練之由承り、大軍繰出候手筈も心得居候処、
谷村武前々^{昌武カ}出役、又銃薬方より附役兩人、藏鍵箱差持
早々参候ニ付、藏明ケ、凡装薬も取調置候、今朝京師

よりの飛脚着候由、八ツ後銃葉方江出席候勢揃之人數江追々行逢候、今晚終番候、歩軍之分ハ調練場ニテ調練有之候、台場之儀は一筒より三發ツ、打方相成候、夥敷候、装葉等は奥之平地地名より繰出相成候由、

(寺師宗道日記(東京大学所蔵)にて校訂)

【参照一】

正月十七日

谷村昌也小吉・安田泰助、肥後熊本へ御使者被遣候処、昨十六日態々罷帰候ヨシ、人馬等之儀ハイツ何時ニテモ、可差出トノ事ニテ候由、

但

肥後表ニテハ、此節ノ事件全ク不相知、御国ニ入候テ承候由、決テ肥後重役之者共ハ疾ニ為存咎ニ候、何ニ程恐懼之姿ニ相見得候ヨシ、安田氏漸之由、中原氏ヨリ承候事、

八〇二 附録会同盟約及諸国巡察使差遣ノ達書

・列侯名印

会同盟約三年一集如式ス、盟ヲ重ヌル也、但約書条件時ニ因テ損益スベシ、

会盟ノ後諸国巡察使ヲ差遣ス、列侯盟ヲ踏ムヤ否ヲ察スル也、尚其巡察事条及使人員數ハ臨時量定スベシ、

別紙之通被 仰出候間申達候事、

正月十七日

下参与

連名略ス

八〇三 附録太政官代下馬之事

總裁官・堂上・諸大名以上、四脚門前柵門外ニ下乗札有之、右之処ニテ下馬之事、

非藏人・諸官人以下藩士ニ至迄、總門外下馬札之処ニテ下馬之事、

下乗之事

親王・相丞車寄切石之上、

堂上・大名四脚門外、

非藏人・諸官人・藩士總門外、

正月

制度寮